

徳島県文化の森総合公園建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 延生軒跡・向寺山古墳 —

昭和62年3月（1987年）

徳島県教育委員会

序

本書は「徳島県文化の森総合公園」建設工事に関連して実施されました、埋蔵文化財の発掘調査概要報告書であります。

「徳島県文化の森総合公園」は置県百年の記念事業として、徳島市八万町向寺山に美術館、博物館、図書館、文化情報コア、文書館などの県の中核的な文化施設が一堂に会した総合公園として、昭和65年度の完成を目指し建設工事が着々と進められております。

造成工事に先立ち、建設地内の埋蔵文化財の発掘調査が実施され、向寺山古墳や阿波藩家老長谷川氏の別荘跡延生軒などの存在を確認することができました。特に延生軒跡から出土しました高級陶磁器類は、当時の上級武士の優雅な生活の一端をうかがい知ることのできるもので、本県内における近世陶磁器の貴重な資料になることと考えております。

なお、本発掘調査にあたりまして多大な御援助、御協力をいただいた関係各位並びに関係機関に感謝するとともに、厚く御礼申し上げます。

昭和62年3月

徳島県教育委員会

教育長 松本 富夫

延生軒跡発掘調査報告

例 言

- 1 本書は徳島県文化の森総合公園建設事業に伴う延生軒跡発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は徳島県企画調整部文化の森建設事務局（旧広聴県民室、県民文化室）の要請を受けて、徳島県教育委員会文化課が実施した。
- 3 発掘調査は昭和58年4月1日から昭和61年3月31日まで行った。
- 4 収録した資料の実測・製図・写真撮影は調査担当者全員が分担であった。
- 5 本書で用いた絶対高は海拔を表わす。方位はすべて磁北である。
- 6 土色の判定に際しては、小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帳」1976によった。
- 7 挿図1の地形は建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（徳島図幅）を転載したものである。
- 8 発掘調査は以下の組織で行った。

調査主体	徳島県教育委員会文化課
調査担当	島巡賢二、池沢茂、近藤幸博、早渕隆人、中村雅一、久保脇美朗、野々村拓也、大谷恭久、佐藤展、湯口雅史、河野剛次、藤友毅の文化課職員と文化財調査員があたった。
- 9 本書の作成にあたり、遺物整理、図面整理等は、島巡賢二、河野剛次、花岡学、堀剛、松岡功が、執筆は島巡賢二、湯口雅史、河野剛次、藤友毅が、編集は島巡賢二が行った。
- 10 今回の発掘調査、整理業務を通じて、文化の森建設事務局ならびに調査作業員の皆様方にお世話になりました。誌上をもって御礼申しあげる次第であります。

延生軒跡本文目次

I	延生軒跡の位置と歴史的環境	1
II	調査に至る経緯	6
III	延生軒跡の調査概略	7
	1. 延生軒の由来	7
	2. 出土遺構の概略	9
	延生軒跡東側部分	10
	イ. 東西排水施設	10
	ロ. 南北排水施設	12
	ハ. 東階段	12
	ニ. 東側外石垣	14
	ホ. 北側内石垣	15
	ヘ. 排水遺構	15
	ト. 西側外石垣	16
	まとめ—延生軒跡東側部分—	16
	チ. 南井戸	18
	リ. 西井戸	19
	まとめ—南井戸・西井戸—	23
	延生軒跡西側部分	24
	ヌ. 北側外石垣	24
	ル. 矩形状区画敷地	26
	ヲ. 北西側石垣拡張	27
	ワ. 北側石垣西階段	28
	カ. 55—8番地南北石垣	29
	まとめ—延生軒跡西側部分—	29
	3. 出土遺物の概略	33
IV	延生軒跡隣接地の概略	38

延生軒跡挿図目次

fig. 1	延生軒跡・向寺山古墳周辺主要遺跡	2
fig. 2	延生軒跡付近地形測量図	11
fig. 3	東階段	13
fig. 4	北側外石垣東階段	13
fig. 5	排水遺構	13
fig. 6	南井戸	20
fig. 7	西井戸	21
fig. 8	北側石垣拡張	25
fig. 9	調査地位置図	32
fig. 10	延生軒跡主要遺構模式図	33
fig. 11	61-1番地地形図	39
fig. 12	道路遺構図	40
fig. 13	道路遺構土層断面図	41
fig. 14	東トレンチ北壁面土層図	42
fig. 15	西トレンチ土壁面土層図	42
fig. 16	57番地地形図	44
fig. 17	57番地南北トレンチ土層図	45
fig. 18	55-6・8番地地形図	46
fig. 19	55-8番地トレンチ土層図	46
fig. 20	55-6番地トレンチ土層図	47
fig. 21	59-3番地グリッド	47
fig. 22	延生軒跡出土遺物	49
fig. 23	延生軒跡出土遺物	50
fig. 24	延生軒跡出土遺物	51
fig. 25	延生軒跡出土遺物	52
fig. 26	延生軒跡出土遺物	53
fig. 27	延生軒跡出土遺物	54
fig. 28	延生軒跡出土遺物	55
fig. 29	延生軒跡出土遺物	56
fig. 30	延生軒跡出土遺物	57

fig. 31	延生軒跡出土遺物	58
fig. 32	延生軒跡出土遺物	59
fig. 33	延生軒跡出土遺物	60
fig. 34	延生軒跡出土遺物	61
fig. 35	延生軒跡出土遺物	62
fig. 36	延生軒跡出土遺物	63
fig. 37	延生軒跡出土遺物	64
fig. 38	延生軒跡出土遺物	65
fig. 39	延生軒跡出土遺物	66
fig. 40	延生軒跡出土遺物	67
fig. 41	延生軒跡出土遺物	68
fig. 42	延生軒跡出土遺物	69
fig. 43	延生軒跡出土遺物	70
fig. 44	延生軒跡出土遺物	71
fig. 45	延生軒跡出土遺物	72
fig. 46	延生軒跡出土遺物	73
fig. 47	延生軒跡出土遺物	74
fig. 48	延生軒跡出土遺物	75
fig. 49	延生軒跡出土遺物	76
fig. 50	延生軒跡出土遺物	77
fig. 51	延生軒跡出土遺物	78
fig. 52	延生軒跡出土遺物	79
fig. 53	延生軒跡出土遺物	80
fig. 54	延生軒跡出土遺物	81
fig. 55	延生軒跡出土遺物	82
fig. 56	延生軒跡出土遺物	83
fig. 57	延生軒跡出土遺物	84
fig. 58	延生軒跡出土遺物	85
fig. 59	延生軒跡出土遺物	86
fig. 60	延生軒跡出土遺物	87

延生軒跡図版目次

- PL. 1 下八万村分間絵図部分 (徳島県立図書館蔵) (1)
- PL. 2 下八万村分間絵図部分 (徳島県立図書館蔵) (2)
- PL. 3 下八万村分間絵図部分 (徳島県立図書館蔵) (3)
- PL. 4 下八万村分間絵図部分 (徳島県立図書館蔵) (4)
- PL. 5 延生軒跡遠景 (北より) 延生軒跡遠景 (南より)
- PL. 6 延生軒跡近景 (南より) 延生軒跡近景 (東より)
- PL. 7 延生軒跡全景 (北西より) 延生軒跡全景 (西より)
- PL. 8 東西排水施設 (東より) 東西排水施設 (北より)
- PL. 9 南北排水施設 (北より) 瓦利用排水施設 (北より)
- PL. 10 南北排水施設 (南より) 南北排水施設 (西より)
- PL. 11 北側外石垣東階段 (北より)
- PL. 12 北側外石垣東階段 (東より) 北側外石垣東階段 (西より)
- PL. 13 北側外石垣東階段 (北より)
- PL. 14 北側外石垣東階段 (西より) 北側外石垣東階段 (南より)
- PL. 15 北・東側外石垣 (北より) 東側外石垣 (東より)
- PL. 16 東側外石垣拡張部 (東より) 東側外石垣拡張部 (南より)
- PL. 17 東側外石垣 (東より)
- PL. 18 北側外石垣と内石垣 (東より) 北側外石垣と内石垣 (西より)
- PL. 19 北側外石垣と内石垣 (北より)
- PL. 20 排水遺構と石垣 排水遺構 (北より)
- PL. 21 排水遺構 (東より) 排水遺構 (北より)
- PL. 22 北側石垣遠景 (西より) 北側石垣西階段 (北より)
- PL. 23 北側石垣西階段 (北より)
- PL. 24 北側石垣拡張状況 (北より) 北側石垣拡張状況 (南より)
- PL. 25 石垣拡張状況 (北より) 石垣拡張状況 (東より)
- PL. 26 石垣拡張部断面 遺物出土状況

- P L . 27 北側石垣拡張状況 (西より) 北側石垣拡張状況 (北より)
- P L . 28 北側石垣拡張状況 (西より) 北側石垣拡張状況 (北より)
- P L . 29 西井戸全景 (西より)
- P L . 30 西井戸排水施設 (北より)
- P L . 31 西井戸桢石切組 (東より) 西井戸桢石切組 (西より)
- P L . 32 西井戸覆家遺構 西井戸石組状況 (南より)
- P L . 33 南井戸桢石 南井戸石組状況 (南より)
- P L . 34 61-1 番地全景 (南より) 61-1 番地近景 (西より)
- P L . 35 延生軒跡進入路 (西より) 延生軒跡進入路 (東より)
- P L . 36 61-1 番地西トレンチ 61-1 番地東トレンチ
- P L . 37 57番地全景 (西より) 57番地全景 (南より)
- P L . 38 57番地北トレンチ (西より) 57番地南トレンチ (西より)
- P L . 39 55-8 番地南北石垣 (東より) 55-8 番地南北石垣 (南より)
- P L . 40 55-8 番地トレンチ (南より)
- P L . 41 55-6 番地トレンチ (西より) 55-6 番地トレンチ (南より)
- P L . 42 59-3 番地グリッド
- P L . 43 延生軒跡出土遺物
- P L . 44 延生軒跡出土遺物
- P L . 45 延生軒跡出土遺物
- P L . 46 延生軒跡出土遺物
- P L . 47 延生軒跡出土遺物
- P L . 48 延生軒跡出土遺物
- P L . 49 延生軒跡出土遺物
- P L . 50 延生軒跡出土遺物
- P L . 51 延生軒跡出土遺物
- P L . 52 延生軒跡出土遺物
- P L . 53 延生軒跡出土遺物
- P L . 54 延生軒跡出土遺物
- P L . 55 延生軒跡出土遺物
- P L . 56 延生軒跡出土遺物

- P L. 57 延生軒跡出土遺物
- P L. 58 延生軒跡出土遺物
- P L. 59 延生軒跡出土遺物
- P L. 60 延生軒跡出土遺物
- P L. 61 延生軒跡出土遺物
- P L. 62 延生軒跡出土遺物
- P L. 63 延生軒跡出土遺物
- P L. 64 延生軒跡出土遺物
- P L. 65 延生軒跡出土遺物
- P L. 66 延生軒跡出土遺物
- P L. 67 延生軒跡出土遺物
- P L. 68 延生軒跡出土遺物
- P L. 69 延生軒跡出土遺物
- P L. 70 延生軒跡出土遺物
- P L. 71 延生軒跡出土遺物
- P L. 72 延生軒跡出土遺物
- P L. 73 延生軒跡出土遺物
- P L. 74 延生軒跡出土遺物
- P L. 75 延生軒跡出土遺物
- P L. 76 延生軒跡出土遺物
- P L. 77 延生軒跡出土遺物

I 延生軒跡の位置と歴史的環境

(fig. 1 P L, 5~7)

延生軒跡は徳島南部平野でも、園瀬川の堆積作用によったと思われる南西端部付近の、徳島市八万町向寺山に所在しています。方上、北山方面からのびる前山山塊の北端裾の標高10数m前後の場所に立地し、星河内谷川、園瀬川の両河川をはさんで眉山山塊の北麓一帯、徳島城下、遠くは淡路島が望まれます。

星河内に源を発した星河内谷川は、前山山塊の西端脇を沿うように流れ、延生軒跡の東方で園瀬川に合流しています。星河内谷川は別名「桃館川」とも呼ばれ、小河川ながら詩や句に詠まれるなど、延生軒とは深い係わりをもつものです。

園瀬川は名東郡佐那河内方面に源を発し、山間部を流れ進んだ後、延生軒跡の西方、前山山塊と眉山山塊がもっとも接近したあたりから徳島南部平野に流れこみ、延生軒跡の前を東方へ流れ込み、星河内谷川を合流し一本の流れとなつて、紀伊水道へ注いでいます。

今日では園瀬川は延生軒跡のすぐ北側を、前山山塊に沿うように東方向へ流れています。この流れは河川の改修工事の結果によるものです。河川改修が行われ始める蜂須賀氏の阿波入国以前の流れは、前山山塊と眉山山塊がもっとも接近している延生軒跡西側の寺山付近から、現在の流れよりも眉山山塊側に寄った馬場、市原、夷山あたりを経て紀伊水道へ流れこんでいたようです。

延生軒跡の周辺や星河内谷川、園瀬川の流域には古代から近世に至る間の遺跡の立地が数多く認められます。

延生軒跡の東側、文化の森を囲むように北方へのびた尾根上の標高92m付近に、土地の高まりと片岩礫の散乱する地点があり、古墳ではないかと考えられます。同じ尾根筋の先端側へ下った、標高42m付近にも古墳の存在があったようですが、水道タンクの建設に伴って破壊されてしまいました。

法花谷古墳群・養老軒 谷をひとつはさんだ東側の法花谷の丘陵に法花谷古墳群と養老軒跡が立地しています。標高34.0mの三角点脇に構築されていた古墳は、土砂採取により数年前に消滅してしまいました。全体的に開発や開墾が進み、古墳群の残りはあまりよくありません (P L, 4)。

天神山古墳 (犬山古墳群) 八万町犬山から大野へかけて点々と続く独立小丘陵群は通

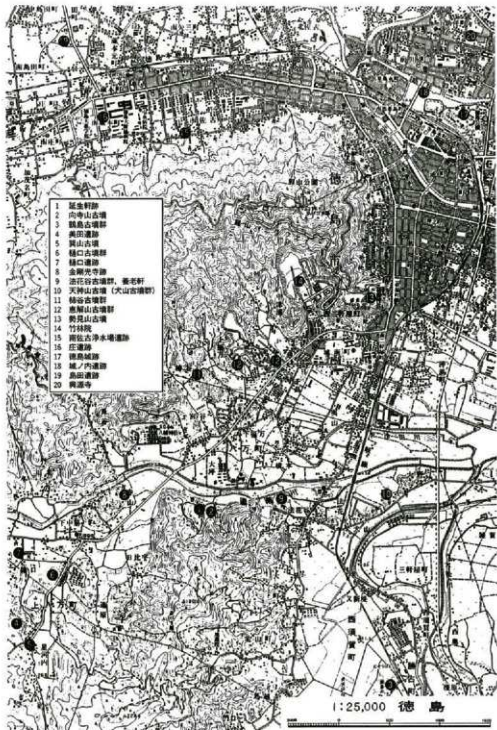


fig. 1 延生軒跡・向寺山古墳周辺主要遺跡

称「七ツ山」と呼ばれ、犬山古墳群の立地がみられます。そのうちの天神山からは頂部付近において、一字一石経を埋納した近世の経塚が、尾根丘陵上からは緑色片岩の組合式箱形石棺と人骨、鉄剣が発見されましたが、土取のため削平されてしまいました。

鶴島古墳群 西須賀町鶴島の通称「とっくり山」と呼ばれる独立丘陵上に営まれた古墳群で、竪穴式石室1基、石蓋土墳墓1基、箱式石棺8基の多岐にわたる埋葬主体が検出されました。竪穴式石室は幅0.9m、全長約6mにも及ぶ狭長なもので、副葬品は見られませんでした。石蓋土墳墓は岩盤を削り貫いて棺としたものです。箱式石棺群は規模から大小の二種類に大別できるようですが、小規模な石棺の方が精巧な作りとなっています。残念ながら、この鶴島古墳群も県営住宅建設のため破壊され消滅してしまいました。

金剛光寺跡 延生軒跡の西方0.8km付近の團瀬川脇の独立丘陵上にあり、寺山という地名にその面影が偲べれます。延生軒跡の立地する向寺山の地名も、寺山に向いあった土地に由来するものです。奈良時代の八葉複弁蓮華文軒丸瓦が出土していますが、伽藍配置や規模等の詳細については知られていません。

樋口古墳群 上八万町樋口の團瀬川によって形成された沖積地を眼下に望む丘陵上に造られた古墳群です。1号墳は直径約20mの円墳で、内部主体は両袖式、側壁持ち送りの横穴式石室です。2号墳は直径約20mの円墳で、内部主体は片袖式の横穴式石室です。

樋口遺跡 樋口古墳が立地する丘陵の西方の沖積地に営まれた遺跡です。上八万小学校の体育館建設に伴って発掘調査がなされ、弥生時代中～後期の土器、箱式石棺等が検出されました。付近の丘陵端部には土器片の散布する地点が数ヶ所みられ、他にも遺跡の存在が予想されます。

美田遺跡 樋口古墳群、樋口遺跡からさらに南方側によった、上八万町星河内字美田の丘陵上の土砂採取地から、7個の銅鐸が出土しています。いずれも鐸高20～30cm前後の小形で、扁平紐式の袈裟帯文銅鐸です。樋口遺跡や弥生式土器片の散布が認められた地点との関連が考えられます。

巽山古墳 美田遺跡とは0.3km程、南側に隔った丘陵尾根の先端部に立地する前期古墳です。山塊よりのやや奥まった場所ですが眺望はすぐれています。緑色片岩で作られた狭長な竪穴式石室を内部主体とする円墳で、平縁神獸鏡、方格鏡、仿製獸帯鏡各1面の他、獸形石、車輪石、石釧等の副葬品が出土しています。

恵解山・柿谷古墳群 延生軒跡とは團瀬川と沖積地を隔てた対岸にあたる眉山山塊の南面には、山塊より派生した幾つもの舌状丘陵があり、古墳造営の好適地となっています。

恵解山古墳群は宅地開発等により破壊が進んでしまっていますが、総数では10基にも及ぶもので、眉山南麓を代表する古墳群です。

1号墳は箱式石棺を内部主体とし、人骨と供に短甲、頸甲、衝角付冑、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、鏡等の副葬品が出土しています。2号墳は2基の箱式石棺を内部主体とする円墳で、内1基には副室が設けられていました。人骨と供に短甲、冑甲、頸甲、衝角付冑、刀、剣、鏃、斧、鎌などの鉄製品、鏡、勾玉、ガラス玉、管玉、琴柱形石製品が出土しています。

8号墳も2基の箱式石棺を内部主体とする円墳で鉄剣、鉄刀、鉄斧、漆塗櫛等が出土しています。9号墳は竪穴式石室と箱式石棺を内部主体とし、刀、刀子、鏃、鎌、斧等の鉄製品、勾玉、白玉、管玉等の石製品が出土しています。10号墳は片袖式の横穴式石室を内部主体とする円墳で須恵器、土師器、耳環類、玉類が出土していますが、出土状況や遺物の型式から追葬がうかがえます。

恵解山古墳群は箱式石棺と横穴式石室を主体とするもので、箱式石棺に副葬された多量の鉄製武器、農工具類等にその特徴がみられます。團瀬川をはさんで対峙する向寺山古墳、法花谷古墳群、犬山古墳群、鶴島古墳群との対比も興味あるものです。

勢見山古墳 眉山山塊の突端近くの南面する丘陵頂部付近に立地しています。徳島平野を一望のもとに見おろす眺望にすぐれた高位置にあり、前方後円墳の可能性も指摘されています。内部主体は狭長な竪穴式石室で、U字状の粘土床の存在から割竹形木棺が納められていたことが考えられます。副葬品としては銅鏡や筒形銅器等がみられます。内部主体や副葬品類から、前期古墳の一つに数えられます。

竹林院 眉山山塊の南麓、八万町中津浦に建立されています。伝えるところによれば、その起源は延宝2年(1674)に蜂須賀家四代綱通が僧鉄崖に贈ったとされる古刹で、元来は小庵であったものを貞享3年(1686)に鉄崖が中興し、仏日山永明寺と称したようです。この竹林院は延生軒、養老軒と共に文人墨客の集う所となり、数多くの詩や句が読まれ、当時の文化に多いに貢献したようです。

徳島城跡・城ノ内遺跡 蜂須賀家政は阿波入国にあたり、当初は一ノ宮城に居していましたが、領国支配という政治的な面から吉野川デルタ上の城山に移り、徳島城を築城しました。城山は徳島平野の要衝にあたる場所で、阿波七島と呼ばれる周囲のデルタ上の島々に家臣団を配置して城下を形成し、支配体制の確立をはかって行ったようです。城山の地には縄文～弥生時代へかけての貝塚の形成等も見られます。徳島城関連では西ノ丸跡、お花島跡の発掘調査がなされ、各種の遺構、遺物が検出されており、同時代の延生軒跡との

比較資料となりうるものです。

庄遺跡・島田遺跡 延生軒跡とは若干の距離が隔った眉山山塊の北側にあたる鮎喰、名東、庄、島田へかけての一带も、古代から中世へかけての遺跡の密集地域です。庄遺跡の各地区からは弥生時代の遺構や遺物が、島田遺跡からは呪符木簡等の中世資料が数多く発掘されています。

延生軒跡を取りまく圏瀬川流域に広がる遺跡群、眉山山塊北側の鮎喰川流域に広がる遺跡群、各々に地域的な特徴なども見られ、地域を異にする両者間の係わりについては、今後の研究課題として解明がなされることでしょう。また、延生軒が営まれていたと同じ江戸時代の調査例としては、前述した徳島城に係わる西ノ丸跡、お花島跡、城ノ内遺跡が、本四架橋の建設に伴って調査された鳴門市大毛島の遺跡群が、歴史民俗資料館の建設に伴って遺構の確認調査が実施された那賀川町の阿波平島公方館跡推定地などが、代表例としてあげられます。このように近世遺跡の発掘は数が少なく、県内においては調査・研究の途上にある分野といわざるをえないでしょう。

II 調査に至る経緯

置県100年を迎えた徳島県がその記念事業として、徳島市八万町向寺山一帯に美術館、博物館、図書館、文書館、文化情報コアなどの県の中核的な文化施設を一堂に会した総合公園として、施設建設が計画されたのが、「徳島県文化の森総合公園」です。市内中心部から南西に約5 km、徳島平野の端部に面した團瀬川の岸辺に広がる丘陵地帯に、約40ヘクタールの面積が計画されました。付近一帯は以前から各種の遺跡の所在が知られていた地域で、建設予定地内にも遺跡の立地が予想されました (fig. 1)。文化の森総合公園の建設工事に先立って、昭和56年度に文化課による建設予定地内の遺跡分布調査が行われました。その結果に基づいて同年度末に、本調査を実施するにあたっての正確な資料収集のために、遺構存在の可否を調べる試掘調査がなされました。この資料をもとに昭和58年4月より本格的な発掘調査が開始され、61年3月に調査を終了しました。

文化の森総合公園のメイン施設の建設が計画されている付近が、阿波藩家老職長谷川家の別荘「延生軒」が建てられていた場所であったらしいことは通称の地名や、文化6年(1809)に製作された名東郡下八万村分間絵図(PL.1~3)、あるいは各種の文献によって知るところとなっていました。延生軒跡の取り扱いについての協議等も行われたのですが、建設予定地の地形的な制約や諸施設の配置、工法の問題等から、延生軒跡付近を建設計画から除外して工事を押し進めて行くのは不可能であるという結論をえたことから、建設のための造成工事の開始に先立って、記録保存を前提とした発掘調査を実施することとなりました。

III 延生軒跡の調査概略

1 延生軒の由来

天正13年(1585)、蜂須賀家政の阿波入国によって、明治維新までの約280年にも及ぶ阿波支配が開始されることとなりました。当初は藩体制確立のためへの諸政策が遂行されて行ったようです。入国から約100年近くを経過すると、藩政にも若干ながら余裕が見られ始めたようで、この時期は元禄年間にあたり、江戸時代を通じてみても経済・文化の上で、目ざましい興隆がみられた時です。当時の阿波藩内の文化面をリードして行ったのは、藩お抱え学者、上級武士階級、僧侶達でした。

延生軒が営まれたのも、こういった状況下にあったことに起因するものでしょう。

延生軒は蜂須賀家5代綱矩の治世に、家老長谷川伊豆貞長によって、名東郡下八万村祝山に営まれた別荘です。この地は八万夷山城主であった戦国武将篠原左吉兵衛の家臣で、後に夷山城主となった庄野和泉守の居館があった場所ですが、蜂須賀氏の入国により家老職の長谷川氏に帰するところとなったものです。しかしながら、長谷川氏の誰の代にこの地を入手し、建物を創建したのか修復したのか定かではありません。

2代越前貞恒の時、すでに別荘となっていたともいわれていますが、確証はあまりありません。延生軒と最も深い係わり合いをもつ人物は、長谷川氏4代の伊豆貞長です。貞長は藩政の重要な役職であった仕置に、数度にわたって任せられるなど、藩主の信頼が深かったことが伺える人物です。

貞長は文化面にもすぐれた才能を発揮し、和歌や漢詩に造詣が深く、数多くの作を残しています。平間長雅や鉄崖に師事するなどして詩歌の道を窮めることに努めています。貞長の人となりについては、鉄崖の楽軒記にもみられるところです。向寺山の地では貞長の主催による各種の催物が開かれ、多くの文人墨客が寄り集い、詩をつくり歌を詠じ大いに風雅を楽しんでいたようです。貞長に大いに影響を与えたのは竹林院の鉄崖でした。竹林院は眉山南麓の八万町中津浦にあり、延宝2年(1674)に藩主蜂須賀綱通より鉄崖に贈られたものです。鉄崖は黄檗宗の禅僧でしたが、漢詩や書画にひいでた才能を表わし、歴代の藩主、上級武士、儒学者などの多くの門人の出入りがありました。藩主主催による吟詠の会が催されるなど、蜂須賀家との係わりの深さも伺われます。また、貞亨4年(1687)には15石の所領を永代赦免地として認められ、藩主の手厚い庇護のもとにあったことがわ

かります。当時、最も風流人の参集が見られた竹林院は徳島域下における文化面の最大拠点として、華々しい活動がくりひろげられていました。長谷川伊豆貞長もそのうちの一人だったわけです。多数の門人、客人の訪問により雑然となりがちであった院内での行動を戒めるため、鉄崖は天和3年(1683)に院内における心得ともいうべき、竹林庵中規則を作っています。このことから竹林院がいかに興隆していたかが伺い知れます。元禄2年(1689)、鉄崖は貞長の要請により祝山(向寺山)に営まれた別荘の書斎を楽軒と名付け、これを詩に詠んだ楽軒記を作っています。その中で貞長のことを温雅で忠義に厚く、寛裕で徳望があり、詩を作り歌を詠むなど風雅にたけた人物であるとしています。書斎に関しては仏教書から詩歌集、莊子・老子・烈子の書、医術書にいたる広汎な分野の書物が揃え置かれていたことが、庭には各種の草花が植えられていたことが記されています。さらに翌年の元禄3年(1690)にも貞長の希望に応じ、別荘によせる詩の「延生軒記」を作っています。別荘の周囲に展開する山河、松竹梅菊の眺め、貞長がこの地に別荘を構え八景六境を選び、詩を作り文を論じたこと、延生軒と名付けた謂れなどが語られています。鉄崖は他にも「延生軒に題す」とする詩をよみ、別荘の風雅を詠いあげています。延生軒記にみられた貞長が選定した八景六境ですが、八景には園瀬の秋月、前村の夜雨、山寺の晚鐘、眉山の暮雪、富田の晴嵐、沖の浜の落雁、沖の洲の帰帆、灘山の夕照が、六境には玲瓏の峯、天然井、大観の嶺、松月の岡、王子の宮、碧玉林があげられています。貞長は八景についての詩を藩内の寺院の長老達に求めています。

金蓮庵の南山、興源寺の恒伽、臨江寺の晚山、江西寺の虎溪、慈光寺の梁巖、松寿庵の峯崖、瑞岩寺の竜雨、潮音寺の喝雲達がそうです。また、鉄崖には八景すべてについての作詩を依頼していますが、六境についての作詩もよせられています。鉄崖は貞長とは直接のつながりのなかった黄檗僧にまで、延生軒の風光明媚さと貞長の人となりをしたためた書を送り、作詩を請い高泉、南源、悦山から数編の題詩を受取っています。このことから貞長と鉄崖の関係が、いかに深いものであったかが想像されます。また、多くの人々の延生軒にちなむ数多くの作詩が見られるなど、貞長の別荘延生軒は人の出入で賑わっていたことが知られます。

別荘の建設された時期ですが、前記した鉄崖の元禄3年作の「延生軒記」によれば、「元禄己巳……」という一節があり、元禄2年(1689)に別荘が向寺山の地に構えられたことが伺い知れます。同じく元禄2年の鉄崖の「楽軒記」には別荘内の書斎「楽軒」のことが述べられており、すでに貞長の文化活動の場として機能していたことがわかります。しか

しながら、これよりも以前の向寺山の地の状況については明らかではありません。

「延生軒」という名称の謂れですが、鉄崖の「延生軒記」や「延生軒に題す」に見られるのが初見であり、元禄3年(1690)頃に鉄崖によって命名されたことが考えられます。

延生軒は元禄期を通じ、竹林院とともに藩内の文化面の中核的な拠点として、大いに賑わったようです。竹林院、延生軒の賑わいに影響されるかのように、元禄9年(1696)には藩土折下角左衛門氏治によって、延生軒の近く下八万村法華谷に別荘「養老軒」が建築され、一層の文化興隆がみられることとなりましたが、時の流れとともに変化がみられ始め、元禄16年(1703)の鉄崖、宝永5年(1708)の貞長の死去によって文化面に生彩を欠くようになり、活動も停滞ぎみとなってしまいました。

貞長の息子貞篤は父親と同じく詩歌に造詣があったようで、貞長の死後も延生軒を風雅の場として維持したようで、この地を訪れた人々によって多くの詩歌が詠まれています。

家老職の家柄で藩の重要な役職であった仕置に任ぜられるなど、その権勢を誇っていた長谷川氏も5代貞篤以後は6代貞栄の若年での死去、7代貞雄の閉門、さらに蟄居、出仕停止と相次ぐ不幸に、没落の一途をたどり、12代貞誠の頃には延生軒も人手に渡ったとされています。

このようにして延生軒は歴史の表舞台から姿を消し去り、現在見られるような荒廃した惨状となってしまったようです。長谷川氏にまつわる猫騒動ですが、あくまでも伝説であって史実としては乏しいものです。元来、延生軒の脇の王子神社は長谷川氏の鎮守神として祀られていたのですが、仕置の役職についていたことや、一族に生じた不幸な出来事の連続と、それに起因する権勢の没落などを関連させて、猫騒動の伝説が作りあげられたことが考えられます。

2 出土遺構の概略

延生軒が営まれていた場所は文化の森建設予定地の中央部付近にあたり、施設ゾーンとして博物館、美術館、文化情報コアなどの建物建設が計画されているところです。地形的な制約や工法、建物配置などの面から現状保存が困難であったため、記録保存を前提とした発掘調査を実施することになりました。

三方向を丘陵にとり囲まれたすり鉢状の地形の底部付近に位置し、北東方向にのみ眺望が開け、星河内谷川・園瀬川をはさんで眉山南麓一帯、そしてかなたに徳島城下を望む場所です(PL. 5～6)。現況は荒地と化していますが、なだらかに北面する標高11～12m前

後の土地で、畑地として利用されていたことが土地の様子から伺えました。発掘調査に着手する時点では文化6年(1809)に作成された下八万村分間絵図(PL. 1~3)に描かれている延生軒をほうふつとさせるようなものはなにもなく、雑木や笹竹、雑草が繁茂し、東側と北側に一部、石垣状の存在が見られる程度でした。分間絵図に見られた延生軒本体付近と考えられる地点の伐採作業を実施したところ、東西約40m、南北約35mにわたる矩形形状の土地の広がりを確認することができました(PL. 7)。前記したように標高は11~12m前後ありますが、矩形形状の土地の大半はほぼ平坦面をなし、東北側と東側の両端付近において傾斜をもつといった状況も確認することができました。このこと以外にも、南寄りに約1mの段差が削りだされていることもわかりました。掘り方の設定にあたっては東側で確認された石垣を基準に、平行あるいは直交する形で杭打ち作業を行い、5m四方の柵目を作って行きました。便宜上、調査区を4区に分け十文字に土層観察用の畦を残し、掘り下げにかかりました。伐採後の現地の状況としては、畑地として利用されていた当時の畝溝のなごりの凹凸が、ほぼ全面にわたって見られました。場所によって若干の違いはあるものの、約20~30cmの厚さにも及ぶ耕作関連土層が広がり、近世から現在に至る時期の陶磁器片の散在が認められました。

延生軒跡東側部分 イ. 東西排水施設(PL. 8)

耕作関連土層を除去作業中に、点在する片岩礫の存在が見られたので、注意深く覆土をとりのぞいて行ったところ、東西方向に延びる2列の片岩礫の並びを検出することができました。両者の間には黒褐色を呈した耕作関連土層の包含がみられたので、なんらかの掘り込みをともなう施設であることが容易に予想されました。内部に堆積する土を掘りあげたところ、東西方向に約17mの排水施設と考えられる溝遺構を検出することができました。

溝の構築は緑色片岩の割石を利用したもので、片岩片を含む赤褐色を呈した粘質の埋立土を切りこむようなかたちでなされていました。溝の幅は約25cm程度、深さは約10~20cm前後あり、中央へ行くにしたがって深さを増し、重ね積みや厚手の割石の使用が見られました。溝の底部には敷石等の設備はなく、水の流れによって生じたと考えられる細かい土砂の堆積が見られました。

溝の東西の端部は明確でなく、特に西側へ行くほど保存状態はわるく使用された跡も小さくなり、溝幅も一定してきません。東側端部と思われる箇所も溝の端を的確に示す施設はありません。



fig. 2 延生軒跡付近地形測量圖

検出することのできた排水石溝の東端部から西側へ約10.5m付近で溝は北側に分岐し、南北方向の溝が構築されています。

ロ. 南北排水施設 (PL. 9, 10)

東西排水施設の検出作業を進めているうちに、北側石列の一部が人為的に欠損しているような箇所が認められたため、遺構検出にむけて精査作業を実施していたところ、東西排水施設の内部に包含されていた土壌と同様なものの存在が見られたので、掘り下げ作業を行ったところ、東西方向の排水施設と直交してT字状をなす、南北方向の排水施設と考えられる石溝を検出することができました。

石溝の延長は約14m、幅は約20～30cm程度、深さは東西溝との接点付近が約15cm前後と最も浅く、北側へ行くにしたがって徐々に深くなり、溝の北端部付近では約30cm近くにも達していました。

溝の構築は東西溝とほぼ同様な作りで、片岩の割石を使用したものでした。

東西溝の接点付近から北へ約6m区間は溝の保存状態もかなりわるく、原位置を保つ側壁石はほとんどみられませんでした。かろうじて掘り方によって、溝の規模を想定することはできました。底石の設置は東西溝と同様に見られませんが、丸瓦を底石の代用として使った箇所が、約1.5mにわたって存在しているのが確認されました (PL. 9)。

南北溝の北寄り部分は積石の残存状態もよく、数段積みあげられた側壁石の並びが検出されました。側壁石は北寄りほど積み重ねられた段数や厚さも増大する傾向がみられました。

また、石溝の北端にあたる部分の溝底部にのみ、板石が敷いてありました。これは流出する水の流れによって、溝先端部が削りとられ浸蝕をうけることを防止するために配置されたものと考えられます。

これらのことから排水は東西溝から南北溝を経て、延生軒跡の北側へ流出していたことが伺えます。

ハ. 東階段 (fig. 3, 4 PL. 11～14)

延生軒跡北側の南北石垣は発掘調査に着手する以前は堆積土や立木、下草に覆われて、詳細を伺い知ることはできませんでした。

伐採作業を実施したところ、石垣の中央から東寄りで3箇所、石積みが他と異なる箇所

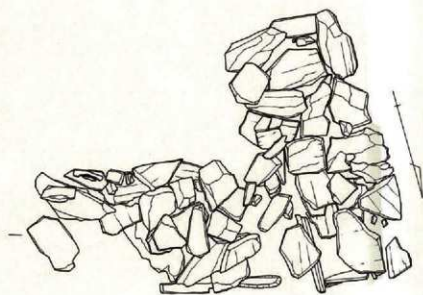
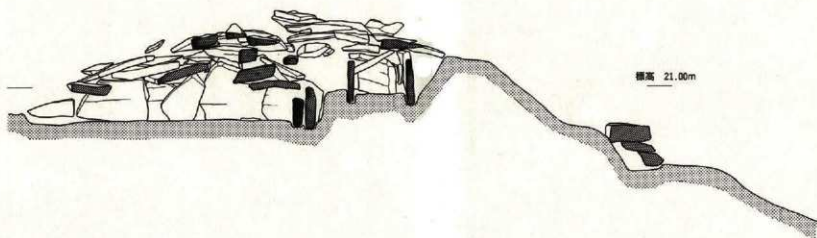
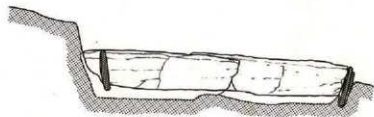
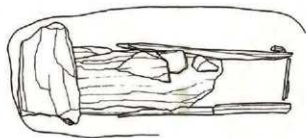
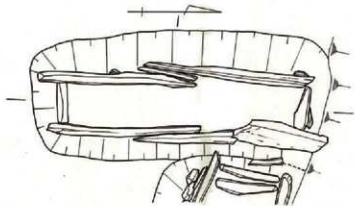
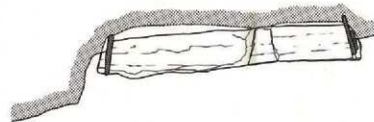


fig. 2 1・2号石槽横石・列石平面実測図

標高 22.00m



標高 22.00m

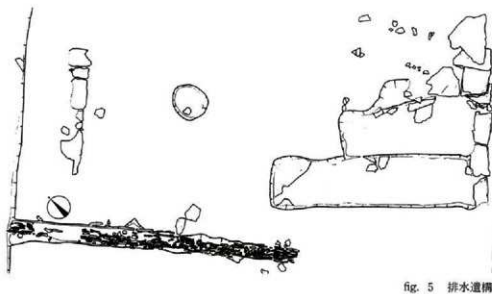
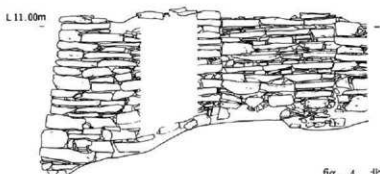
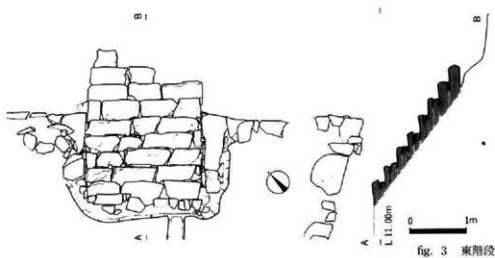


標高 22.00m

標高 22.00m

0 1m

fig. 3 1号石棺蓋石・棺身平面断面実測図



が発見されました。

一般に石垣を築く場合、強度との関係から石を積みあげる際は交互に積んで行く方法がとられるのですが、この3箇所に関してはそれが見られず、積みあげられた石と石の間に縦方向に一直線状のすき間が生じているのが確認できました。

東寄りの2箇所に関して覆土を除去して詳細に調査したところ、数枚ずつ平行に並べられた厚手の板石が、石垣の並びから3段にわたって前方へ突出しているのがわかりました。

この3段には一部欠損している部分もありましたが、その作りは明らかに階段そのものでした。石垣の高さからしても、さらに幾段かの階段の存在が考えられました。そのため、3段の階段の上方に積まれた石垣を撤去して行ったところ、新たに6段の階段を確認することができました。計9段の階段を検出しましたが、下方側は削平等によって地形が当初とはだいぶ変更されており、あと数段構築されていたことが考えられます。

階段部分の各計測値ですが、現存する全長は約2.6m、傾斜角は約33度、段数は現存で9段、幅は約2m、各段は3～4枚の片岩の板石で構築され、踏み代は約30cm、段差は約20cmありました。

石垣にみられた2箇所の縦の間隙は調査の結果、階段部分を埋めた時に生じたもので、本来は階段の両側壁部であったことがわかりました。

階段の両側には側壁が設けられていましたが、石垣の並びから突出した3段に関しては側壁は認められず、板石の階段部のみの構築でした。

二. 東側外石垣 (PL. 15～17)

延生軒跡の東側にみられた南北方向の石垣です。階段部を形成する北側の東西石垣に続くもので、現存する全長は約29.5mあります。

東北端角から南側へ約9mの区間は、北側と同様に割合に規則性をもった石積みで、使用された片岩も大きなものでした。これより南側は石垣も一段低く乱雑な石積みで、使用された石も小さく不揃いなものでした。

この両者の接点に北側石垣でみられたと同様な縦方向の間隙があることや、石積みの相違などから、継ぎ足しがなされたことは容易に想像できました (PL. 16)。

石垣の基底部を検出するために裾部分の掘り下げを行ったところ、継ぎ足し部分より北寄り、東北端角にかけては現地表面から約1.4m前後下方に存在することが明らかになりました。継ぎ足し部分より南寄りでは基底部の位置は浅く、現表土層の直下において検出す

ることができました (PL. 17)。

基底部までに観察された土壌は脇を流れる谷川の氾濫による土砂礫の堆積と、人為的に埋められた大小の片岩礫を含む埋立て土などが見られました。

ホ. 北側内石垣 (PL. 18~19)

延生軒跡の北側、東西方向に構築された石垣に認められた3箇所の間隙のうち、東寄りの2箇所については階段部分の閉塞の際に生じたものであることが調査によってわかりましたので、残りの西寄りの1箇所について調査を実施しました。

石垣上端の間隙部分に堆積している黒褐色の表土及び片岩の小礫を含む埋立て土を、石垣内側方向へ除去し始めたところ、約20cm前後掘り下げた位置において、北側石垣から南方向へ延びる石列の上面を検出することができました。北側で認められた間隙が石垣の基部まで及んでいたことや、石の面が東向きに統一されたことなどから、この石列は東西方向に延びる外石垣が、南北方向に90度向きをかえたものであることが考えられました。

南北方向の石列を掘り下げて行ったところ、予想通り外石垣から続く南北石垣を検出することができました。全長は約2.45m、高さは南端部で約1.35m、北端部で約1.65mを測りました。

北側東西方向石垣から続く、新たに検出された南北石垣の南端部分において、またしても石垣の間隙が発見されました。

検出作業を実施して行くうちに、北向きの面をもつ東西方向へ延びる石垣であることがわかりました。全長は約3.3m、東端部で高さ約0.7mを測りました。この石垣は東端部でさらに向きを変え、東面する面をもつ石垣として、南側方向へ約8.2m続いていました。

これらのことから、延生軒跡の北側に構築された東西方向の外石垣は、ある時期に継ぎ足しがなされ、東・南側の両方向へ拡張されたことがわかりました。その拡張工事の際に階段部分を含む北側外石垣と、それに続く東側外石垣の北寄り部分が築かれたようです。

ヘ. 排水遺構 (fig. 5 PL. 20~21)

南側方向へ約8.2m続いた石垣の端部付近には、東西方向へ延びる排水路の一種と考えられる溝状遺構が存在しました。

構築方法は掘り込みの両側面に平瓦あるいは片岩の板石を使用して壁面を構成し、内部に平瓦や丸瓦の破片、小円礫などを溝の長軸方向と平行に並べ、排水の用に供したものです。

確認できた長さは約5.2mで、石垣面より東側へ約4m、西側へ約1.2m、幅は約30～35cm、深さは約15cm前後を測りました。

西側へはあと若干の延びも考えられますが、東端から先は東向きの傾斜地形となり、施設の有無は見られませんでした。おそらくこの箇所は自然排水となっていたことが考えられます。

ト. 西側外石垣 (PL. 9～10)

東側外石垣と北側外石垣の一部は、調査に着手する時点ですでに露出しており、いくらかなりともその概要を知りえることはできましたが、西側部分に関しては土壌の堆積のため、当初はその存在すら不明確でした。

東西方向へ延びる北側外石垣の西端部分を掘り下げた結果、石垣はここで終わるのではなく、南側へ方向をかえ西向きの面をもつ石垣として、さらに続いていることがわかりました。

検出できた全長は約10.8mを測りました。

石垣の西北端角付近で高さは約1.1mあり、片岩の厚手の割石が何個も積み重ねられていました。南側へ行くほど高さもなくなり、南端付近と思われる箇所では1段のみの構築でした。

本来の地形が北向きの傾斜面であった場所に積まれた石垣であるため、平坦面を造成するには低地側ほど、石垣を高く積みあげる必要があったようです。石垣の底部から上端部までの裏込めにみられた土壌は埋め立てによる堆積土層で、地山切り出し等による整地でないことを示していました。

まとめ —— 延生軒跡東側部分 ——

延生軒跡の東側半分の土地は南北方向に延びる東面の東側外石垣、東西方向に延びる北面の北側外石垣、南北方向に延びる西面の西側外石垣によって、三方向をコ字状にとり囲まれていました。一見したところ、一連の石垣のように見えたが、調査の結果、継ぎ足し拡張によってコ字状の石垣に囲まれた土地が造成されたことがわかりました。

段階を追って敷地の変遷をみると、調査に着手した時点にみられた、東側外石垣と北側外石垣の部分が露呈、西側外石垣は土中に完全に埋没、跡地は畑地や果樹畑として使用されていた状況が、最も新しい段階です。

それ以前は古老の話にも伺えたように、大正から昭和にかけて延生軒跡に民家が建っていたようです。現在ではその民家も敷地外の星河内谷川よりに移転しています。表土・耕作土の直下において検出された、土管による排水施設や近代の襟相のみられた陶磁器類は、この民家に関連したものと思われまます。

排水施設との位置関係からみて、西側外石垣は埋め立てられていたようです。北側外石垣の階段部分については、民家が建てられる時に閉塞されたものか、後に畑地等として利用され始めた時点で閉塞されたものかを検討しましたが、跡地が畑地として利用されるに至って埋められたようです。

歴代の長谷川氏に引き続いて生じた不運な出来事や、明治維新による幕藩体制の崩壊などによって、歴史の表舞台から姿を消して行った延生軒は、二度と脚光をあびることなく荒廃にまかされていたようです。

明治以前における延生軒の建物に関して知ることのできる資料は、下八万村分間絵図に描かれたものの他、作画年代ははっきりしませんが、天境という人物によって描かれたもの等がありますが、規模などを詳細に知りうることはできませんでした。

今回の発掘調査においても、建物の上部構造については明らかにすることはできませんでした。また、下部構造についても同様でした。しかしながら、敷地内に構築された石垣の拡張によって、廃棄される以前の延生軒の推移を知ることができました。

延生軒の石垣として最終の拡張が行われた部分は、階段部を含む北側外石垣の東寄りと、それに続く東側外石垣の北寄りです。この石垣の構築によって、延生軒の屋敷地の造成はほぼ完了したことが考えられます。下八万村分間絵図に描かれた状況と共通するものです。

絵図は文化6年(1809)に製作されており、それ以前の時期における拡張であることがわかりました。では、それが江戸時代のいつ頃になされたものであるかの明確な資料は、発掘調査においては得ることはできませんでした。

團瀬川、星河内谷川方向から見た延生軒は、北側と東側に高く廻らした石垣と、傾斜地という地形的条件に相まって、いっそう立派な建物に見えたことが察せられます。

さらに時期をさかのぼって、階段部とその周辺石垣の継ぎ足しがなされる以前の、延生軒東側部分の状況を検討したところ、西側の南北方向外石垣、その続きの北側の東西方向外石垣、さらに向きをかえた南北方向石垣によって構成された、鉤の手状をした部分が拡張されたことが確認できました。

北側の東西方向外石垣の東端から、南へ続いた南北方向石垣の南端部には、別構築の石

面を北側に向けた東西方向石垣の存在が明らかになったことによるものです。

両者の新旧関係は南北方向石垣が東西方向内石垣の石面に接する構築法がとられており、東西方向内石垣によって囲まれた敷地が造成された後、拡張の必要に際して北・西側に埋めたてを実施し、新たに石垣を築いて敷地を確保して行ったようです。

両石垣が検出できた当初の段階では、接点部分から西寄りの内石垣は、外石垣の構築に伴う造成の際に埋めたてられており、確認することはできませんでしたが、拡張部分の撤去作業によって、外石垣部分の拡張状況と内石垣の構築状況を観察することができました。

延生軒跡東側部分の屋敷地造成に際しては、北面する傾斜地形であった現地の南寄り部分を削平して地下げを行い、その際に生じた土砂を北寄りに移動して埋めたて、コ字状に三方を囲むような石垣（内石垣）を構築して作られた敷地が、当初の姿であったと考えられます。このことは他の石垣の構築との関連を検討することによっても裏づけられました。

西側に構築された西面の南北方向内石垣は、同時の積みあげである東側・北側の内石垣に比較して粗く、使用された石材の片岩も小さなものが目立ちました。延生軒への進入路方向から眺めた場合、東側・北側の内石垣と違って死角的な位置にあたるため、簡略化がなされた結果とも考えられます。また、敷地を拡張するにあたって築かれた外石垣用に抜きとられ転用されたのか、石垣上半部の残りはよくありませんでした。

このように延生軒跡東側部分に関しては、まず最初に傾斜地の削平・埋めたてによって、コ字状の石垣（内石垣）に囲まれた土地が造成された時期、その後、西側から北側西寄り部分に至る間の石垣（外石垣）が鉤の手状に拡張された時期、さらに、東側北寄り部分から階段部分を含む北側東寄りの石垣（外石垣）が拡張された時期、延生軒が廃棄された後に民家が建てられた時期、農耕地として現在に至る時期などに大別できるようです。

チ. 南井戸 (fig. 6 PL. 33)

延生軒跡の敷地内からは2基の井戸が検出されました。

本井戸は区画・造成するために、南側に切り出された段差のすぐ脇で、敷地内の南東寄りに位置しています。

表土・耕作土を除去した直下において、井戸側壁の存在が認められました。検出した時点では側壁上端面と敷地面との高低差が、ほとんどみられませんでした。

井戸の場合、一般的に地上部分には転落等の危険防止のためや、水汲みの便利さのためなどを兼ねて、枠組施設がなされるのが通例ですが、この井戸からは確認することができ

ませんでした。延生軒廃棄後、民家の建築や農耕地として使用された折、地上部の障害となる施設等はすべて撤去され、井戸も埋め戻されたことが考えられます。

井戸上端部分の内法は直径が約70cmの円形をなし、片岩の板石が放射状に敷置されていました。側壁の石材としては不釣合なほど大きめの片岩の板石の存在が数枚みられました。これらが洗い場や排水施設等のなごりであるのかどうかは確定できませんでした。おそらく、前記したように農耕地等として利用された時に、撤去されてしまったのではないかと想像されます。

井戸の上端を検出した時点では、内部は土砂で完全に埋まっていたのですが、堆積している土砂を取り除いた結果、上端から約3m掘り下げることができました。

しかしながら、湧水のためさらに下方までは、完掘することができませんでした。おそらく、深さ3.5m近くにも及ぶ井戸になるものと思われれます。

井戸側壁は15～30cm前後の片岩の割石を用いたもので、使用された石に大きさのばらつきが見られましたが、石と石の間には小さめの石が補填されるなどの方法がとられていました。井戸下部から上部に至るまでの側壁は、ほぼ垂直に積みあげられていました。

井戸の内部に堆積した土壌ですが、下部へ行くほど、礫の存在と粘質土の割合が高くなり、上部ほど礫も小礫で粘性も少なくなり、付近にみられた土壌と大差のないものでした。

井戸の構築状況を観察するために、東西方向に断ち割りを行ったところ、掘り方の線を明瞭にとらえることができました。

上端での掘り方の幅は約3.5mにも及んでいました。地下1.1m付近における幅は約2.2mありましたが、これから下部の掘り方は急に狭くなり、幅約1.4mで垂直方向に掘りこまれていました。井戸の深さが3m以上にも達するため、上方部の掘り方が広めにとられたことがわかります。裏込めの状況は土層序が数層認められ、井戸側壁は一気に積みあげられたのではなく、数回にわけて行われ、その都度、側壁保持のために裏込めに土砂が投入され、これを繰り返すことによって、側壁の構築がなされて行ったことがわかりました。

り、西井戸 (fig. 7 PL. 29～32)

延生軒跡地の西端付近において検出された井戸で、55—9番地に位置しています。

すぐ西脇には丘陵端部の傾斜面が接しています。

調査に着手した時点では、斜面の下端付近ということもあり、土砂によって完全に埋められ、井戸存在の片りんすら伺い知ることはできませんでした。

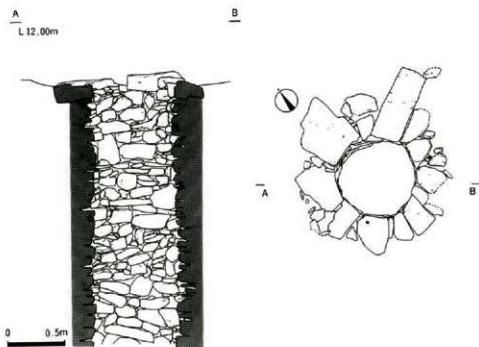
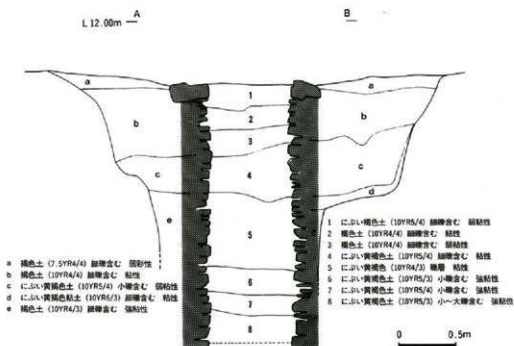


fig. 6 南井戸

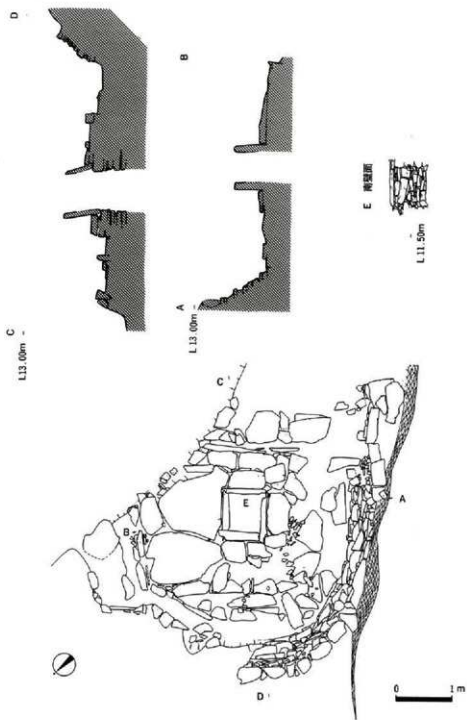


fig. 7 西井戸

付近に住む古老の子供の頃、当地あたりに井戸があったような記憶がするという話も耳にはいったので、掘り下げを実施してみたところ、井戸枠・洗い場・排水施設などを備えた、りっぱな井戸を検出することができました。

おそらく、この井戸は大正から昭和の初期にかけては、使用されていたことが考えられます。その後、何らかの事由により使用されなくなり廃棄され、長年の歳月のうちに土砂に埋没してしまったのでしょうか。

地積した土砂を撤去し始めたところ、まずは井戸枠の施設を検出することができました。使用された石材は厚さ約10～15cmのふ厚い片岩の板石で、4枚の板石を用いて枠組がなされ、枠の安定をはかるために各々に2箇所の切り込みが施され、互いの板石が組み合わされるように細工されていました。

土匠等による若干の呑みはありましたが、枠組は内法で55cm×70cm前後の矩形を呈していました。また、地表部に現われた枠石の高さは約40cmありました。

井戸枠組の周囲1.4m前後には、大きめの片岩の板石が敷詰められていました。さらに、この板石の下にも片岩礫が敷込んでありました。板石の並びはほぼ均一な平坦面で統一され、一部の板石には枠石との組み合わせのために、切り込みが施されているものもみられました。石敷の端部と考えられる部分では、面取りのなされた箇所もありました。

これらの敷詰められた板石のまとまりの用途ですが、おそらく流し場施設であったことが考えられます。

流し場の端部と考えられた、面取りのなされた石の並びに接して、南と西側に溝状の掘り込みがとり囲むように作られていました。

南西側は浅く、北東側に深くなる傾斜をもつ溝で、底部に敷石などの存在はありませんでした。溝の幅は約20～30cmの広さがありました。溝の井戸側の壁は流し場の敷石が利用されていましたが、山側は傾斜面の下端部付近に石垣を築き、傾斜地の崩壊防止をも兼ねて溝の方としていました。

流し場の東端側においても、石敷に接して溝が構築されていましたが、この溝は南・西側で検出された溝状遺構に続くもので、幅が約30cm、長さが約2mほど残存していました。

この部分には側壁と底石の設置がみられ、北側方向へ傾斜していることもわかりました。井戸枠石の周囲にみられた石敷は流し場施設で、そこで使用された水はこれらの排水施設へ集められ、延生軒の北側へ流されていたことが考えられます。

石敷の西寄りで人工的に直径約10cm、深さ約5cmの穴が穿たれた片岩の板石が認められ

ましたが、この1箇所のみで他には検出することができなかったため、その用途等について確定的なことは言えませんが、覆屋的な施設が作られていた可能性も考えられます。

井戸粹石を撤去し、地表下部分の調査を実施した結果、内法直径約70cmのほぼ円形をした井戸であることがわかりました。粹石上端から約3m掘り下げを行いました。湧水によりこれ以上掘り進むことができず、底部を確認することはできませんでした。

側壁の構築は片岩の割石を利用したもので、下部から上部に至る間、ほぼ垂直に積みあげられていました。

内部には西側の傾斜面や付近でみられた黄褐色の粘質土、片岩片を多く含む茶褐色土の堆積が認められました。傾斜地からの土砂の流入による自然堆積や、西及び南側でなされた農耕地の開墾に際しての排土等によって、埋まっていったことが考えられます。

まとめ — 南井戸・西井戸 —

延生軒跡の敷地内からは、西井戸と南井戸の2基の井戸を検出することができました。

2基の井戸が出土した場所は、南井戸は敷地の南端、西井戸は敷地の西端という、使用に際してはあまり便利のよい場所とはいえません。

下八万村分間絵図に描かれている延生軒の建物配置から見れば、南井戸は東門を入ったあたりの庭のすみに位置するようです。西井戸の推定できる位置付近には、表現方法からみてわら葺屋根と思われる建物が数棟描かれています(PL. 1～3)。

敷地の東・北側寄りの好位置には、瓦葺の2階建と推察できる建物が描かれており、おそらく別荘「延生軒」の主たる家屋であったことは違いないと考えられます。

このように延生軒本体の建物とは、少し離れた位置に掘られた井戸ですが、両者の地下部分の側壁の積みあげは、ほぼ同様な手法で行われ、片岩の割石を使用したものでしたが、比較すれば僅かながら南井戸の石積みに粗さが目立つくらいです。

深さは側壁上端から南井戸は約3m以上、西井戸は約2.5m以上を測りましたが、両者ともまだ底部には達していません。

地下水脈の流れている場所によって、湧水の水位は異なってきますが、南井戸では標高9.1m前後で、西井戸では標高9.4m前後で、それぞれ湧水が認められました。

地上部に構築された施設ですが、南井戸の場合は開墾等によると思われ、明確なものを検出することはできませんでしたが、現存する側壁上端でみられた数枚の大きめの片岩の板石などは、流し場に関連するものだった可能性も考えられます。

南井戸に比べ西井戸は、傾斜面の下端部分にできた、わずかな場所に掘られたのが幸いして、開墾等の障害にならなかったためか、延生軒廃棄後も使用されていたためか、ほぼ原型に近い状態で検出することができました。

絵図に描かれた従たる建物の脇近くに位置することなどからも、西井戸が主要な役割をはたしていたのではないかと考えられます。

南井戸の枠組施設が確認できなかったのに西井戸を比較することは、検討違いになるかもしれませんが、井戸枠石の切組、流し場、排水施設などからみても、西井戸の優位性は動かないと思われれます。

井戸の構築された年代ですが、年代を決定できるような伴出物がなく、はなはだ不確定なのですが、西井戸の場合は古老の記憶にもあり、大正から昭和へかけての時期にはすでに使われていたようです。西井戸の北東側は削平をうけ、排水施設も破壊されていましたが、延生軒の敷地内の西寄りに、部分的に残存していた溝遺構の方向が、排水施設の方と一致することから、両者は一連の排水溝遺構で、ある時期の延生軒と係わりをもつものが、永年にわたって使用され続けて来たと考えられるのではないのでしょうか。

南井戸に関しても年代を決定する明確な資料はなく、古老の記憶のなかにもみあたらず、延生軒滅亡後のはいり段階に、廃棄されてしまった可能性さえも考えられます。

建物の配置や描写、あるいは出土した階段遺構の規模や形態などからみて、東階段は主たる出入口として使用され、西階段は脇の通用口または勝手口的な役目をしていたことも予想されます。

このように延生軒跡西側部分においても、東側部分同様、敷地にわたる拡張に関連する施設の痕跡を検出することができました。

矩形状の敷地の造成に続き、北西部が拡張され、さらに北側寄りに階段部を伴う拡張がなされ、一応の延生軒の形態が整ったようです。延生軒廃棄後は自然荒廃や造成によって削平等をうけるなどし、そのおかげをなくし土砂の下に埋ざりもれ、調査時点にみられた農耕地としての姿に至ったようです。

延生軒跡西側部分 又、北側外石垣 (fig. 8 PL. 22, 25, 26)

延生軒跡敷地の西側部分にも、東側部分において見られたと同様な石垣の構築があり、調査に着手する時点において露呈していた、敷地西端の傾斜面下端より、東側方向へ続く約18mの石垣の調査から着手しました。

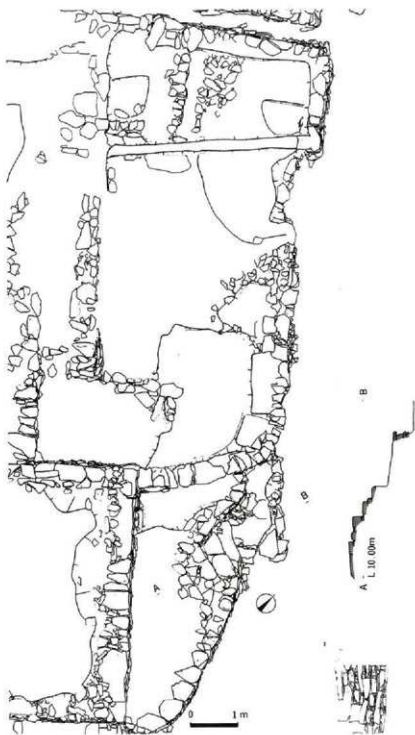


fig. 8 北側石垣城壁

この石垣の調査を実施したところ、延生軒が維持されていた時期よりも、後に構築されたものであることを確認することができました。

石垣の裏込めにあらわれた土層断面を観察したところ、その埋土中には近世から近代へかけての、時期の異なる陶磁器類が混然一体となっており、それらは原位置を保つものではなく、二次的の堆積によるものであることを明瞭にあらわすものでした。

このことから、本石垣の構築によって拡張された敷地は、その年代が明治以降に下ることが明らかとなりました。

拡張された箇所の埋積土を除去したところ、時期を遡りえる石垣の残がい等を検出することができました。東側部分においても、数回にわたって拡張がなされたことが、石垣等の構築状況によって確認されましたが、西側部分においても同様に、数回にわたる拡張によって、敷地の確立がなされて行ったようです。

東側部分と比較して石垣の残存状態は、必ずしもよいものではなく、拡張の際などに転用されたことなども考えられます。

また、西側の丘陵から続く北東方向への傾斜地形とも関連して、当初から比較的低い構築の石垣であったこともいえます。

ル、矩形状区画敷地 (PL. 28)

西側部分における敷地の造成で、まずなされたのは東側部分に構築された外石垣（西側南北方向、北側東西方向）に対応するような位置に築かれた、東・北・西側辺の石垣によって区画された土地でした。

東側辺は西側外石垣とは約1.3m～1.5mを隔てて、ほぼ並行して築かれ、長さは南北方向に約8.2mを測りました。南端部では石積みは1段で約15cm前後でしたが、北端部角では高さ約1mとなり、石積みは北側へ向うにつれて高さや段数を増しており、石垣を構築することによって造成された地点の旧地形が、北面する傾斜地であったため、平坦面を確保するための方法がなされたようです。

北側辺は北側外石垣の延長線上にあたる位置にあり、約1.5m隔てて東西方向に長さ約5.5mを測りました。石垣の高さは西端部角で約1mを測り、全体を通してほぼ同様な高さを残存していました。

西側辺は約3.5mの長さを測り、東側辺と対称するように南北方向へ延びる石垣を構成していました。石垣北端から約2.2m南寄りの箇所からは、直交する東西方向の約3.6mの

石垣が継ぎ足しされていました。接点部での石垣の高さは約65cmありましたが、西端部では石積みも1段で約20cmの高さでした。敷地を造成する際の旧地形に対応した石積みの違いの現われと思われまます。

接点部付近から南寄りの約1m区間は1段のみの石列で、何らかの区画のために設置されたものと考えられます。

石垣の構築に使用された石材はすべて片岩の割石で、大きさは大小さまざまなのがとり混ぜられていました。また、石垣の裏込め土中にも多量に認められました。

北側辺に対応する南側辺の存在を確認する石垣あるいは石列は、東側辺の南端部角から大型の割平石が2枚、西側方向へ約1.3mの区間みられましたが、それ以西には検出することはできませんでした。

東側辺に対応する西側辺も、約3.5m区間から南寄りに関しての区画施設等は検出することができませんでした。

これらのことを参考に、敷地のおおよその規模は東側辺で確認された南北の長さ約8.2m、北側辺で確認された東西の長さ約5.5mで区画された土地で、西側に拡張部が付くようなものでないかと想定されます。

北側辺の西端部と東端部の2箇所に、継ぎ足し拡張された石垣の構築も検出することができました。

ラ. 北西側石垣拡張 (PL. 27)

北側辺の西端部に接するようにして新たに構築された、敷地拡張のための石垣を伴う造成地の存在を確認することができました。延長で約11.8mを測った北側に築かれた石垣は、北側辺石垣との接点から約3mは北へ、向きを西に換えさらに約8.8m続いていました。

この石垣によって拡張された敷地は、調査に着手した時点に認められた。もともと外側で北寄りの石垣に伴う埋積土下において検出されたもので、石垣の頂部は拡張時の転用や削平等により攪乱をうけ、不規則な並びとなり、高さは現状では約0.5～1mの雑然としたものでした。

この北側に構築された石垣の西端部で方向が南へかわり、南北方向の西面する石垣として約5.8mが営まれていました。この区間は北側から引き続き一連の土地を区画する石垣としての機能とともに、溝の側壁をも兼ねあわせる役目をはたすものでした。約30～40cm

の幅をもって西側に同様な側壁を築くことによって、溝としての利用がなされていました。

片岩の割石を積みあげたもので、底部に石敷等の設置はみられません。溝の北端より南側へ約5.8m 区間は側壁等の構築が認められるなど、溝としての形態が明瞭にみられましたが、以南は不明瞭なものとなり、溝としての形態を明らかにすることはできません。石積みのみられた区間は旧地形が傾斜面となっている箇所がほとんどで、埋め立てによる造成地部分です。

西井戸の附属施設としての検出された側壁や底に石敷をもつ排水遺構と方向が一致することから、両者が一連の排水用の溝であったことも考えられますが、途中部分の大半が攪乱等により明確にすることができなかつたので、若干の疑問点は残ります。

西井戸の排水遺構とこの溝が一体のものであるとした場合、西井戸の使用開始時期は溝と石垣が構築され、敷地の拡張がなされた頃に推定できます。

7. 北側石垣西階段 (PL. 22, 23, 24, 25)

東西方向をなす北側刃石垣の前面にあたる北寄り部分を埋め立て、新たに拡張した箇所を検出されました。

北側刃石垣の西端部のみならず、東端部角においても継ぎ足し拡張された石垣が検出され、延生軒跡地東側部分も敷度にわたる造成によって、敷地が形成されて行ったことが明らかになりました。

北側刃石垣を伴う敷地区画がなされた後、その西端部角から北・西側へかけて敷地拡張がなされたのに続き、またしても拡張がなされたもので、継ぎ足し拡張された部分は、北側刃石垣の東端部角から、同じく東側刃の西端部角から北方向へ延びた石垣が、西方向へ向きをかえる変換点に至る区間で、石垣と階段とによって構成されていました。

東端部角で確認された継ぎ足しの状況は、既存の石垣の並びを明らかに意識したもので、北側刃の東端に接し、東側刃の石垣並びの延長線上に続く構築でした。現状では土圧等わずかに東側へ張りだしていますが、構築当初は直線状だったことが推測されます。

東側刃の延長線上を約1m 北方向へ延びた石垣は、方向を北西方向へかえ約4.1m 続き、階段が形成されていました。階段は3段で幅は約90cm、踏み代は約30～50cmに、段差は約30～50cmに及び、各段ごとに数値のばらつきがみられました。階段の東側部は石垣の積みあげと関連して構築され、側壁の設置はありませんでした。西側部は側壁をも兼ねた石垣の構築がなされ、その先端は北側刃の西端部角から北側へ延びた石垣に接していました。

延生軒跡地の東側部分においても、出入りのため階段施設が北側の外石垣に構築されていたように、この階段は延生軒の西側部分への出入りのためのものであったことが考えられます。

カ. 55-8番地南北石垣 (PL. 39)

延生軒跡地の西端側には丘陵上方からの傾斜面が接していましたが、敷地内への土砂の流入や傾斜面の崩壊を防ぐための施設として、石垣の構築がなされていました。崩壊などによって部分的にしか残存していませんでしたが、本来は延生軒跡の敷地とほぼ似かよった範囲に広がりが見られたことが考えられます。

現存する石垣の主な部分は長さが約14mあり、上部と下部での比高差は約3.5mに及んでいました。石垣が構築された当初は整然とした積み重ねであったことが考えられますが、長年にわたる雨水の浸透や土圧などの影響によって、不規則な雑然とした様相を呈する石垣にかわってしまったようです。

この傾斜面の南側寄りの下端にみられた、わずかな土地の広がりに構築された西井戸の西脇にも石垣の一部の残存がみられ、排水遺構をも兼ねたものとして築かれていたようです (PL. 29~30)。

まとめ — 延生軒跡西側部分 —

延生軒跡地の西側部分も東側部分と同様に、敷地に及ぶ敷地の拡張が行われた後に、調査に着手した時点において見られたような状況に至ったことを確認することができました。

調査着手時にみられた、もっとも北寄りに構築された石垣による拡張によって、西側部分の時期を遡りえる敷地跡遺構はすべて地中に埋もれてしまったようで、表面上は遺構存在の片りんさえも伺い知ることはできませんでした。

調査に着手する時点での土地の利用は、東側部分と同様に農耕地としてなされ、畦のなごりと思われる地表の高低が、わずか見かけられました。

また、耕作土層での表面採集において、近世から現代に至る時期の陶磁器片の散布があり、文化6年の下八万村分間絵図に描かれた建物配置等の資料から、何らかの遺構が検出されるであろうことは、おおよその検討がつけられていました。

まずは西側部分の北端に露呈していた、東西方向へのびる北面の石垣部分の調査から実

施したわけですが、その結果は延生軒跡地内の敷地拡張のための造成でも、新しい時期に属するものであることが確認されました。敷地造成の際に石垣の裏込めを兼ねて埋められた土層中に認められた遺物は、近世から近代へかけてのものが混然一体とした状態で、時期の違いを層位の違いで確認することはできませんでした。おそらく、造成に際して延生軒本体側方面から多量の土砂を動かした折、新旧の遺物が交じりあったためと考えられます。

石垣の構築状況も、延生軒と何らかの係わりがあったと思われる、他に検出された造成地に伴う石垣とはやや異なり、雑然としたものでした。使用された石材もこぶりな片岩が多く、積みあげも統一のない雑なものでした。

この造成地の埋積土下から検出された、時期を遡りえる石垣の残存状態はわるく、随所において石材が抜き去られており、転用されたことも考えられます。

石垣を構築することによって造成された部分の時期ですが、裏込めの埋積土中から近代の陶磁器片が出土したことや、造成地の周囲の状況を見ると、北側前面は神社の施設の一部として使用されていたこと、石垣の東寄りの土地は農耕地として使用され、高さは低いながらも同様な石垣の構築がみられたことなどを考えあわせても、延生軒に直接結びつくような根拠はえられず、延生軒とは関連のない新しい時期になされた拡張だと考えられます。

延生軒跡地の西側部分における敷地の造成で、早い段階になされたのは東側部分の外石垣で区画された敷地と対応するような位置に、石垣を築くことによって造成された箇所とわかりました。

矩形をなす区画地で東側辺、北側辺はすべてにわたって検出することができましたが、西側辺については約 $\frac{1}{2}$ を検出することができましたが、南側辺に関してはその大半を検出することはできませんでした。

東側辺で確認されたように、南端側は石垣の積み重ねが少なく、北端側へ行くにしたがって高さも増してくるという状況、さらに北側辺の石垣に見られた東端側、西端側ともに同様な高さであったことなどを考えあわせれば、造成前の地形が北側へ向けて傾斜地形となっていたことによるものと思われます。

これらの事実石垣の裏込めに見られた旧地形と土層の断面観察によっても確認することができました。

矩形の区画の北側辺の東・西側の両端部で検出することのできた縦ぎ足し拡張の痕跡

ですが、北面する東西方向の北側辺に両者とも接するように築かれており、接合部分の石組み状況からみても、北側辺は明らかに連続する石垣として形成されたものであり、構築の順序からしても先だつものであることが判断されます。

東端部と西端部に築かれた石垣は、両者ともに矩形状区画の敷地を意識したもので、東端部の拡張は東側辺の延長線上に、西端部の拡張は西側辺の延長線上になされていました。

両拡張部分の構築された先後関係ですが、調査の結果、西端部側の拡張の方が先に、東端部側の拡張の方が後に実施されたことが確認されました。

西端部において構築された石垣の連続する面に、東端部から構築された石垣の並びが接する造りとなっていました。また、両者によって囲まれた地点、つまり、西端側石垣の前面で、東端側石垣の裏込めにあたる場所での掘り下げによっても、西端側石垣が東端側石垣の裏込めや、造成時の埋めたて土によって埋めつくされていたことなどからも、先後関係は明らかとなりました。

西端部から構築された石垣によって、延生軒西寄り部分の敷地が区画されて行ったわけですが、その一連のものとして続きにあたる西辺の石垣を利用しての、排水施設の一部が検出されましたが、西井戸の存在と排水施設の方向性からみて、互に関連する施設として機能していたことも考えられます。人の生活と水とは切れない関係にあり、特に人の出入りの多かった延生軒にあっては、井戸の必要性も高かったと思われます。西井戸は枠組、流し場、排水施設のどれをとりあげても立派な造りで、盛時の延生軒には似合いの泉であったことでしょう。

東端部から継ぎ足し拡張された部分には、石垣の構築とともに延生軒への出入りのための施設としての、階段の設置がみられましたが、東側部分の外石垣から検出されたものと比較すれば、小規模な階段としか言いようがありません。また、階段の構築や石材にしても見劣りのするものでした。

下八万村分間絵図に描かれた延生軒の建物配置に比定して見た場合、位置的には主たる瓦葺屋根の家屋の西寄りに描かれた、わら葺屋根の建物付近にあたるのではないかと思います。東側の階段部分の描写は鮮明にみられるのに、西階段部分は認められませんでした。若干の疑問は残りますが、小規模なものであったため省略されたことも考えられます。

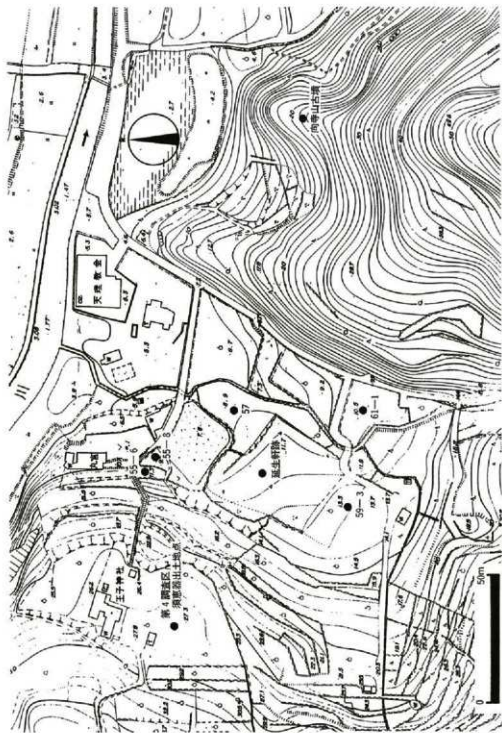


fig. 9 調査地位置図

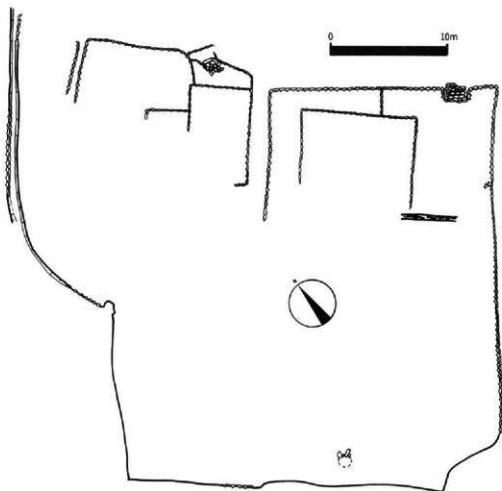


fig. 10 延生軒跡主要遺構模式図

3 出土遺物の概略

阿波藩家老長谷川氏の別荘「延生軒」の跡地からは、近世から近代へかけての時期の各種多量の陶磁器類が出土しています。

本稿では特に延生軒と係わりのあると思われる、その主要なものについての概略の説明を行うものです。

文化6年(1809)の下八万村分間絵図を参考に、延生軒の位置を現地で確認できた地形に照らし合わせてみた場合、地番でいえば58-1・2・4番地と55-9番地付近に該当するようです。土地の造成や削平による土砂の移動などによって、地形に変更が加えられてい

ることも事実ですが、58-1・4番地付近から陶磁器類の出土が多くみられ、絵図との一致を伺わせるものです。

出土遺構の項でもみられたように、延生軒の敷地にわたる造成や拡張、延生軒廃棄後の民家の建設や農耕地への転用などによっても、跡地にだいふ手が加えられているようでした。

別荘「延生軒」の創建についてですが、向寺山の地は戦国武将庄野和泉守の館地であったものが、蜂須賀氏の阿波入国により、長谷川氏に帰するところとなったとされる場所です。

長谷川氏の誰の代に領地となったかは不確かですが、一説には2代の時すでに別荘地となっていたともいわれます。

4代貞長の代、元禄3年(1690)には僧鉄崖が「延生軒記」を作っており、その一節に「元禄己巳……」とあり、元禄2年(1689)に別荘が向寺山の地に建設されていたことが伺えます。

このように元禄年間の初期の頃に、延生軒が営まれていたことは疑う余地もないでしょう。

また、その終えんは貞長以降の歴代の当主に続いて生じた不運なできごとや、明治維新という大変革の波によって引きおこされたようです。

延生軒跡から出土した陶磁器類の遺物は、その大半がこの年代に属するものでした。

層序によって遺物の年代を確定して行くことは、度重なる拡張などに伴う削平や土壌の移動による遺構の破壊や遺物の混在のため、困難な状況でした。

出土した陶磁器類にみられた特徴は、その生産地が西日本一帯に広がり、肥前系、東海系、京焼系、地元の大谷系と多岐にわたったものでした。そのうちでも、肥前系の製品が質・量ともに主たる地位を占めていました。

個々の遺物の詳細な観察は紙面の都合上、すべての個体について行うことができないので、個々の具体的な内容については、遺物の観察表を参照していただきたいと思います。

碗(青磁染付碗、青磁碗)

大別すると肥前系の青磁染付碗、染付碗、東海系・京焼系・大谷系の碗に分類することができます。特に肥前系の青磁染付碗と染付碗が量的にも多く出土しました。

1～7、9、10、15、19、20、23、28、29、109などは、いわゆる丸碗型に属する青磁染付碗です。109は胴上半部が欠損しているため明らかではありませんが、それ以外のものに

はすべて口縁部内側直下に、四ツ割花卉連続文が施文されていました。さらに施文の上下端を条線で縁どるものと、そうでないものの両者に区別することもできました。また見込付近に二条の圈線が施されたものと、2、5のように施されていないものもありました。見込中央部の施文は大別して五弁花と染付による2種ですが、五弁花は1、5、15、19、20、23にみられた簡略化されたものと、2～4、6、7、9、10の花弁まで表現されたものが存在しました。

28と29には呉須による染付文様が、109には12弁の菊花文が施されていました。高台内の施文は1は無文ですが、29は草銘、109には文様が、これら以外には渦福銘がみられました。

以上が施文の概略ですが、整形の技法などはその痕跡をわずかに残す、1～3、7、19、23、28や、釉にむらのある1、4、19や、青磁釉の発色が不良なもの10、15、20、23、貫入のみられるもの2、4、5、7、9、10、15など、同様な青磁染付碗であっても随所に各々の特徴がみられました。5、10、15、19、20、23、28、29などは18C後半あたりの年代が考えられるのではないのでしょうか。

12は青磁の丸碗で胎土、発色ともに良好で青磁釉独特の深みのある色調を呈しています。蓋を伴う碗と考えられ、器壁は薄く仕上げられ、技術的にも高く評価できるもので、有田皿山製の高級青磁ではないかと考えられます。

11、30は筒型の青磁碗で、両者とも同様な器形をなし、青磁釉の発色も良好なものです。

11には見込中央の施文は見られませんが、30には簡略化されてない五弁花が施されていました。時期的には18C後半頃が考えられるのではないのでしょうか。

24、25は底部から口縁部へかけて外方へ広がる器形をとる、端反型に近い青磁染付碗で、口縁部内側直下に四ツ割花卉連続文が施されています。見込中央には簡略化された五弁花のコンニャク判の押印が見られます。高台内には渦福銘がありました。両者ともに整形時の痕跡がわずかみられ、青磁釉の発色も不良でくすんだ緑色に近い色を呈していました。

24には施釉のむらが認められました。両者の年代は18Cの範ちゅうに納まるものと思われます。

16は24、25と同様な器形をなすものですが、白磁と思われる製品です。内面及び高台内にも施文等は一切認められませんでした。整形時の痕跡をわずか残し、発色不良でくすんだ白色を呈しています。口径、高さ、底径とも24、25と似かよったものですが、胴部の器壁が若干薄造りとなっていました。

蓋（青磁染付蓋）

青磁染付の碗に伴うと思われる青磁染付蓋です。器形的には丸味をもつ8, 17, 18, 22, 197, 198, 297, やや扁平なもの13, 14, つまみ部脇に線をもちつ21, 92, 196に分類できそうです。21, 92, 196はその器形等からして24, 25あたりの青磁染付碗に伴う可能性も考えられます。13, 14のやや扁平な蓋は具須による染付文様と渦福銘が施文されていました。同様な手法は青磁染付碗の28, 29に見られており、相対応するものかもしれません。17, 18, 22などは渦福銘と簡略化された五弁花コンニャクの押印がみられ、青磁染付碗ら、10, 15, 19, 20, 23などとの関連が考えられます。

皿（青磁皿）

26, 27は青磁製の皿で2枚出土しました。

出土した地点は58-4番地の北寄り、二次堆積の土壌中の別個の地点から見つかりました。型押しによる輪花型の作りで、両者とも雲龍竹梅文様の図柄で、寸法もほぼ同じものです。おそらく、当初は何枚かが一組となった、組物として使用されていたことが伺われます。製作者は同様な製品の出来あがりを用意したことと思えますが、26は内外面に貫入が見られ、外面の発色もやや不良で、くすんだ色調を呈しています。27は青磁釉の発色もよく、良好な焼成となっています。年代的には17C末あたりを推定することができるのではないかと思います。元禄年間の初期頃あたり、延生軒の創建時期とも保わってくるものです。

変形皿（金彩染付皿）

32は変形皿で富士型をしたものです。型押し、張りつけ高台の技法による製品です。口縁端部には口鏝が施されていました。施文は外面部に染付による雲文、雷文が、内面には藤花文が染付と金彩で描かれています。器形、手法ともに珍しいものです。金彩の箇所は剝離が著しいのですが、わずかにその痕跡を認めることができます。小破片での出土であったため全体の寸法は不明ですが、器高は2.2cmあり、胎土や焼成ともに良好な製品です。年代的には17C中～後へかけての時期があたりと推定されます。

33は中国明製の芙蓉手染付大皿の一部です。

この時期の製品が日本国内、それも徳島において出土したことは特筆すべきものです。同一個体と考えられる小破片が2点出土しています。口径、器高等は不明ですが、底径は復原径で14.8cmありました。胎土には砂粒を含んでいますが、焼成はかたいよい仕上がりのもので、高台畳付には擦痕状のスジが、同じく高台内の削りにも認められました。

この時期の中国製磁器類は、オランダ東インド会社によって一手に取り引きがなされ、ヨーロッパ方面へ大量の製品を輸出し、ほう大な利益をおさめていました。しかしながら、17C中頃になり、明が内乱によって鎖国状態となるに及んで、それ以後、オランダ東インド会社は商品購入の道をたたれ、日本の有田(伊万里)にその代わりに求めるようになり、ここに有田製の磁器類は技術的にも急速に向上して行ったようです。

34は柿右衛門手の染付皿と考えられる製品です。内外面、特に内面はほぼ全体にわたり呉須による草花文が描かれ、高台内には角福銘が認められました。また、口縁部端には口錆が施されていました。胎土・焼成ともに良好で、描かれた草花文も確かな筆さびきで、呉須の発色も美しいものです。寸法は復原によるものですが、口径21.5cm、器高3.5cm、底径13.5cm程度になると思われます。年代は17C後半が推測されます。

水滴

31は色絵が施された肥前系の磁器製鶏形の水滴で、17C後半の年代が考えられるものです。現状で底径4.7×6.0cmの長円形をなし、器高は9.3cmを測りました。赤・黒・黄・緑などの色により、上絵付がなされています。水の出し入れは口ばし奥部に設けられた孔からなされ、首部右側に施された空気抜きの孔によって、水量を調節したことが考えられます。

267は菊の花を型どった水滴で、菊葉と菊花に呉須による染付がみられます。年代的には18C、肥前系の製品と考えられます。

274は呉須による施文がなされた矩形状水滴で、型押し技法によるもので、17C末～18C前に比定できる瀬戸・美濃系製品と考えられます。

碗(陶器碗)

青磁製碗の他に多種類の陶器製の碗が出土しています。116、234、235、239、240、253、259、260、262、264～266、272、273などで、瀬戸・美濃系統のやや大振りの碗で、茶器等として使用されたものと考えられます。呉須や鉄軸による絵付もみられます。全体的に整形痕と内外面の貫入が特徴となっています。262、273は海老とシダ葉文が上絵付された同様な製品ですが、図柄や彩色などの手法は眼平焼などに類似した面もあり、京焼系統も考えられます。

前記した貴重な陶磁器類以外にも、日用雑器とよばれる一群の陶磁器類も、延生軒跡の各所から検出されています。これら出土した陶磁器類の年代は17C中頃から19C後半に広がっていました。文献等にみられた別荘「延生軒」の創建と滅亡とはほぼ一致する年代が与えられるでしょう。

IV 延生軒跡隣接地の概略

61-1番地 (fig.11 P.L. 34)

延生軒本体の南東方向で、東側を山道、西側を谷川にはさまれた三角形の面積534㎡の土地です。山道をはさんだ東側は南北にのびる丘陵の傾斜の強い脇部がせまるといふ、地形的には不利な場所に位置しています。

標高は10～12m前後で二面の平坦地を有する地形をなし、調査に着手する以前は柑橘類の果樹園として使用されていました。二面の平坦地のうち南側の高い位置の面は、人為的な埋め立てによって造成されたもので、コンクリート製の擁壁で囲まれ、木材搬出用のケーブル施設の残がいが見られました。

発掘調査に際してはグリッドを設定して掘り下げに着手し、遺構等の存在を確認した場合は、さらに全面へ拡張し掘り進めて行く方法をとることにしました。グリッドは北側の低い位置の平坦地に二箇所を設定しました。当該地の北より東西方向に3m×15mの北グリッドを、南より東西方向に3m×9mの南グリッドを設け、遺構の存在確認のための掘り下げを始めました。

北グリッド

北グリッドの掘り下げを開始したところ、西よりの部分において表土・耕作土の下層から堅く叩きしめられた帯状にのびる面と、その縁に沿って続く石列を検出したため、グリッドを拡張しほぼ全面にわたって調査の手を広げ、遺構の検出作業を進めました。その結果、この遺構は東西方向へのびる道路遺構であることが確認されました。延生軒跡に近い西よりは遺構の残りもよく、東へ行く程、耕作等による攪乱が見られるという状況で遺構の残りはわかったのですが、幅が約2m前後で、長さが約14m程度の道路遺構の残存を検出することができました。道路敷部分には小砂利を含む粘質土が使用され、路面が作られていました (fig.12 P.L. 35)。

道の北側縁には石垣状に積みあげられた結晶片岩礫が一部残存している箇所も見られました (fig.13)。道の南側縁には北側縁で見られたような石積み施設は認めることができませんでした。このことは旧地形によるものかもしれませんが、現時点では平坦地化されていますが、旧地形は谷川や丘陵脇部から流出してきた堆積土によって、北西方向への傾斜地形となっていたことが考えられます。このため、道の建設に際しては北側に石積みをする

必要性があったことも考えられます。

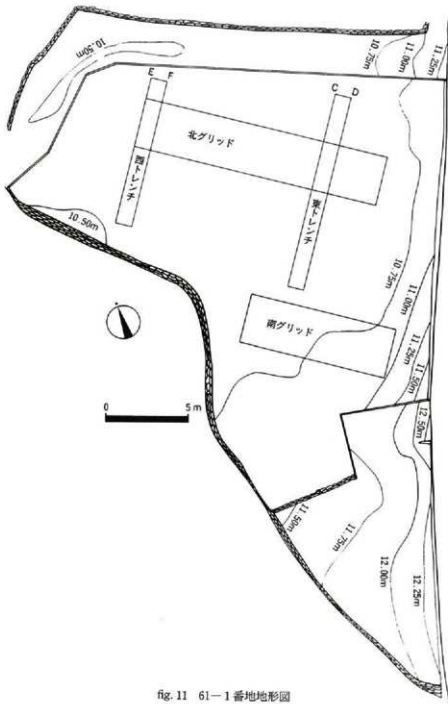


fig. 11 61-1 番地地形図

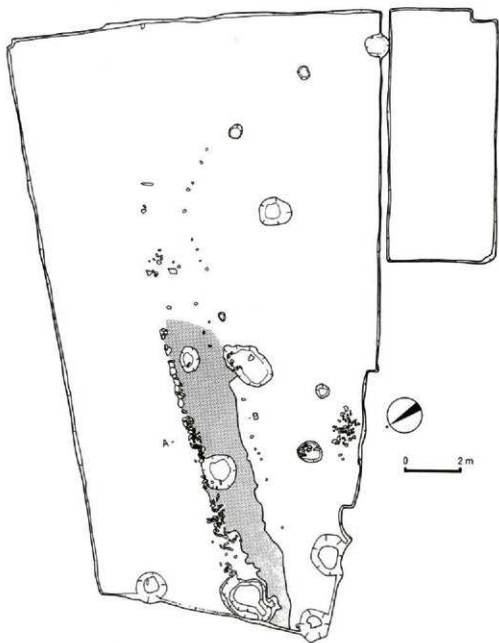
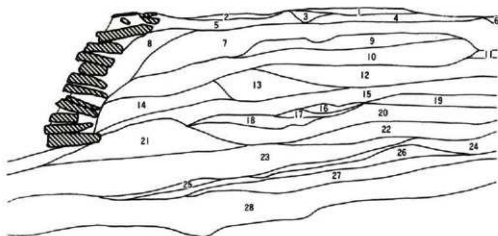


fig. 12 道路遺構図



- | | | |
|---------------------------|----------------------------|---------------------------|
| 1 明褐色 (7.5Y R5/6) 粘質 | 11 にぶい黄褐色土 (10Y R5/4) | 21 にぶい褐色 (7.5Y R5/4) 砂粘壤土 |
| 2 にぶい黄褐色土 (10Y R5/4) | 12 にぶい黄褐色 (10Y R5/4) 砂粘壤土 | 22 黄褐色土 (2.5Y 5/4) 粘質 |
| 3 にぶい黄褐色 (10Y R5/4) 砂粘土 | 13 にぶい黄褐色 (10Y R5/4) 砂粘土 | 23 にぶい黄褐色 (10Y R5/4) 壤土 |
| 4 オリーブ褐色シルト (2.5Y 4/4) | 14 にぶい黄褐色 (10Y R5/2) 砂粘土 | 24 にぶい褐色 (7.5Y R5/4) 砂粘土 |
| 5 黄褐色土 (10Y R5/3) 粘結質・砂粘質 | 15 にぶい黄褐色土 (2.5Y R6/4) 粘質土 | 25 にぶい褐色 (7.5Y R5/4) 砂粘土 |
| 6 にぶい黄褐色土 (10Y R5/4) 粘結質 | 16 にぶい黄褐色 (10Y R5/4) 砂粘土 | 26 赤褐色土 (10R 2/1) |
| 7 褐色土 (10Y R4/6) | 17 黄褐色土 (2.5Y R5/3) 粘質 | 27 明褐色 (7.5Y R5/3) 砂粘土 |
| 8 にぶい黄褐色土 (10Y R5/4) | 18 にぶい黄褐色 (10Y R6/4) 砂粘土 | 28 オリーブ黄色粘土 (5Y 6/3) |
| 9 明褐色 (7.5Y R5/6) 砂粘壤土 | 19 にぶい黄褐色土 (10Y R6/4) 粘結質 | |
| 10 にぶい黄褐色 (10Y R5/4) 砂粘土 | 20 にぶい黄褐色 (10Y R5/3) 砂粘土 | |

fig. 13 道路遺構土層断面図

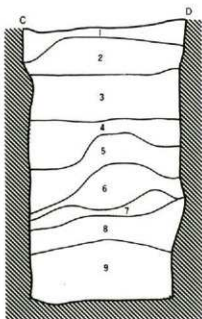
南グリッド

南グリッドの表土・耕作土を除去した下層からは、谷川や丘陵脇部からの流れこみによる砂利、小礫まじりの堆積土層が検出され、遺構とおぼしきものの存在はありませんでした。

北グリッドの拡張によって道路遺構を平面的にとらえることができたので、さらに下層に他の遺構が存在するか否かを確認するために、東よりに1m×12m、西よりに1m×9mの南北方向の二箇所のトレンチを設け、土層序の観察をも兼ねて掘り下げを実施しました。掘り下げは1.8～2m近くにも及びましたが、遺構等は検出することができませんでした (fig. 14～15 P.L. 36)。

L 11.00m 0

1m

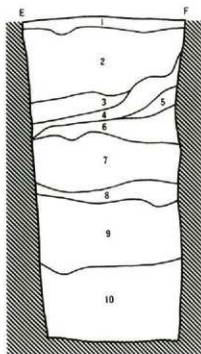


- 1 表土・耕作土
- 2 にじい・黄褐色土 (10Y R5/4)
- 3 黄褐色土 (10Y R5/6)
- 4 にじい・黄褐色土 (10Y R5/4)
- 5 にじい・黄褐色土 (10Y R5/4)
- 6 にじい・黄褐色土 (10Y R5/4)
- 7 黄褐色 (10Y R5/6) 砂利礫土
- 8 黄褐色 (10Y R5/6) 砂利礫土
- 9 褐色 (10Y R4/6) 砂利礫土

fig. 14 東トレンチ北壁面土層図

L 11.00m 0

1m



- 1 表土・耕作土
- 2 褐色土 (10Y R4/6)
- 3 褐色土 (10Y R4/6) 砂粘質
- 4 褐色土 (7.5Y R4/4)
- 5 褐色土 (10Y R4/4)
- 6 褐色 (10Y R4/4) 砂利礫土
- 7 にじい・黄褐色土 (10Y R5/4)
- 8 にじい・黄褐色 (2.5Y R6/4) 粘質土
- 9 にじい・黄褐色 (10Y R5/4) 礫土
- 10 にじい・黄褐色 (10Y R5/4) 砂利礫土

fig. 15 西トレンチ北壁面土層図

本調査地内からの出土遺物は表土・耕作土中から検出された、近代の様相をもつ陶磁器片と瓦片のみで、延生軒跡と直接係わりのあると思われるような時期の遺物は見られませんでした。

遺構としては前記したような道路遺構が検出されましたが、延生軒の周辺が描かれている下八万村分間絵図によれば、本調査地の東よりに門屋の建物、西よりに谷川にかかる石橋を見うけることができます(PL. 1~3)。絵図に見られた門屋と石橋との位置関係が

らみて、道路遺構はその間をつなぐ道であったことが考えられます。道が存在した話は伝え聞いていないという旧地主の古老のことばもあり、かなり古くから埋ってしまったことも考えられます。絵図によれば門屋の建物は東西方向をむき、屋根の表現方法からみて瓦葺きであったことが想像されますが、規模などは絵図上から判断することは難しいように思われます。門屋の基礎部分遺構の検出も考えられたのですが、付近は山道の拡幅工事などで土砂の切り盛りがなされており、調査地内からは残念ながら確認することはできませんでした。谷川に渡された石橋も、絵図とほぼ同じ場所に結晶片岩のぶあつい板石が存在しており、当時のままのものではないかと思われます。

57番地 (fig.16 P L, 37)

延生軒跡の北側、一段低い位置にあり、西側を王子神社駐車場、東側を谷川にはさまれた土地で、長方形を呈し面積461㎡あります。標高7～9m前後の上面平坦でなだらかな北面傾斜の土地で、野菜と柑橘畑として使用されていました。

遺構検出にむけ調査地の中央付近に5m×15mの南北方向トレンチを設定し、掘り下げに着手しましたが、浅いところでは表土下0.2mに満たない付近から、片岩の岩盤層が検出されるという状況がみられました。表土は有機質分を多量に含んだ腐植土壌で、次の耕作土も有機質分を多く含む性質のものでした。

トレンチの南北両端で幅0.5mの深掘りを実施しましたが、耕作土から下層は片岩の風化礫土や地山層（片岩の岩盤層）でした (fig.17 P L, 38)。

遺構と考えられるような様相は検出することができませんでした。

遺物は表土と耕作土から若干の出土がみられました。土師器は細片のため器形等を特定することは不可能でした。須恵器片は杯あるいは杯蓋の一部分と考えられるものが、陶磁器類については最近まで使用されていた食用器類等がみられました。

55-8番地 (fig.18 P L, 40)

王子神社駐車場の西側上方で、神社参道脇に位置する面積191㎡の土地です。

東向きの傾斜面が数段に削平されたうちの最も下に位置する面です。調査前は畑地として利用されていました。標高は9～10m前後あります。

調査に際しては2m×7mのトレンチを設定し、掘り下げにあたりました。確認できた土層序は削平等の造成によるものと考えられるシルト質土壌の堆積が数層つづくという状況

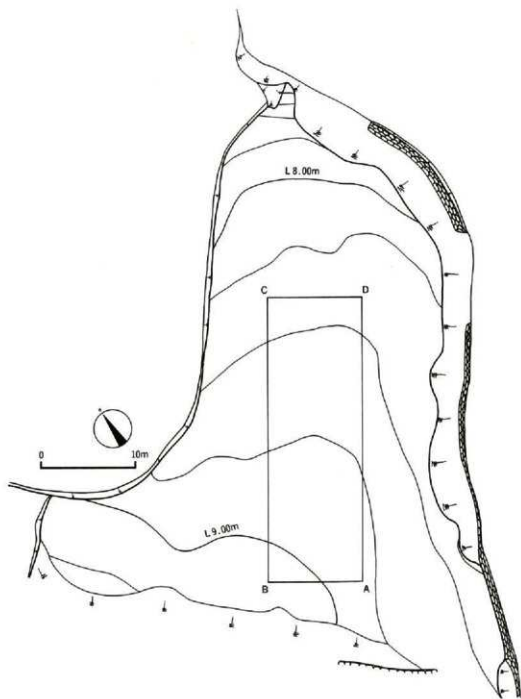


fig. 16 57番地地形図

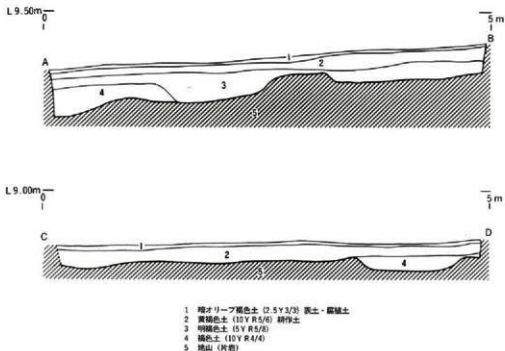


fig. 17 57番地南北トレンチ土層図

でした (fig. 19)。出土遺物としては表土・耕作土中から、ゴミとして廃棄されたような状態で、プラスチックや現代陶磁器片が出土しました。

55-6 番地 (fig. 18 P L. 41)

55-6 番地は同 8 番地と同じく王子神社駐車場西側の東向き傾斜面を削平整地した場所で、西よりには高さ 1m 前後もある石垣が築かれ、調査前は畑地として利用されていました。

南北方向に 2m×7m のトレンチを設定し掘り下げに着手しましたが、表土・耕作土、シルト質堆積土、地山層の土層序で遺構・遺物の検出はみられませんでした (fig. 20)。

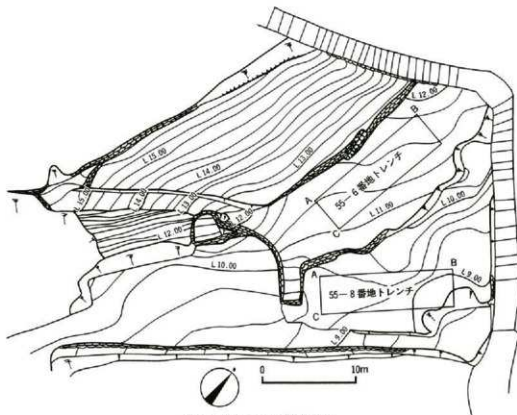
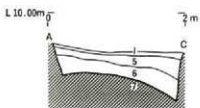
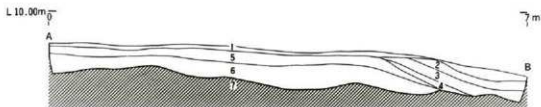


fig. 18 55-6・8 番地地形図



- 1 褐色土 (10Y R4/3) 表土
- 2 褐色シルト (7.5Y R4/4)
- 3 褐色シルト (10Y R4/5)
- 4 褐色シルト (10Y R4/5)
- 5 褐色シルト (10Y R4/5) 砂利・礫層
- 6 褐色シルト (10Y R4/4) 礫層
- 7 地山 (片組)

fig. 19 55-8 番地トレンチ土層図

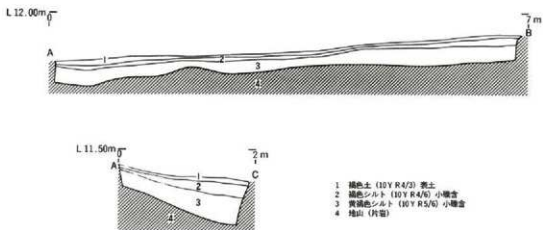


fig. 20 55-6 番地トレンチ土層図

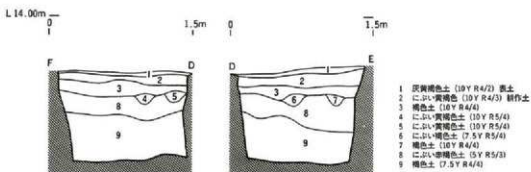
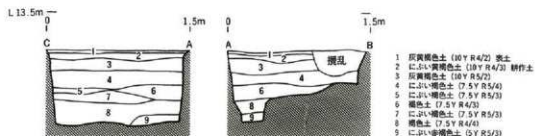


fig. 21 59-3 番地グリッド

59-3番地 (fig.21 P.L. 42)

延生軒本体の南側に広がる標高13~15m前後の北面するなだらかな傾斜地で、その西、南端側は丘陵高所からの急傾斜面が迫っています。延生軒本体とは約1m近い段差があり、その高い側に位置しています。本調査地の大半は檜の植林地、柑橘畑として使用されていました。調査に際して立木の伐採や下草刈りを行ったところ、表土面から近世~現代に至る陶磁器類を採集することができました。このため、1.5m×1.5mのグリッドを調査地に設定し掘り下げに着手しました。その結果、幾層もの堆積層を検出することができました。

土質は割合に粒子が細かいながらも、片岩の風化土や大なり小なりの礫を含むというものでした。浅いところでは表土下30センチあまりの位置から片岩の岩盤層が検出されました。遺物は表土、耕作土中から近世~現代へかけての椀、鉢等の陶磁器片と鋸先、鎌、剪定鋏等の農具を採集しました。

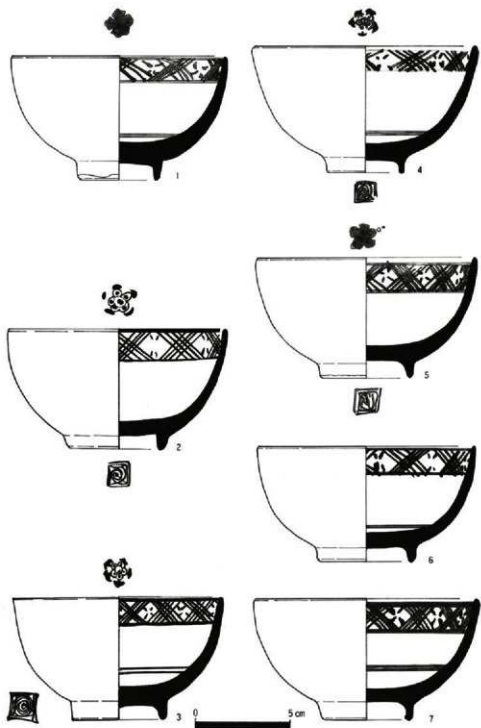


fig. 22 延生軒跡出土遺物(1)



fig. 23 延生軒跡出土遺物(2)

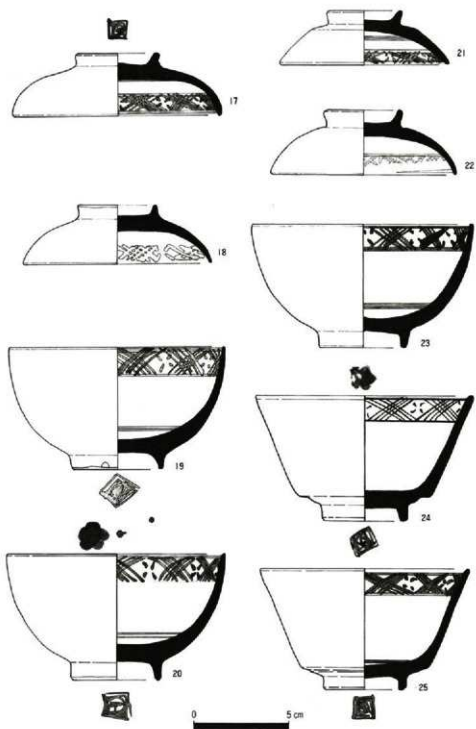


fig. 24 延生軒跡出土遺物(3)

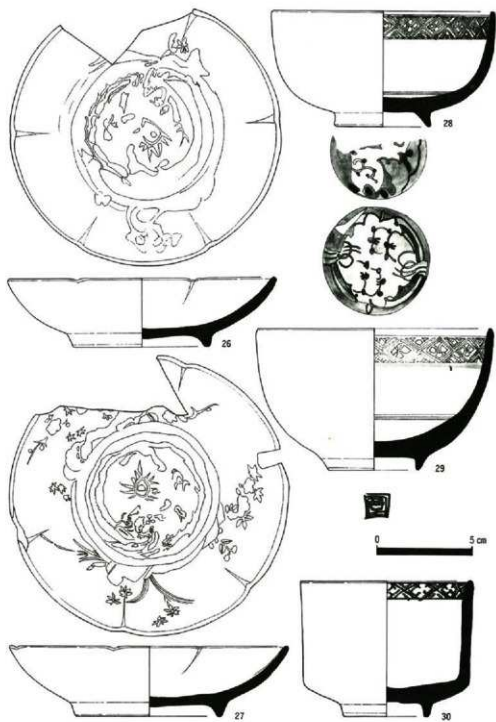


fig. 25 延生軒跡出土遺物(4)

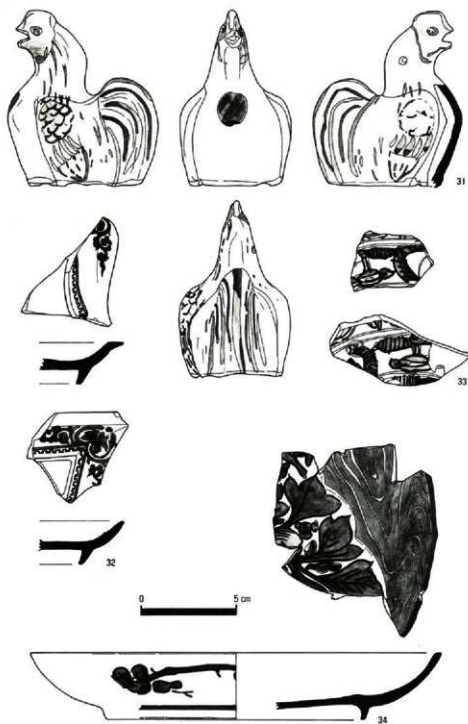


fig. 26 延生軒跡出土遺物(5)

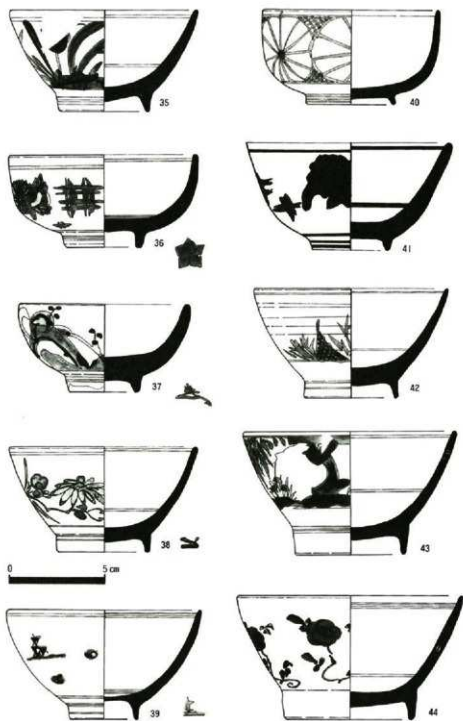


fig. 27 延生軒跡出土遺物(6)

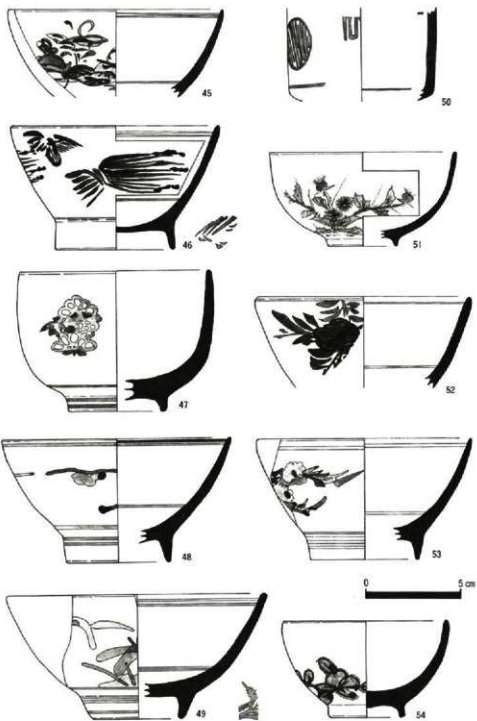


fig. 28 延生杆跡出土遺物(7)

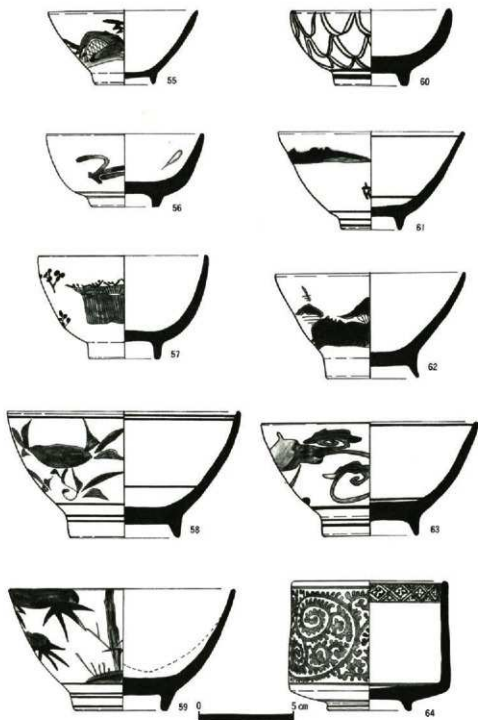


fig. 29 延生軒跡出土遺物(8)

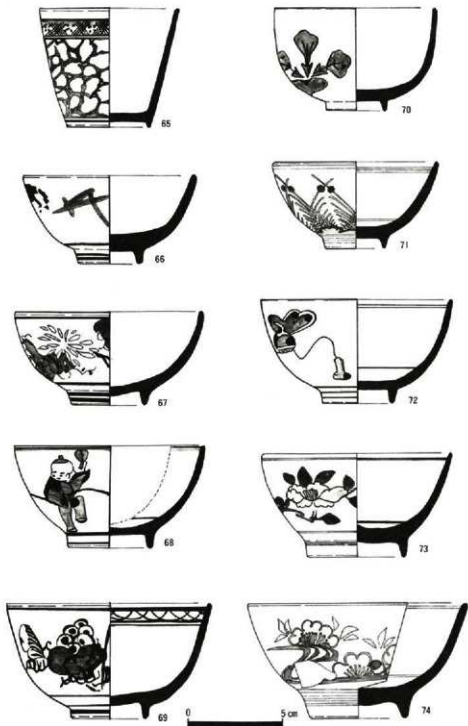


fig. 30 延生軒跡出土遺物(9)

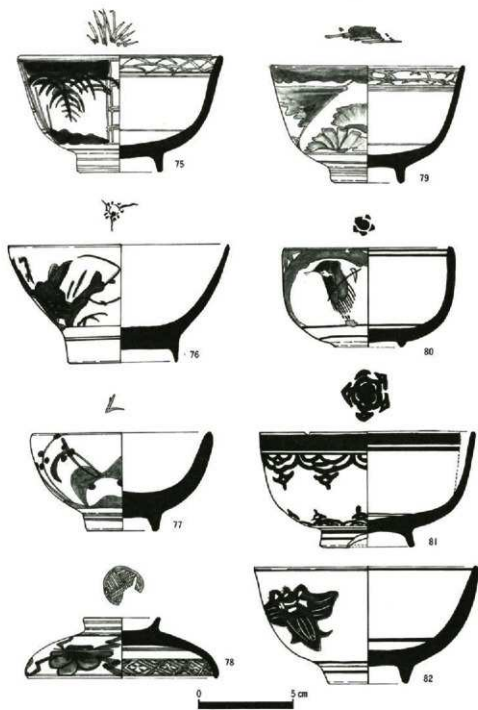


fig. 31 延生軒跡出土遺物(0)



fig. 32 延生軒跡出土遺物(10)

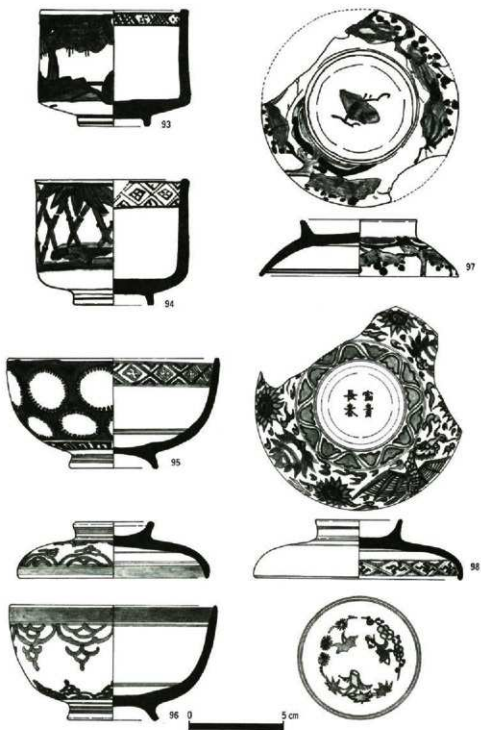


fig. 33 延生軒跡出土遺物(1)

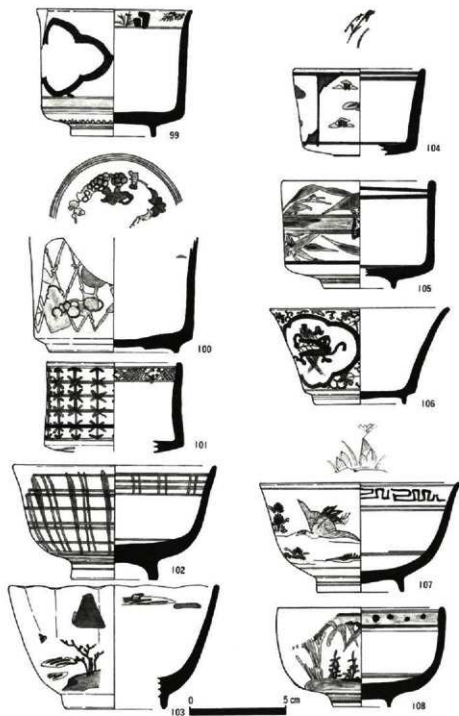


fig. 34 延生軒跡出土遺物(3)

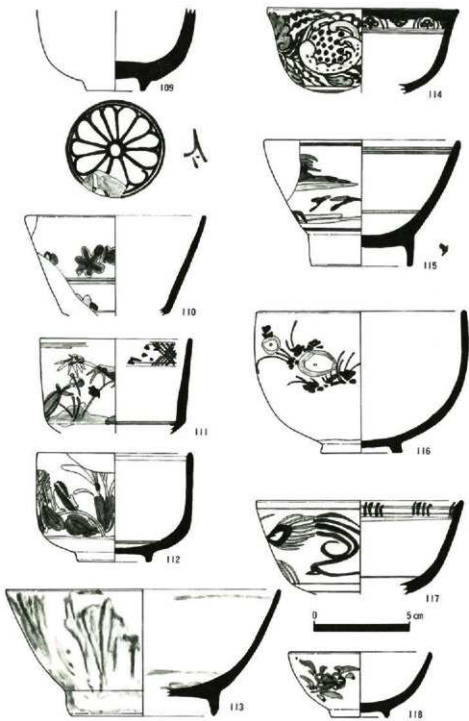


fig. 35 延生軒跡出土遺物00

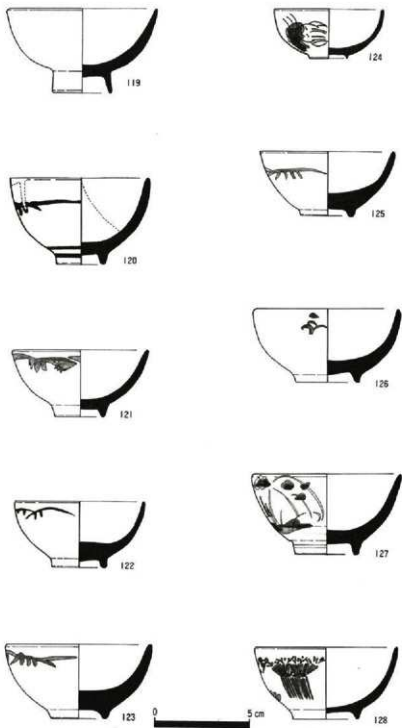


fig. 36 延生軒跡出土遺物(5)

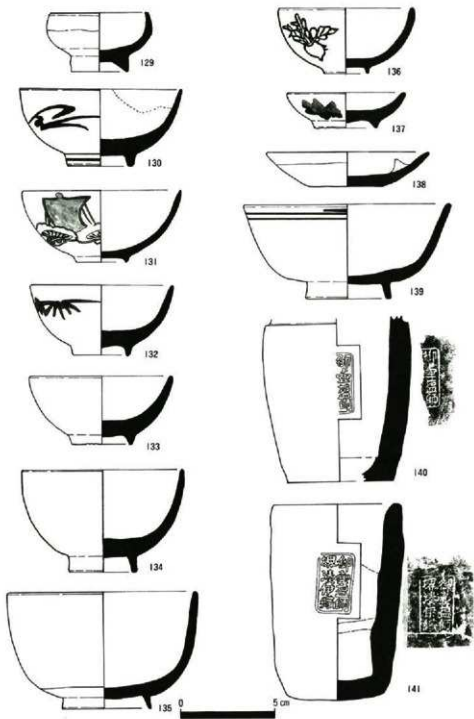


fig. 37 延生軒跡出土遺物09

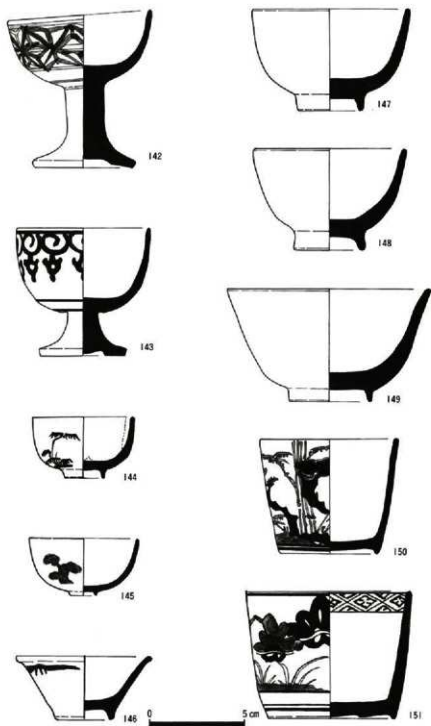


fig. 38 延生軒跡出土遺物(17)

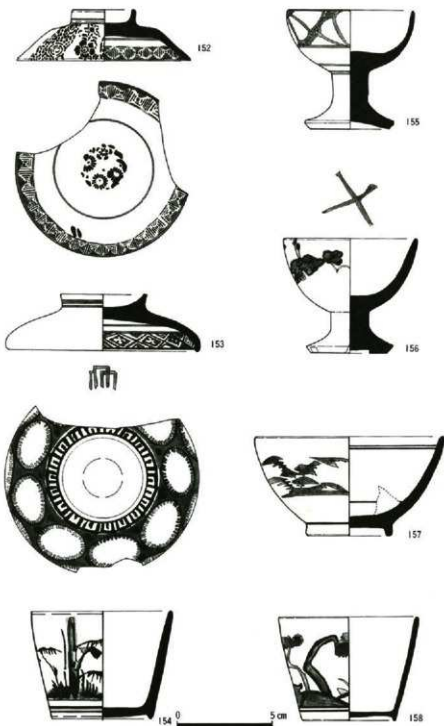


fig. 39 延生軒出土遺物圖

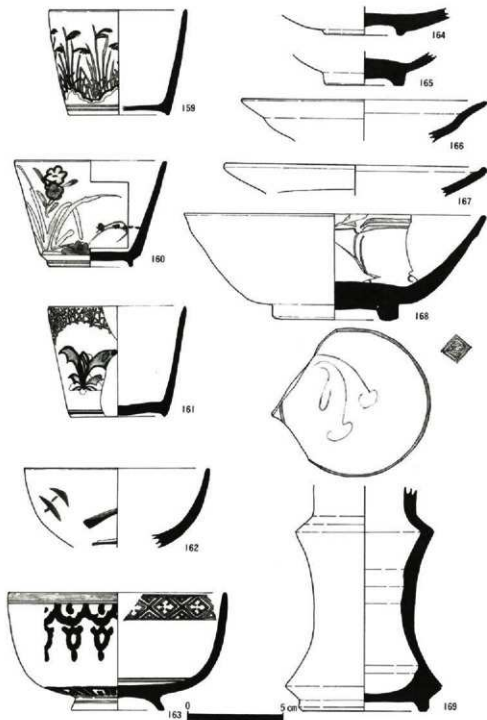


fig. 40 延生軒跡出土遺物(9)



170



172



171



173



174

fig. 41 延生軒跡出土遺物③

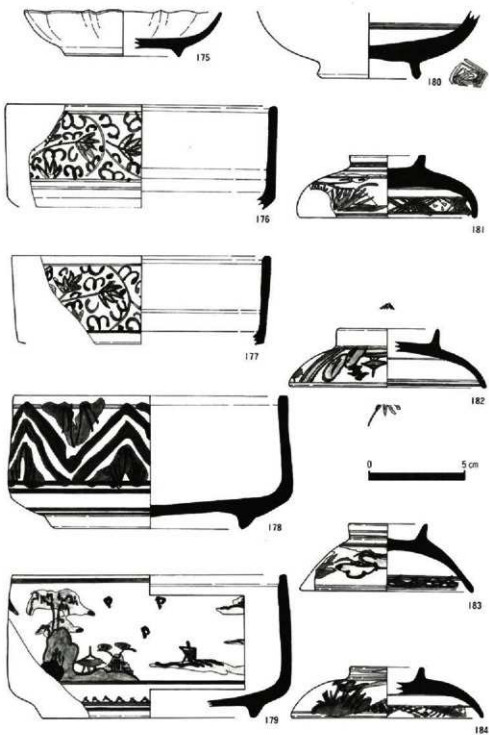


fig. 42 延生軒跡出土遺物20

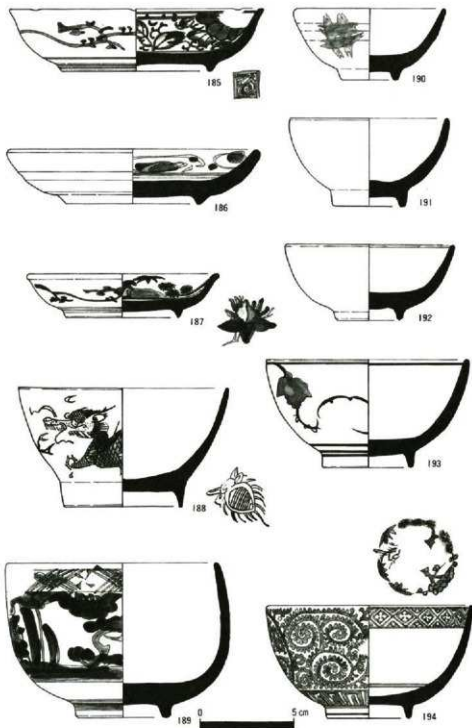


fig. 43 延生軒跡出土遺物四

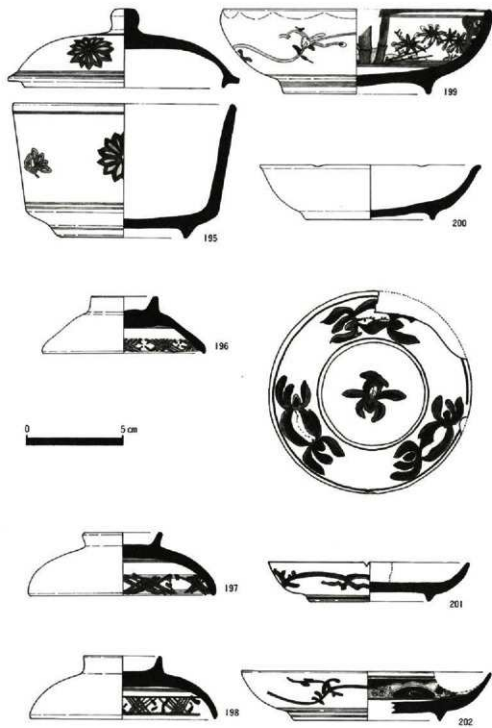


fig. 44 延生軒跡出土遺物(四)

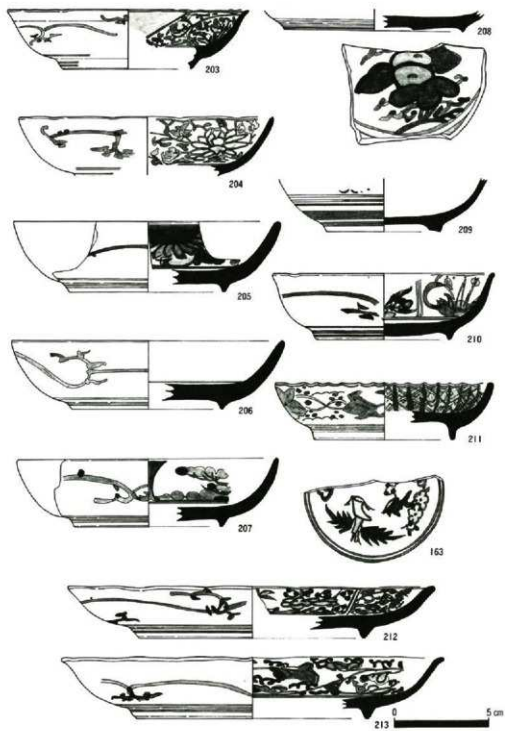


fig. 45 延生軒跡出土遺物06

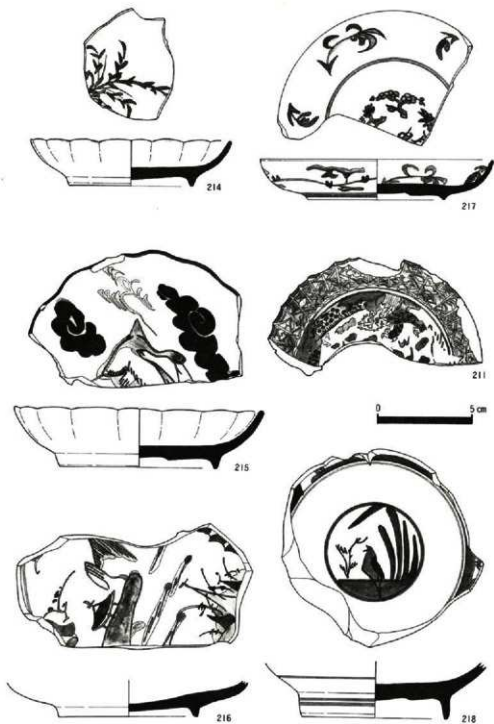


fig. 46 延生軒跡出土遺物(5)

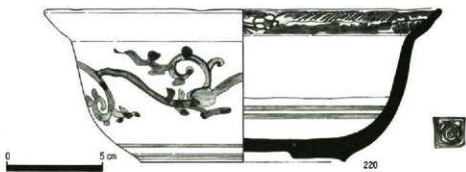
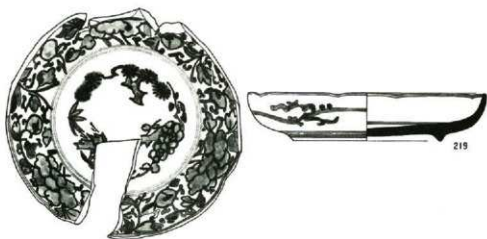
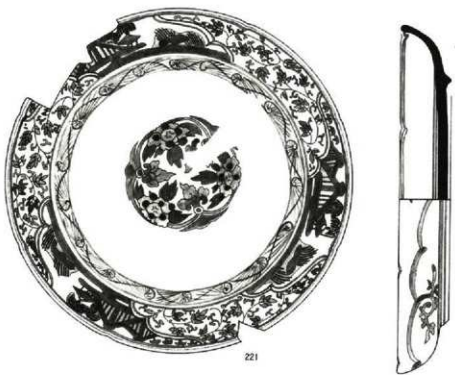


fig. 47 延生軒跡出土遺物(2)



221



222

fig. 48 延生軒跡出土遺物(27)

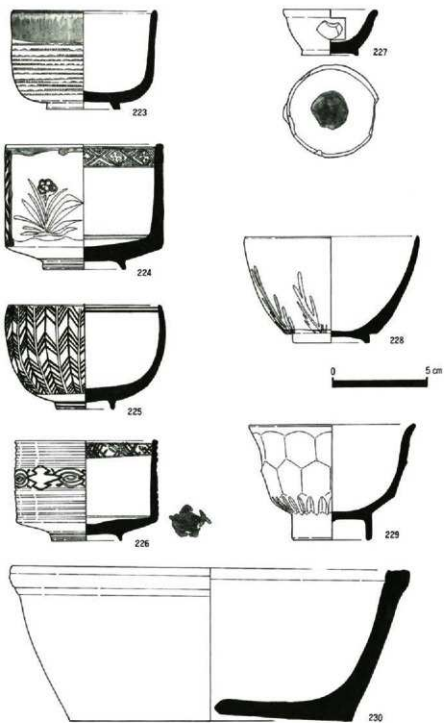


fig. 49 延生軒跡出土遺物図

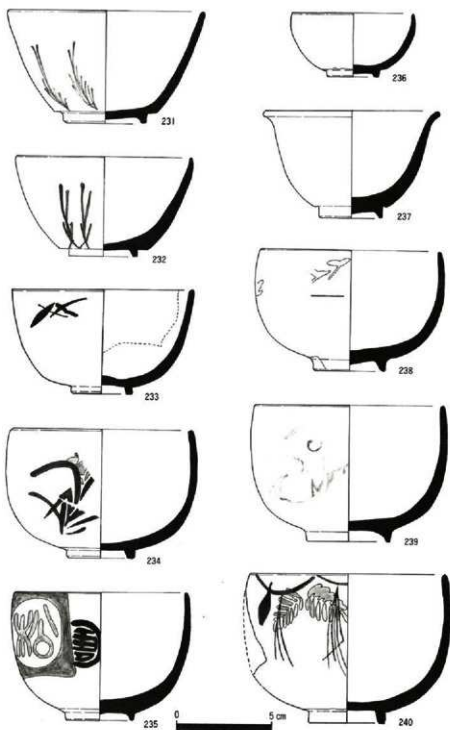


fig. 50 延生軒跡出土遺物(29)

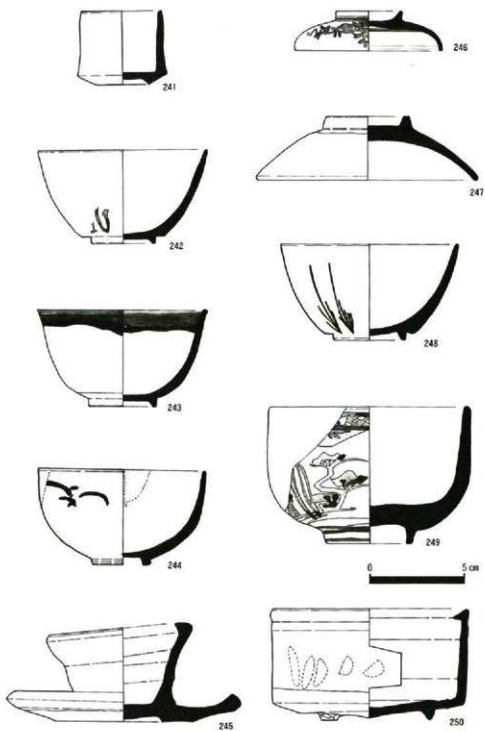


fig. 51 磁生軒跡出土遺物(1)

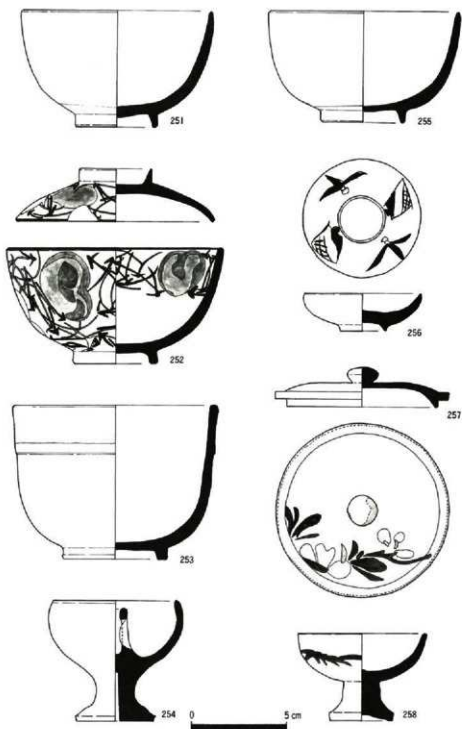


fig. 52 延生軒跡出土遺物3D

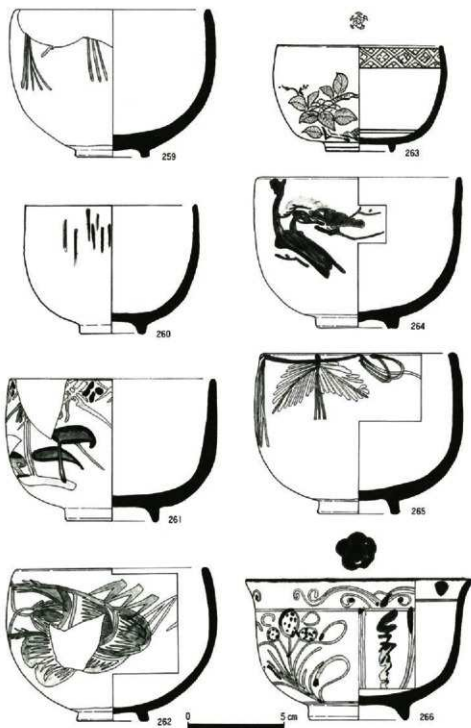


fig. 53 延生軒跡出土遺物(四)

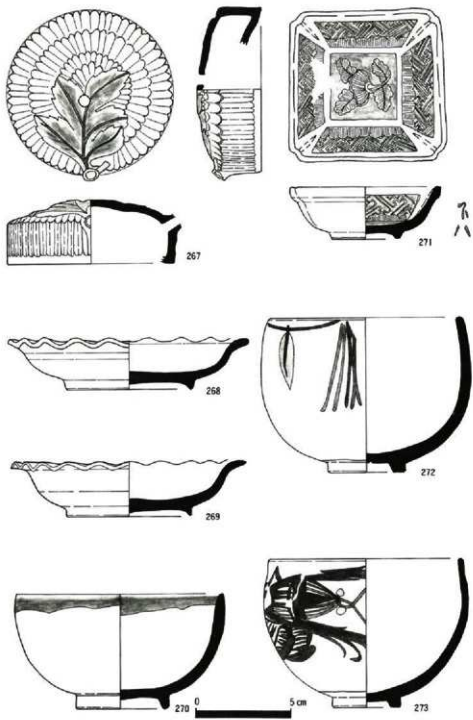


fig. 54 延生軒跡出土遺物(3)



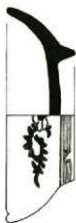
274



275



276



高
号
春
雷
賣



fig. 55 延生軒跡出土遺物④

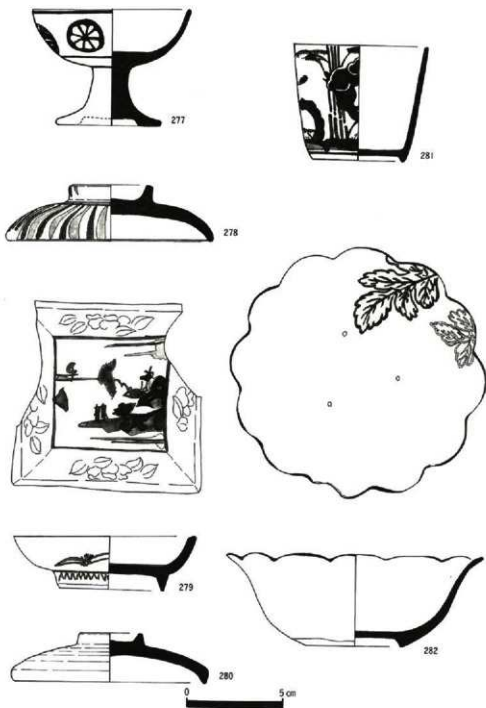


fig. 56 延生軒跡出土遺物(3)



fig. 57 延生軒跡出土遺物30

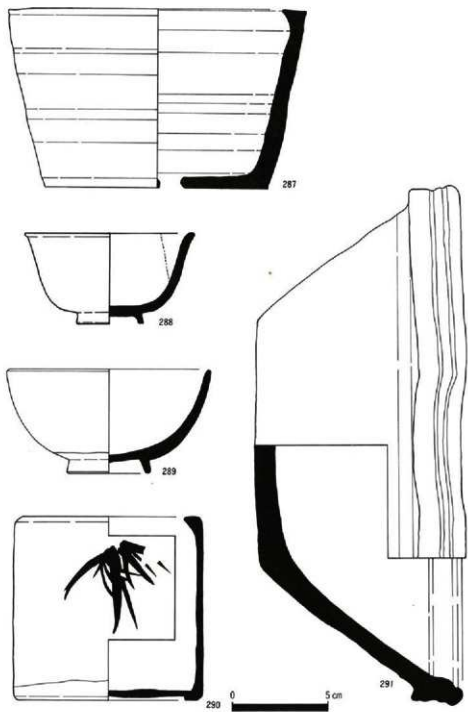


fig. 58 延生軒跡出土遺物(Ⅱ)

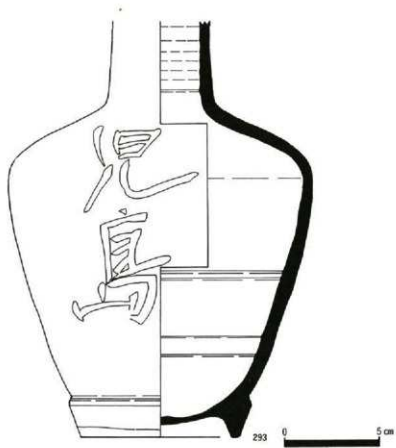
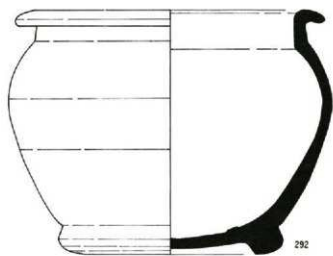


fig. 59 延生軒跡出土遺物⑧

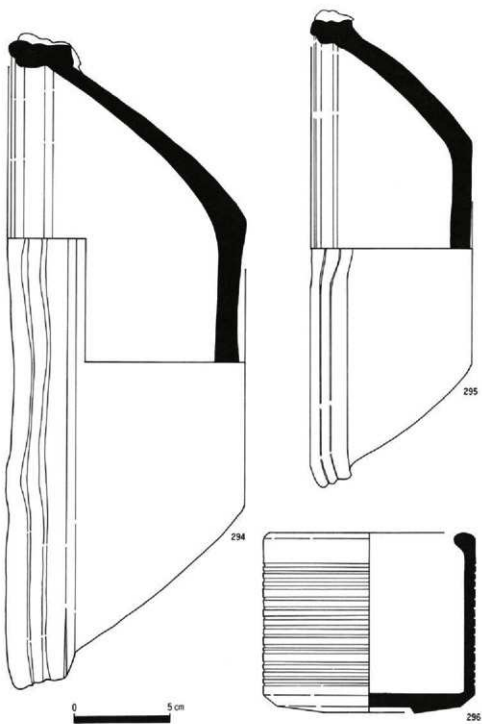


fig. 60 延生杆跡出土遺物(3)

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
1	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判 口縁部内側に四ツ割花卉連続文	□ 径 11.4 高 6.6 底 径 4.0	整形痕を残す 施釉にむら 発色不良 高台部量付砂粒付着
2	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判 口縁部内側に四ツ割花卉連続文 高台内満覆銘	□ 径 11.6 高 6.4 底 径 5.1	整形痕を残す 発色良好 外面貫入 高台部量付砂粒付着
3	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花 口縁部内側に四ツ割花卉連続文 高台内満覆銘	□ 径 11.1 高 6.5 底 径 5.0	整形痕を残す 発色良好 高台部量付砂粒付着
4	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花 口縁部内側に四ツ割花卉連続文 高台内満覆銘	□ 径 11.8 高 6.8 底 径 4.1	施釉にむら 発色良好 内外面貫入 高台部量付砂粒付着
5	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判 口縁部内側に四ツ割花卉連続文 高台内満覆銘	□ 径 11.7 高 6.4 底 径 5.0	発色良好 外面貫入 高台部量付砂粒付着 18C 俵
6	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花 口縁部内側に四ツ割花卉連続文 高台内満覆銘	□ 径 11.6 高 6.2 底 径 5.1	発色良好 高台部量付砂粒付着
7	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花 口縁部内側に四ツ割花卉連続文 高台内満覆銘	□ 径 11.8 高 6.5 底 径 4.8	整形痕を残す 発色良好 外面貫入 高台部量付砂粒付着
8	磁器	蓋	青磁染付	見込中央に五弁花 口縁部内側に四ツ割花卉連続文 高台内満覆銘	□ 径 10.0 高 3.3 つまみ径 4.2	整形痕を残す 発色良好 高台部量付砂粒付着
9	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花 口縁部内側に四ツ割花卉連続文 高台内満覆銘	□ 径 11.4 高 6.6 底 径 4.8	発色良好 高台部量付砂粒付着 外面貫入

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
10	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台内溝襷銘	口 径 11.0 高 6.2 底 径 5.0	発色不良 高台部畳付砂粒付着 内外面貫入 18C 後
11	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花, 二条 圈線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文	口 径 9.0 高 7.1 底 径 4.5	整形痕を残す 発色良好 高台部畳付鉄錆付着 筒型碗
12	磁器	碗	青 磁		口 径 11.4 高 6.2 底 径 4.6	発色良好 高台部畳付青磁釉なし 重物 有田黒山
13	磁器	蓋	青磁染付	見込中央に染付文 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台内溝襷銘	口 径 10.5 高 2.7 つまみ径 4.5	発色良好 内面貫入 つまみ部砂粒付着 18C 後
14	磁器	蓋	青磁染付	見込中央に草花文, 二条 圈線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台内溝襷銘	口 径 11.0 高 3.3 つまみ径 4.2	発色良好 つまみ部砂粒付着 有田黒山 18C 後
15	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花コンニ ャク判, 二条圈線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台内溝襷銘	口 径 11.8 高 6.5 底 径 4.5	発色不良 内外面貫入 高台部畳付整形痕 18C 後
16	磁器	碗	白 磁		口 径 11.4 高 6.5 底 径 4.4	整形痕を残す 発色不良でややくすん だ色調を呈す 施釉にむら 端反形
17	磁器	蓋	青磁染付	見込中央に五弁花コンニ ャク判, 二条圈線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台内溝襷銘	口 径 9.9 高 3.1 つまみ径 4.2	整形痕を残す 発色良好
18	磁器	蓋	青磁染付	見込中央に五弁花コンニ ャク判, 二条圈線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台内溝襷銘	口 径 11.4 高 6.5 つまみ径 4.8	発色良好

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
19	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判、二条團縁 口縁部内側に四ツ割花弁連続文 高台内満福銘	口 径 11.5 高 6.7 底 径 4.5	整形痕を残す 施軸にむら 高台部置付砂粒付着 18C後
20	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判、二条團縁 口縁部内側に四ツ割花弁連続文 高台内満福銘	口 径 11.5 高 6.7 底 径 4.5	発色不良 高台部置付砂粒付着 18C後
21	磁器	蓋	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判、二条團縁 口縁部内側に四ツ割花弁連続文	口 径 9.0 高 2.9 つまみ径 4.0	施軸にむら 発色不良
22	磁器	蓋	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判、二条團縁 口縁部内側に四ツ割花弁連続文 高台内満福銘	口 径 9.9 高 3.4 底 径 3.9	発色不良 高台つまみ部鉄錆付着
23	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判、二条團縁 口縁部内側に四ツ割花弁連続文 高台内満福銘	口 径 11.7 高 6.6 底 径 4.6	整形痕を残す 発色不良 18C後
24	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判、二条團縁 口縁部内側に四ツ割花弁連続文 高台内満福銘	口 径 11.5 高 6.6 底 径 4.5	整形痕を残す、端反型 施軸にむら 発色不良 高台部置付砂粒付着 18C初～後
25	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花コンニャク判、二条團縁 口縁部内側に四ツ割花弁連続文 高台内満福銘	口 径 11.0 高 6.4 底 径 4.0	整形痕を残す、端反型 発色不良 高台置付砂粒付着 18C初～後
26	磁器	皿	青 磁	雲龍竹梅文様	口 径 14.2 高 3.7 底 径 7.2	内外面貫入 外面発色不良 型押、輪花型 17C末
27	磁器	皿	青 磁	雲龍竹梅文様	口 径 14.7 高 3.7 底 径 7.2	発色良好 型押、輪花型 17C末

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
28	磁器	碗	青磁染付	見込中央に染付文、二条 團縁 口縁部内側に四ツ割花弁 連続文 高台内溝縁銘	口 径 11.8 高 6.1 底 径 5.0	整形痕を残す 発色良好 18C後 蓋物
29	磁器	碗	青磁染付	見込中央に染付文、二条 團縁 口縁部内側に四ツ割花弁 連続文 高台内草銘	口 径 12.4 高 7.5 底 径 4.7	内外面貫入 異須発色不具 18C後
30	磁器	碗	青磁染付	見込中央に五弁花、二条 團縁 口縁部内側に四ツ割花弁 連続文	口 径 9.2 高 7.2 底 径 4.3	発色良好 18C後
31	磁器	鵝形 水鉢	色 絵	鵝形水滴	視 高 9.3 底部4.7×6.0	底部欠損 赤、黒、黄、緑色
32	磁器	皿	染 付	金彩藤花文	高 2.2	富士型染付皿、口縁 高台部雷文 17C～18C
33	磁器	皿	染 付	芙蓉手染付文	視 高 1.5 底 径 14.8	胎土に砂粒を含む 中国明製
34	磁器	皿	染 付	草花文 高台内角縁銘	口 径 21.5 高 3.5 底 径 13.5	袖右衛門手 口縁あり
35	磁器	碗	染 付	草花文 見込中央に染付銘	口 径 9.8 高 5.4 底 径 4.1	広東型碗 蓋物 18C末～19C初
36	磁器	碗	染 付	子持重ね井桁文、菊花文 見込中央に五弁花コンニ ャク判、團縁	口 径 10.0 高 5.0 底 径 4.0	
37	磁器	碗	染 付	草花文 高台内に銘	口 径 9.0 高 4.7 底 径 3.7	くらわんか手 幕末
38	磁器	碗	染 付	蝶と菊 見込中央に寿字崩 高台部二条團縁	口 径 9.6 高 5.5 底 径 4.5	広東型碗 18C末～19C中
39	磁器	碗	染 付	漁舟図 見込中央に染付銘、二条 團縁	口 径 10.3 高 5.8 底 径 3.6	

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
40	磁器	碗	染 付	菊花つなぎ 高台部二条圓線	口 径 9.3 高 5.0 底 径 4.6	蓋物
41	磁器	碗	染 付	子持井桁、菊花文 見込中央にコンニャク判 銘 高台部二条圓線	口 径 10.9 高 5.7 底 径 4.1	施釉にむら 高台部疊付鉄錆付着
42	磁器	碗	染 付	網干と芦園 見込中央にコンニャク判 銘 口縁部内外面二条圓線 高台部二条圓線	口 径 10.0 高 5.8 底 径 4.8	整形痕を残す 高台部疊付に鉄錆付着 広東型碗 18C末～19C中
43	磁器	碗	染 付	竹と若草 見込中央に寿字銘	口 径 11.3 高 6.5 底 径 5.7	高台部疊付鉄錆付着 広東型碗 18C末～幕末
44	磁器	碗	染 付	草花文 見込中央に染付銘 口縁部内側に二条圓線	口 径 11.6 高 6.5 底 径 6.5	整形痕を残す 発色不良 広東型碗
45	磁器	碗	染 付	草花図 口縁部内側に二条圓線	口 径 11.2 残 高 4.6	広東型碗 18C末～19C中
46	磁器	碗	染 付	福東図 見込中央に染付銘 口縁部内側に二条圓線	口 径 11.0 高 6.6 底 径 6.2	高台部疊付砂粒付着 18C末～19C中 広東型碗
47	磁器	碗	染 付	コンニャク判菊花文 高台部二条圓線 高台部圓線	口 径 10.0 高 7.4 底 径 5.2	整形痕を残す 胎土暗灰色 18C前～中
48	磁器	碗	染 付	草花文	口 径 12.1 高 6.6 底 径 5.5	広東型碗 18C末～19C中
49	磁器	碗	染 付	草花図 見込中央に染付銘	口 径 13.5 高 6.6 底 径 4.7	広東型碗 粗製 18C後
50	磁器	碗	染 付	丸文	残 高 4.9	
51	磁器	碗	染 付	蕨園	口 径 9.9 高 5.0 底 径 3.6	丸碗 18C末～19C前
52	磁器	碗	染 付	草花図 口縁部内外圓線	口 径 11.3 残 高 4.8	施釉にむら 広東型碗 18C末～19C中

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
53	磁器	碗	染付	草花園 口縁部内外圏線 高台二条圏線	口 径 11.3 高 6.4 底 径 5.7	高台部疊付鉄錆 広東型碗 18C末
54	磁器	碗	染付	草花文	口 径 8.7 高 5.1 底 径 3.8	高台部疊付鉄錆 くらわんか 18C
55	磁器	小 坏	染付	海浜園	口 径 8.0 高 3.9 底 径 3.2	整形痕を残す
56	磁器	碗	染付	草花文 高台陰圏線	口 径 8.3 高 3.9 底 径 3.5	くらわんか
57	磁器	碗	染付	栴壇文	口 径 9.1 高 5.5 底 径 3.8	
58	磁器	碗	染付	草花文 見込中央に染付文、圏線 高台二条圏線、高台陰圏線	口 径 12.3 高 6.7 底 径 5.9	高台部疊付鉄錆
59	磁器	碗	染付	雷持竹文 見込中央に寿字花文、二 条圏線 高台二条圏線	口 径 12.0 高 6.5 底 径 5.0	高台部疊付砂粒付着 18C末～19C中
60	磁器	碗	染付	二重網目文 高台二条圏線	口 径 8.6 高 4.0 底 径 4.0	高台部疊付鉄錆 くらわんか 18C
61	磁器	碗	染付	山水園 見込中央に寿字文、圏線 高台二条圏線	口 径 10.0 高 5.2 底 径 3.2	内外面貫入
62	磁器	碗	染付	山水園 見込中央に染付文、圏線	口 径 10.1 高 5.6 底 径 5.1	整形痕を残す 広東型碗 18C末～19C中
63	磁器	碗	染付	草花園 見込中央に染付文、圏線 高台二条圏線	口 径 11.5 高 6.0 底 径 5.1	高台部疊付砂粒付着
64	磁器	碗	染付	納唐草 見込中央松竹梅つなぎ、 二条圏線 口縁部内側に四ツ割花弁 連続文 高台二条圏線	口 径 8.0 高 6.8 底 径 4.4	高台部疊付砂粒付着 銅型碗 18C末～19C前

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
65	磁器	肴口	染付	網目文 口縁部外側に四ツ割花卉 連続文 高台内留字崩銘	口 径 7.3 高 6.3 底 径 4.4	そば猪口 18C末～19C後
66	磁器	碗	染付	草花文 高台二条圈線、高台脇圈 線	口 径 9.2 高 4.7 底 径 3.4	高台部畳付砂粒付着 くらわんか 18C
67	磁器	碗	染付	菊花図 口縁部外側に圈線 高台二条圈線	口 径 10.0 高 5.0 底 径 4.0	施軸にむら 高台部畳付砂粒付着
68	磁器	碗	染付	唐童子 見込中央に唐童子文、圈 線 口縁部外側に圈線 高台圈線	口 径 10.0 高 5.4 底 径 4.5	整形痕を残す 18C末～幕末
69	磁器	碗	染付	葡萄と蝶 見込中央に寿字崩、圈線 口縁部内側に連弧文	口 径 10.8 高 6.1 底 径 4.1	発色不良 高台部畳付鉄錆
70	磁器	碗	染付	蕉文 見込中央に蕉文	口 径 8.6 高 5.5 底 径 3.2	整形痕を残す 薄手 丸輪
71	磁器	碗	染付	交叉草文 見込中央に寿字花文、圈 線 口縁部内側に二条圈線 高台二条圈線	口 径 8.5 高 4.6 底 径 3.0	整形痕を残す
72	磁器	碗	染付	宝尽 見込中央に染付文、圈線 口縁部内側に二条圈線	口 径 10.1 高 5.5 底 径 3.8	薄手
73	磁器	碗	染付	椿と蝶 見込中央に寿字文、圈線 口縁部内側に二条圈線 高台二条圈線	口 径 10.0 高 5.5 底 径 5.2	整形痕を残す
74	磁器	碗	染付	梅と流水文 見込中央に寿字文 高台二条圈線	口 径 11.3 高 6.1 底 径 5.0	高台部畳付砂粒付着
75	磁器	碗	染付	梧子竹図 見込中央に染付草文 口縁部内側に連続弧文 高台二条圈線	口 径 10.6 高 6.2 底 径 4.2	高台部畳付砂粒付着

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
76	磁器	碗	染付	蝶と草花 見込中央に染付文 口縁部内側に二条圍線 高台二条圍線	口 径 11.6 高 6.3 底 径 5.7	整形痕を残す 縮軸にむら 高台部畳付砂粒付着 広東型碗
77	磁器	碗	染付	草花図 高台二条圍線 高台内草文	口 径 9.4 高 5.2 底 径 3.5	整形痕を残す 縮軸にむら 高台部畳付砂粒付着 くらわんか手
78	磁器	蓋	染付	梅文 見込中央に丸文、二条圍線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文	口 径 10.0 高 3.2 つまみ径 4.0	
79	磁器	碗	染付	扇と菊文 見込中央に染付文 口縁部内側に連続弧文 高台筋圍線、高台二条圍線	口 径 10.0 高 6.2 底 径 3.5	整形痕を残す 高台部畳付砂粒付着
80	磁器	碗	染付	柳と女性図 見込中央に五弁花コンニャク判 口縁部内側に二条圍線	口 径 9.0 高 5.3 底 径 3.7	
81	磁器	碗	染付	輪宝雲文 見込中央に五弁花、二条圍線 高台二条圍線、高台筋圍線	口 径 11.4 高 6.1 底 径 5.0	発色不良 撥高台
82	磁器	碗	染付	宝珠雲文コンニャク判 見込中央に五弁花コンニャク判、圍線 高台二条圍線、高台筋圍線	口 径 11.9 高 6.2 底 径 4.3	縮軸にむら 具須発色不良 高台部畳付無軸 くらわんか 18C
83	磁器	碗	染付	松山図 口縁部外側に二条圍線 高台二条圍線	口 径 10.7 高 8.1 底 径 4.5	歪みあり 整形痕を残す 高台部畳付鉄錆 厚手 18C
84	磁器	碗	染付	草と蝶 見込中央に寿字文、圍線 口縁部内側に二条圍線	口 径 10.7 高 6.5 底 径 5.2	発色不良 広東型碗、広東高台 18C末~19C中
85	磁器	碗	染付	二重網目文 高台二条圍線	口 径 9.5 高 5.3 底 径 3.8	くらわんか 18C

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
86	磁器	碗	染 付	雲龍文	口 径 10.0 高 5.2 底 径 3.2	整形痕を残す 発色不良 高台部霰付無軸 18C後
87	磁器	碗	染 付	菊花文コンニャク判 高台龍圍線	口 径 9.7 高 5.2 底 径 3.3	整形痕を残す 施軸にむら 見込蛇ノ目軸ハギ 高台部霰付鉄錆 くらわんか 17C後～18C後
88	磁器	碗	染 付	草花文 高台二条圍線, 高台龍圍 線 高台内中央に染付銘	口 径 9.3 高 4.3 底 径 3.5	内外部貫入 高台部霰付砂粒付着 くらわんか
89	磁器	碗	染 付	草花文 見込中央に染付文	口 径 8.5 高 4.1 底 径 3.0	整形痕を残す 口縁端部口錆 高台部霰付無軸
90	磁器	碗	染 付	葉と薔 見込中央に蕪文	口 径 8.5 高 5.4 底 径 3.3	整形痕を残す 口縁端部外反 薄手
91	磁器	碗	染 付	縞文, よろけ縞文 高台二条圍線	口 径 6.7 残 高 4.6	施軸にむら 発色不良 外面貫入
92	磁器	蓋	青磁染付	見込中央に五弁花コンニ ャク判, 二条圍線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文	口 径 9.5 高 3.1 つまみ径 4.0	施軸にむら 発色不良 つまみ部砂粒付着 胎土灰色 18C後
93	磁器	碗	染 付	柳と草 見込中央に五弁花コンニ ャク判 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台龍草花文, 高台二条 圍線	口 径 7.8 高 6.2 底 径 3.8	施軸にむら 発色不良 高台部霰付砂粒付着
94	磁器	碗	染 付	竹格子文 見込中央に五弁花, 二条 圍線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文	口 径 9.1 高 6.6 底 径 4.2	施軸にむら 発色不良 高台部霰付砂粒付着 筒型碗 18C末～19C前

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
95	磁器	碗	染付	雷輪文 見込中央に染付文、二条 圍線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台二条圍線	□ 径 11.1 高 10.8 底 径 4.1	銀高台 高台部疊付砂粒付着 蓋物
96	磁器	蓋	染付	輪宝雲文 見込中央に五弁花、二条 圍線 つまみ部二条圍線	□ 径 9.8 高 3.0 つまみ径 4.0	整形痕を残す 18C後～19初
97	磁器	蓋	染付	桐葉文 見込内寿字銘 口縁部内側に二条圍線	□ 径 10.5 高 3.1 つまみ径 6.1	整形痕を残す 広東型碗蓋
98	磁器	蓋	染付	雲龍文 見込中央に松竹梅つなぎ 二条圍線 口縁部内側染付連続文 つまみ部富貴長壽銘	□ 径 10.8 高 3.1 底 径 4.0	18C
99	磁器	碗	染付	格扶間 見込中央に松竹梅つなぎ 二条圍線 高台二条圍線 高台脇連続山形文	□ 径 8.2 高 6.8 底 径 4.5	口縁端部やや外反 名絵素地 筒型碗 18C前～中
100	磁器	猪口	染付	竹格子文 見込中央に松竹梅つなぎ 二条圍線	残 高 6.1 底 径 6.8	内外面貫入 発色不良 高台内染付銘 蛇ノ目高台 そば猪口
101	磁器	碗	染付	花卉格子文 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台脇草花文	□ 径 7.2 残 高 4.7	筒型碗 18C末～19初 蓋なし
102	磁器	碗	染付	格子文 見込内格子文 口縁部内側に格子状文 高台二条圍線	□ 径 10.7 高 6.1 底 径 4.5	整形痕を残す 高台部疊付砂粒付着 18C末～幕末
103	磁器	碗	染付	山水図 見込内山水図	□ 径 10.9 高 6.5 底 径 5.1	菊花型碗 19C初～幕末
104	磁器	碗	染付	山水図 口縁部内側に二条圍線 高台脇草花文	□ 径 6.9 残 高 4.9	整形痕を残す 筒型碗 蓋なし 18C末～19C初

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
105	磁器	碗	染付	竹園 見込中央に五弁花, 二条 團線 口縁部内側に二条團線 高台脇團線	口 径 8.1 高 5.7 底 径 3.9	施軸にむら 筒型碗 蓋なし 18C末~19C初
106	磁器	猪口	染付	唐草格狭間 見込中央に五弁花 高台二条團線 高台内湯福結	口 径 9.5 高 5.1 底 径 4.8	整形痕を残す 端反型 そば猪口 18C末~19C中
107	磁器	碗	染付	草花と鶴 見込中央に竹の子文, 二 条團線 口縁部内側に雷文	口 径 10.7 高 5.8 底 径 4.1	19C前~明治
108	磁器	碗	染付	雷持竹 見込中央に五弁花, 二条 團線 高台二条團線	口 径 8.9 高 5.3 底 径 3.1	施軸にむら 高台部畳付鉄錆付曾 18C末~19C初
109	磁器	碗	青磁染付	見込中央に菊花文, 二条 團線 高台内染付結	残 高 4.3 底 径 3.1	内外面施軸にむら 高台部畳付
110	磁器	碗	染付	草花園	口 径 9.9 残 高 5.3	薄手 筒型碗 19C前
111	磁器	碗	染付	雷持竹と若草 見込内二条團線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文	口 径 8.0 残 高 5.0	内外面貫入 釉発色不良 筒型碗
112	陶器 磁器	碗	呉須 に 絵	草花園	口 径 8.1 高 5.8 底 径 3.8	内外面貫入 呉須発色不良 高台部畳付無軸
113	磁器	碗	染付	見込内染付文 口縁部内側二条團線 高台内染付結	口 径 14.4 高 6.7 底 径 7.5	内外面貫入 施軸にむら 発色不良 広東型碗
114	磁器	碗	染付	草花園 口縁部内側草花連続文 高台脇二条團線	口 径 10.2 残 高 4.5	薄手 18C後~19前
115	磁器	碗	染付	山水園 見込内中央に染付文 口縁部内側に二条團線	口 径 10.3 高 6.7 底 径 5.3	高台部畳付無軸 広東型碗

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
116	陶器	碗	具須, 鉄軸	草花文	口 径 11.1 残 高 7.5 底 径 4.3	内外面買入 高台部無軸 具須と鉄軸 瀬戸・美濃系
117	磁器	碗	染 付	染付文 口縁部内側に染付連続文	口 径 10.7 残 高 5.0	施軸にむら 19初～幕末
118	磁器	环	染 付	草花文	口 径 7.5 高 3.5 底 径 3.1	見込内砂粒付着 高台部量付砂粒付着 18C後～19C
119	磁器	环	白 磁		口 径 8.0 高 4.5 底 径 3.1	整形痕を残す 施軸にむら 高台部量付砂粒付着
120	磁器	碗	染 付	笹葉文	口 径 7.4 高 4.6 底 径 2.6	施軸にむら 発色不良 高台部量付砂粒付着 くらわんか手 18C前
121	磁器	小 环	染 付	笹葉文	口 径 7.2 高 3.5 底 径 2.6	施軸にむら 高台部量付砂粒付着
122	磁器	小 环	染 付	笹葉文	口 径 7.0 高 3.5 底 径 2.8	整形痕を残す 施軸にむら 厚手
123	磁器	小 环	染 付	笹葉文	口 径 7.7 高 3.9 底 径 2.9	施軸にむら 高台部量付砂粒付着 厚手
124	磁器	猪口	赤 絵	尚老文	口 径 5.8 高 2.6 底 径 2.1	整形痕を残す 軸にむら 18C末～幕末
125	磁器	小 环	染 付	草花文	口 径 7.2 高 3.4 底 径 2.8	施軸にむら 高台部量付砂粒付着 厚手
126	磁器	碗	染 付	草花文	口 径 7.6 高 3.9 底 径 3.2	整形痕を残す 施軸にむら 高台部量付砂粒付着
127	磁器	碗	染 付	草花文	口 径 7.8 高 4.2 底 径 3.2	整形痕を残す 施軸にむら 高台部量付砂粒付着 厚手
128	磁器	碗	染 付	薬垣文	口 径 7.5 高 3.8 底 径 3.4	整形痕を残す 薄手 18C

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
129	陶器	猪口	白釉		口径 5.2 高 3.1 底径 2.9	整形痕を残す 施釉にむら 見込内・体部上半に施釉
130	磁器	碗	染付	草花文	口径 8.6 高 4.1 底径 3.5	施釉にむら 高台部畳付砂粒付着 くらわんか手 幕木
131	磁器	小环	上絵付	花と流水	口径 8.4 高 3.8 底径 2.7	整形痕を残す 胎土灰色 赤・緑・黒絵 瀬戸・美濃系
132	磁器	小环	染付	笹葉文	口径 7.4 高 3.7 底径 2.9	整形痕を残す 施釉にむら 高台部畳付鉄錆付着 くらわんか手 18C
133	磁器	小环	白磁		口径 7.5 高 3.6 底径 3.2	施釉にむら 発色不良
134	磁器	碗	白磁		口径 8.6 高 5.4 底径 3.6	整形痕を残す 施釉にむら 高台部畳付砂粒付着 厚手、くらわんか手
135	陶器	碗	天目手		口径 10.1 高 6.2 底径 4.7	整形痕を残す 釉にむら 胴下部・高台部無釉
136	磁器	小环	染付	蕪文	口径 7.2 高 3.5 底径 2.9	施釉にむら 発色不良 薄手
137	磁器	紅皿	染付	草文 (コンニャク判)	口径 6.2 高 1.9 底径 3.3	施釉にむら 異質発色不良 高台部畳付無釉
138	陶器	燈明皿	緑釉		口径 8.6 高 1.8 底径 4.0	見込内・体部上面施釉 施釉部貫入
139	磁器	碗	染付	蕪文 口縁部外側二条圈線	口径 1.0 高 5.0 底径 4.5	整形痕を残す 見込内重ね横痕跡あり
140	陶器	焼塩壺	手捻り	御遺塩師□□□銘	口径 9.0 残高 8.5 底径 5.7	蓋付

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
14	陶器	焼塩壺	手捻り	御堂塩部堺浪伊織結	口 径 6.5 高 10.4 底 径 5.2	蓋付
14	磁器	仏飯具	染 付	麻葉文	口 径 7.5 高 8.1 底 径 5.1	整形痕を残す 蛇ノ目高台
14	磁器	仏飯具	染 付	輪宝雲文	口 径 7.0 高 6.8 底 径 4.4	整形痕を残す 施軸にむら 蛇ノ目高台
14	磁器	猪口	染 付	竹梅文	口 径 5.4 高 3.2 底 径 2.1	整形痕を残す 高台疊付部鉄錆付着 薄手
15	磁器	猪口	染 付	松文 (コンニャク判)	口 径 5.7 高 3.0 底 径 1.5	整形痕を残す 薄手
16	磁器	猪口	染 付	笹葉文	口 径 7.2 高 3.4 底 径 3.1	整形痕を残す 施軸にむら 端反型
17	磁器	碗	白 磁		口 径 8.4 高 5.4 底 径 3.5	整形痕を残す 施軸にむら 厚手 くらわんか手 18C前
18	磁器	碗	白 磁		口 径 8.1 高 5.4 底 径 3.7	整形痕を残す 施軸にむら 厚手 くらわんか手 18C前
18	磁器	碗	白 磁		口 径 10.8 高 6.0 底 径 4.3	整形痕を残す 施軸にむら 厚手 端反型
19	磁器	猪口	染 付	松竹文	口 径 7.2 高 6.1 底 径 5.2	整形痕を残す そば猪口 18C前～後
19	磁器	猪口	染 付	松竹梅文 見込中央に五弁花。二条 圓線 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文	口 径 8.8 高 6.7 底 径 6.7	そば猪口 蛇ノ目高台 18C後～19中
19	磁器	蓋	染 付	草花文 見込に菊文	口 径 9.1 高 2.7 つまみ径 3.1	整形痕を残す つまみ部鉄錆付着

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
153	磁器	蓋	染付	雪輪文 見込中央に染付文 口縁部内側に四ツ割花弁連続文 つまみ部脇染付連続文	口 径 10.0 高 3.0 つまみ径 4.6	整形痕を残す 18C後～19C初
154	磁器	猪口	染付	竹梅文	口 径 7.5 高 5.7 底 径 5.3	整形痕を残す 施軸にむら 高台部登付鉄跡付着 そば猪口 18C中～19C初
155	磁器	仏飯具	染付	菊割菊花つなぎ	口 径 6.6 高 6.3 底 径 4.2	施軸にむら 呉須発色不具 蛇ノ目高台
156	磁器	仏飯具	染付	梅枝文 見込中央に十字文	口 径 7.1 高 6.1 底 径 4.0	整形痕を残す 施軸にむら 高台部登付無軸
157	磁器	碗	染付	松山図 見込に寿字文	口 径 10.0 高 5.3 底 径 4.5	整形痕を残す 施軸にむら 高台部登付鉄跡付着
158	磁器	猪口	染付	松草図	口 径 7.5 高 5.5 底 径 4.9	高台部登付無軸 薄手 そば猪口 18C前～後
159	磁器	猪口	染付	芒野図	口 径 7.3 高 5.6 底 径 5.3	施軸にむら そば猪口 18C前～後
160	磁器	猪口	染付	草花図	口 径 7.9 高 5.6 底 径 4.4	施軸にむら 高台登付部砂粒付着 そば猪口 18C
161	磁器	猪口	染付	水裂地紋色裏意絵 (草花図) 高台内罫字崩 底部二条間線	口 径 7.2 高 5.9 底 径 5.0	整形痕を残す 薄手 そば猪口 18C
162	磁器	碗	染付	草花文	口 径 9.8 残 高 4.2	くらわんか手 胎土はやや灰色 18C末～19C前
163	磁器	碗	染付	輪宝雲文 見込中央に松竹梅つなぎ 二条間線 口縁部内側に四ツ割花弁 連続文	口 径 11.5 高 6.3 底 径 4.4	呉須発色良好 撥高台 18C後～19C初

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
164	磁器	皿	染付	草花園	残高 1.5 底径 4.2	施軸にむら 呉須発色不良 高台部墨付砂粒付着
165	磁器	碗	青磁		残高 1.8 底径 4.2	内面貫入 高台内重ね残痕跡 胎土灰色, ガラス質の厚軸 中国製 (龍泉窯)
166	磁器	皿	白磁		口径 13.0 残高 2.2	施軸にむら やや青味をおびた白色
167	陶器	蓋			口径 14.0 残高 1.5	整形痕あり 貫入
168	磁器	鉢	青磁	草花文	口径 16.0 高 5.6 底径 6.6	胎土灰色 施軸にむら ガラス質の厚軸 中国製 (龍泉窯)
169	磁器	花生	青磁		残高 11.8 底径 6.5	施軸にむら 内外面貫入 高台部墨付鉄錆付着
170	磁器	仏飯具	染付	笹葉文	口径 6.0 高 5.3 底径 3.4	整形痕を残す 施軸にむら
171	陶器	蓋	染付	草花文	口径 9.4 高 3.3 つまみ径 3.7	内外面貫入 呉須発色良好 瀬戸・美濃系
172	磁器	碗	染付	福寿字文 見込中央に角福字銘, 二 条團縁 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文	口径 11.1 高 6.1 底径 4.4	整形痕を残す 高台部墨付鉄錆付着 撥高台 18C後~幕末
173	磁器	碗	染付	飛行竜文 見込中央に染付文 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文	口径 12.4 高 6.7 底径 5.2	呉須発色良好 撥高台 薄手
174	磁器	猪口	染付	松竹梅文	口径 7.5 高 6.1 底径 5.0	整形痕を残す 呉須発色不良 18C前~後
175	磁器	皿	ろり軸	菊花型	口径 10.3 高 2.4 底径 6.0	高台部墨付無軸 発色良好 17C末~18C

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
176	磁器	鉢	染付	草花文	口径 14.2 残高 5.5	整形直を残す 施軸にむら 蓋物
177	磁器	鉢	染付	草花文	口径 13.6 残高 4.7	整形直を残す 施軸にむら 蓋物
178	磁器	鉢	染付	草花文	口径 14.4 高 7.0 底径 9.9	整形直を残す 施軸にむら 高台部疊付鉄錆 蓋物 18C中～後
179	磁器	鉢	染付	山水図 高台二条圈線 高台脇山形連続文	口径 14.4 高 7.6 底径 11.2	整形直を残す 軸調はやや青味をおび た白色 高台部疊付無軸 蓋物 18C中～後
180	磁器	碗	青磁染付	見込中央に草花文、二条 圈線 高台内溝溜銘	高 3.5 底径 5.2	内外面貫入 施軸にむら 高台部疊付砂粒付着
181	磁器	蓋	染付	草花文 見込中央に染付文 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文	口径 9.4 高 3.3 つまみ径 4.0	施軸にむら つまみ部砂粒付着 厚手
182	磁器	蓋	染付	区画割山水図 見込中央に染付文、二条 圈線 つまみ部内に染付銘	口径 10.4 高 3.1 つまみ径 5.3	広東型碗の蓋 整形直を残す
183	磁器	蓋	染付	松葉文 見込中央に染付文 口縁部内側に連弧文 つまみ部二条圈線	口径 9.1 高 3.6 つまみ径 4.1	整形直を残す つまみ端部鉄錆 施軸にむら 19C前～幕末
184	磁器	蓋	染付	水仙図 見込中央に染付文 口縁部内側に四ツ割花卉 連続文 高台二条圈線	口径 10.2 高 2.7 底径 3.8	つまみ端部砂粒付着 18C後
185	磁器	皿	染付	唐草文 見込中央に五弁花 外面唐草文 高台二条圈線、高台内溝 溜銘	口径 13.4 高 3.3 底径 7.8	輪花型 口縁端部やや外反 高台部疊付砂粒付着 18C前～後

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
186	磁器	皿	染付	草花文 見込中央に五弁花、二条 圓線	口径 13.0 高 2.9 底径 7.1	整形痕を残す 施釉にむら 高台部畳付砂粒付着 見込蛇ノ目軸はぎ 厚手
187	磁器	皿	染付	松竹梅文 見込中央に染付文 外面、唐草文	口径 10.0 高 2.3 底径 4.9	施釉にむら 高台部畳付鉄錆付着 発色不良 18C 初～中
188	磁器	碗	染付	飛行竜文 見込中央に寶亀文	口径 11.1 高 6.3 底径 6.2	広東型高台碗 整形痕を残す 施釉にむら 高台部歪みあり
189	磁器	碗	染付	山水図 口縁部外側に四ツ割花弁 連続文	口径 11.1 高 8.2 底径 4.7	整形痕を残す 高台部畳付砂粒付着 施釉にむら 口縁部歪みあり、83と同 窯か
190	磁器	坏	染付	子持ち重ね井桁文	口径 8.0 高 3.8 底径 3.0	整形痕を残す 高台部畳付鉄錆付着 施釉にむら 厚手
191	磁器	小碗	白磁		口径 8.3 高 4.7 底径 3.8	施釉にむら 高台部畳付砂粒付着 発色不良でやや黄色味 をおびた白 厚手
192	磁器	碗	白磁		口径 8.9 高 4.0 底径 3.3	整形痕を残す、高台部 畳付鉄錆付着 口縁部口縁あり くらわんか 18C 前
193	磁器	碗	染付	つた葉文(コンニャク判) 見込中央に「寿」字崩 口縁部内外面に圓線 高台二条圓線	口径 10.3 高 5.7 底径 4.8	整形痕を残す 梨須発色不良 高台部畳付砂粒付着 厚手
194	磁器	碗	染付	蜻唐草文 見込中央に松竹梅つなぎ 二条圓線 口縁部内側に四ツ割花弁 連続文	口径 10.9 高 6.0 底径 4.3	内外面貫入 薄手

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)			備 考
					口 径	身 高	蓋 径	
185	磁 器	鉢	染 付	菊花文 (コンニャク判)	口 径	11.5	10.5	高台部畳付砂粒付着 外面貫入 蓋物 17C末～18C中
					高	7.1	4.2	
					底 径	6.7		
186	磁 器	蓋	青磁染付	見込中央に五弁花 (コンニャク判), 二条圍線 口縁部内側に四つ割花弁連続文	口 径	8.5		笠形痕を残す つまみ部砂粒付着 施軸にむら 呉須発色不良
					高	3.0		
					つまみ径	3.5		
187	磁 器	蓋	青磁染付	見込中央に五弁花, 二条圍線 口縁部内側に四つ割花弁連続文 つまみ内に留字銘	口 径	9.6		笠形痕を残す つまみ端部砂粒付着 施軸にむら 発色良好
					高	3.3		
					つまみ径	4.0		
188	磁 器	蓋	青磁染付	見込中央に五弁花, 二条圍線 口縁部内側に四つ割花弁連続文 つまみ内に満貫銘	口 径	9.7		笠形痕を残す つまみ端部砂粒付着 施軸にむら 呉須発色不良
					高	3.3		
					つまみ径	4.0		
189	磁 器	皿	染 付	竹と楡図 見込中央に五弁花 外面唐草文 高台二条圍線	口 径	14.2		輪花型 口縁端部に口跡 高台内「大明成化年製」 銘 呉須発色良好 18C
					高	4.5		
					底 径	7.6		
200	磁 器	皿	染 付	見込内に菊花文 (コンニャク判)	口 径	10.5		笠形痕を残す 高台部畳付鉄蒔付着 施軸にむら 薄手
					高	3.0		
					底 径	6.6		
201	磁 器	皿	染 付	見込中央に草花文, 二条圍線 外面唐草文	口 径	10.6		呉須発色不良 薄手
					高	2.1		
					底 径	6.4		
202	磁 器	皿	染 付	口縁部内側に草花文 外面唐草文	口 径	13.2		笠形痕を残す 口縁端部に口跡 施軸にむら 薄手
					高	2.6		
					底 径	7.7		
203	磁 器	皿	染 付	草花文 見込内に二条圍線 外面唐草文 高台二条圍線	口 径	12.7		輪花型 外面貫入 高台部畳付砂粒付着 薄手 有田圓山 18C前～後
					高	3.1		
					底 径	6.7		

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
204	磁器	皿	染付	草花文 見込内に二条圏線 外面唐草文	口径 13.4 残高 3.1	輪花型 整形痕を残す 施軸にむら 異須臾色不良
205	磁器	皿	染付	菊花文 見込内に二条圏線 外面唐草文 高台二条圏線 高台中央染付文	口径 14.0 高 3.8 底径 8.2	外面貫入 高台部畳付砂粒付着 異須臾色不良 厚手 18C 後
206	磁器	皿	染付	見込中央に五弁花コンニャク判、菊花図 外面唐草文 高台二条圏線 高台内寿字銘	口径 14.4 高 3.6 底径 8.0	整形痕を残す 内外面貫入 高台部畳付砂粒付着 異須臾色不良、厚手 18C 後
207	磁器	皿	染付	見込中央に染付文、松図 外面唐草文 高台二条圏線 高台内染付文	口径 13.7 高 3.6 底径 7.8	高台部畳付鉄錆付着 有田皿山 18C 前～後
208	磁器	皿	染付	見込中央に草花文、二条圏線 高台二条圏線	残高 1.1 底径 9.5	内外面貫入 異須臾色不良 蛇ノ目凹形高台 18C 前～後
209	磁器	鉢 (蓋付)	色絵	胴部に赤色横帯文	残高 2.8 底径 6.0	蛇ノ目高台、高台部畳付やや内傾 蓋物、薄手 ヨーロッパ輸出品 18C 後
210	磁器	皿	染付	見込中央に五弁花、二条圏線、区画割草花園 外面唐草文 高台二条圏線 高台内太明年製銘	口径 11.6 高 3.5 底径 7.0	輪花型 高台部畳付砂粒付着 有田皿山 18C 前～後
211	磁器	皿	染付	菊花雲龍文 外面草花文 高台部二条圏線	口径 11.6 高 3.0 底径 7.3	菊花型 口縁部に口髷 良品 南川原樋口窯か 19C
212	磁器	皿	染付	区画割草花文 外面唐草文 高台二条圏線 高台脇圏線	口径 19.2 高 2.8 底径 11.9	輪花型 わずかに口縁部外反 良品 有田皿山

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
213	磁器	皿	染 付	草花文 見込内に二条團線 外面唐草文 高台二条團線	口 径 20.2 高 3.2 底 径 12.3	輪花型、口縁外部反 整形痕を残す 施軸にむら 有田皿山 18C前~中
214	磁器	皿	染 付	草花図	口 径 10.6 高 2.5 底 径 6.5	菊花型 口縁外部に呉須による 口跡
215	磁器	皿	染 付	菊花型雲文	口 径 13.1 高 3.1 底 径 8.4	菊花皿 内外面貫入 口縁外部に口跡 蛇ノ目高台
216	磁器	皿	染 付	山水図	残 高 1.9 底 径 7.3	整形痕を残す 焼成良好
217	磁器	皿	染 付	草花図 見込中央に松竹梅つなぎ 二条團線 外面草花文 高台二条團線	口 径 12.3 高 2.2 底 径 7.2	呉須発色不良 蛇ノ目凹型高台 19C前
218	磁器	鉢	染 付	見込中央に花鳥文	残 高 3.0 底 径 7.7	整形痕を残す 蛇ノ目凹型高台 厚手 19C初~幕末
219	磁器	皿	染 付	草花図 見込中央に松竹梅つなぎ 二条團線 外面唐草文	口 径 12.3 高 2.5 底 径 7.8	施軸にむら 有田皿山 18C前~後
220	磁器	鉢	青磁染付	見込中央に家屋図、二条 團線 口縁部内側に草花連続文 外面唐草文 高台二条團線 高台内溝部鈍	口 径 21.0 高 8.1 底 径 10.6	輪花型 整形痕を残す 施軸にむら 蛇ノ目高台 良品 18C
221	磁器	皿	染 付	山水家屋図と草文 見込中央に染付文、二条 團線 外面に唐草文 高台二条團線、高台内溝 部鈍	口 径 18.1 高 2.6 底 径 12.5	輪花型 針文入痕跡あり 薄手、良品
222	磁器	皿	染 付	見込中央に松竹梅つなぎ 二条團線 外面に唐草文 高台二条團線	口 径 12.1 高 2.6 底 径 7.7	輪花型 蛇ノ目凹型高台 薄手、良品 有田皿山

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
223	陶器	碗		鉄釉 口縁部外側及び内側に鉄 釉	口 径 7.5 高 5.2 底 径 3.8	
224	磁器	碗	青磁染付	区画割水仙文 見込中央に五弁花コンニ ャク判, 二条園線 口縁部内側に四ツ割花弁 連続文 高台筋染付文	口 径 8.4 高 6.7 底 径 4.2	青磁釉充分還元されず 黄色を呈す 発色不良 高台登付部鉄錆付着 筒型碗
225	磁器	碗	染 付	八芒文 見込中央に五弁花 口縁内二条園線 高台部二条園線	口 径 8.1 高 5.5 底 径 3.1	整形痕をわずかに残す 18C前
226	磁器	碗	染 付	渦巻文 見込中央に五弁花, 二条 園線 口縁部内側に四ツ割花弁 連続文 高台筋染付文, 高台部二 条園線	口 径 7.2 高 5.5 底 径 3.6	整形痕を残す 施釉にむら 高台部登付に砂粒付着 筒型碗
227	陶器	油 壺		見込中央に緑釉	口 径 5.0 高 2.5 底 径 3.0	整形痕を残す 片方把手付
228	陶器	碗		鉄釉による草文	口 径 9.1 高 5.6 底 径 4.4	整形痕をわずかに残す 内外面貫入 高台部無釉 底釉にむら
229	陶器	坏		面取り坏 高台筋に菊花状削り込み	口 径 8.8 高 6.1 底 径 4.1	高高台 内外面貫入あり 発色不良
230	陶器	鉢			口 径 21.0 高 8.1 底 径 15.0	整形痕を残す 無釉, 色調は茶褐色, 平底 底部穿孔(植木鉢に転 用) 大谷焼, 機成むらあり
231	陶器	碗	鉄 釉	鉄釉による草文	口 径 10.3 高 6.0 底 径 4.2	整形痕をわずかに残す 内外面貫入, 発色不良 高台部無釉 瀬戸・美濃系

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
232	陶器	碗	鉄軸	鉄軸による草文	口径 9.1 高 5.3 底径 3.6	盤形痕をわずかに残す 内外面貫入 高台部無軸、発色良好 厚手 瀬戸・美濃系
233	陶器	碗	鉄軸	鉄軸による草文	口径 9.6 高 5.5 底径 3.2	盤形痕を残す 内外面に貫入 施軸にむら 高台部無軸 瀬戸・美濃系
234	陶器	碗		鉄軸と兵須によるあやめ文	口径 9.5 高 5.7 底径 3.3	盤形痕わずかに残す 厚手 内外面貫入 高台部無軸 瀬戸・美濃系
235	陶器	碗	上絵付	上絵付文字碗（一部印刷文） 高台中央に銘	口径 9.1 高 6.8 底径 3.5	盤形痕を残す 内外面貫入 高台部無軸 瀬戸・美濃系
236	陶器	小坏		無文	口径 6.4 高 3.4 底径 2.7	内外面貫入 高台部無軸 構成不良 瀬戸・美濃系
237	陶器	碗		無文	口径 6.0 高 5.7 底径 3.1	盤形痕を残す、厚手 口縁端部外反 内外面貫入、発色良好 瀬戸・美濃焼
238	陶器	碗		貝割による文様	口径 9.5 高 6.4 底径 3.7	内外面貫入 高台部無軸 軸厚く、ガラス状を呈す 胎土灰色
239	陶器	碗		貝割による文様	口径 10.0 高 7.2 底径 4.2	内外面貫入 高台内縮軸、疊付無軸
240	陶器	碗	兵須と鉄軸	藤花文	口径 10.4 高 7.9 底径 4.0	盤形痕を残す 内外面貫入 高台部無軸 瀬戸・美濃系
241	陶器	猪口		無文	口径 4.2 高 3.9 底径 2.7	盤形痕を残す 外面貫入 施軸にむら 高台部無軸、瀬戸・美濃系

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
22	陶器	碗		鉄軸文	口 径 8.9 高 5.0 底 径 3.4	整形痕を残す 内外面貫入 施軸にむら 高台部無軸 瀬戸・美濃系
23	陶器	碗		口縁端部内外面に緑軸	口 径 9.0 高 5.1 底 径 3.6	整形痕をわずか残す 玉縁状口縁 内外面貫入 高台部無軸 瀬戸・美濃系
24	陶器	碗		鉄軸による草花文	口 径 8.8 高 5.0 底 径 2.9	整形痕を残す 内外面貫入 高台部無軸 焼成不良 瀬戸・美濃系
25	陶器	钵台		割部緑軸	口 径 7.0 高 5.0 底 径 7.3	整形痕を残す 内外面貫入 瀬戸・美濃系
26	磁器	蓋	染付	草花文 見込中央に五弁花、二条 墨線	口 径 7.2 高 2.1 つまみ径 3.5	異潤発色不良 施軸にむら
27	磁器	皿		見込内染付文	口 径 11.8 高 3.4 底 径 4.2	整形痕を残す 施軸にむら 見込蛇ノ目軸はぎ 厚手、不良品
28	陶器	碗		鉄軸草花文	口 径 9.4 高 5.1 底 径 3.8	整形痕を残す 内外面貫入 施軸にむら 高台部無軸、焼成不良 18C中～19C初
29	磁器	碗	染付	草花文 口縁部外側に四ツ割花卉 連続文 高台二条墨線、高台縁墨 線	口 径 10.5 高 7.2 底 径 4.1	高台部墨付砂粒付着 色調灰白色 器形に歪 幕末
30	陶器	香炉		緑軸香炉	口 径 10.4 高 5.9 底 径 5.8	整形痕を残す 割部に指環痕 底部無軸 緑軸発色不良
31	陶器	碗			口 径 10.0 高 6.2 底 径 4.0	整形痕を残す、薄手 施軸にむら 高台部無軸 大谷焼系天目碗

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考		
252	陶 器	碗	具須と鉄軸	鉄軸による松葉文と具須による文様	身 蓋	口縁部に口鋳 内外面貫入 施軸にむら 高台皿付部無軸		
					口径		11.3	10.4
					高		6.2	2.8
					底径		4.3	3.8
253	陶 器	碗		雜碗 胴下半部に鉄軸	口 径 10.5 高 8.2 底 径 5.5	内外面貫入 高台部皿付無軸 針支え痕跡あり 薄手		
254	陶 器	燗 台		底部皿付を除いて燗軸による全面施軸	口 径 6.6 高 6.4 底 径 4.0	口縁部内側にすすの付着 施軸にむら 大谷焼系		
255	陶 器	碗		天目碗	口 径 10.0 高 6.0 底 径 4.1	整形痕を残す 施軸にむら 高台部無軸 大谷焼系		
256	陶 器	紅 皿	赤 絵	羽子板と羽模	口 径 6.2 高 2.0 底 径 2.4	内外面貫入 施軸にむら		
257	陶 器	蓋	鉄 軸	鉄軸による草花図	口 径 9.2 高 2.1 つまみ径 8.0	整形痕を残す 内外面貫入 施軸にむら 瀬戸・美濃系		
258	磁 器	仏飯具	染 付	笹葉文	口 径 6.8 高 4.6 底 径 3.3	整形痕を残す 施軸にむら 底部無軸		
259	陶 器	碗	鉄 軸	鉄軸による草花文	口 径 10.1 高 7.8 底 径 3.5	整形痕を残す 内外面貫入 施軸にむら、高台部無軸 底部厚手 瀬戸・美濃系		
260	陶 器	碗		藤花文	口 径 9.1 高 6.8 底 径 3.5	整形痕を残す 内外面貫入、軸厚くガラス状を呈す、施軸にむら 具須発色にむら、高台部無軸 薄手 瀬戸・美濃系		
261	磁 器	碗	染 付	竹園 口縁部外側四ツ割花弁蓮 鏡文	口 径 10.6	整形痕を残す 内外面貫入 高台部皿付砂粒付着		
					高 7.5			
					底 径 4.7			

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
262	陶器	碗	色 絵	壽老とシダ葉文 赤、黒の2色	口 径 10.1 高 8.1 底 径 3.7	整形痕を残す 内外面貫入 高台部無軸 23と同系
263	磁器	碗	染 付	紫陽花と鳥 見込中央五弁花、二条圓線 口縁部内側四ツ割花弁連 続文 高台二条圓線、高台脇圓線	口 径 8.8 高 5.6 底 径 3.7	整形痕を残す 呉須発色不良 瀬戸・美濃系 18C末～19C初
264	陶器	碗	呉須と鉄軸	松文	口 径 11.0 高 8.0 底 径 4.4	整形痕をわずかに残す 内外面貫入 高台部無軸 瀬戸・美濃系
265	陶器	碗	呉須と鉄軸	籬文	口 径 9.7 高 8.5 底 径 3.8	整形痕を残す 内外面貫入 高台部無軸 瀬戸・美濃系
266	陶器	碗	鉄 絵	区画割草花文 見込中央に五弁花	口 径 11.8 高 7.5 底 径 5.1	口縁端部に口錆 内外面貫入 高台部疊付砂粒付着
267	磁器	水滴	染 付	菊花型（菊花、菊葉のみ 呉須染付）	高 3.3 底 径 8.6	18C
268	陶器	皿		菊花型	口 径 12.5 高 2.5 底 径 6.6	整形痕を残す 内外面貫入 施軸にむら 高台内施軸
269	陶器	皿		菊花型	口 径 12.4 高 2.9 底 径 6.5	内外面貫入 高台内施軸 焼成にむら
270	陶器	碗		口縁端部内外面に緑釉を 施す	口 径 10.9 高 6.1 底 径 4.9	整形痕を残す 器形に歪 高台部疊付部無軸 施軸にむら、発色不良
271	磁器	皿	染 付	見込中央に菊文 口縁部内側に染付文 高台内に銘あり	口 径 7.5 高 2.7 底 径 4.5	型押し 高台疊付部砂粒付着 瀬戸・美濃系
272	陶器	碗	呉須と鉄軸	籬文	口 径 10.2 高 8.2 底 径 3.9	整形痕を残す 内外面貫入 高台部無軸 底部厚手 瀬戸・美濃系

番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
271	陶器	碗	色 絵	海老とシダ葉 赤、緑、黒の3色	口 径 10.0 高 8.0 底 径 3.5	整形痕を残す 内外面貫入 高台部無軸 窯と同系
274	磁器	水滴	染 付	具須による施文	長 径 10.5 高 3.0 底 径 6.0	型押し 外部貫入 瀬戸・美濃系 17C末～18C前
275	磁器	皿	染 付	見込中央に菊花文	残 高 1.6 底 径 8.9	内外面貫入 蛇の目凹形高台
276	磁器	皿	染 付	草花と松文 見込中央に菊文 外面に草花文 高台部に雷文,中央に「富 貴長寿」銘	残 長 14.4 高 3.6 底 径 6.8	型押し長方形皿 貼り付高台 施軸にむら
277	磁器	仏飯具	染 付	九紋(菊唐草)	口 径 8.4 高 6.2 底 径 5.5	整形痕を残す 施軸にむら 18C末～幕末
278	陶器	蓋	具須と鉄軸	具須、鉄軸による施文	口 径 10.8 高 3.0 つまみ径 4.5	内外面貫入 つまみ脇二条圓線
279	磁器	皿	染 付	見込中央に山水図 口縁部内側に草花文,外 面草花文	口 径 9.5 高 2.8 底 径 5.5	型押し 貼り付高台,高台部山 形連続文 高台登付部無軸
280	陶器	蓋		葉文	口 径 10.1 高 2.6 底 径 3.4	整形痕を残す 内外面貫入 焼成不良 瀬戸・美濃系
281	磁器	箸口	染 付	松竹梅文	口 径 7.1 高 6.1 底 径 4.9	整形痕を残す 16C後
282	陶器	鉢	具須と鉄軸	菊花形 見込に具須,鉄軸による 菊葉文様	口 径 13.5 高 4.9 底 径 5.1	見込部に針文え瓶 口縁端部に口髹 内外面貫入,完色不良 底部無軸
283	磁器	蓋	染 付	祝花文 見込中央に葉文 口縁部内側に四ツ刺花卉 連続文 つまみ部脇二条圓線	口 径 9.5 高 3.0 つまみ径 4.3	つまみ部外方へ開く

番号	種類	器形	技法	文様	法量 (cm)	備考
24	磁器	皿	染付	輪花形 見込中央に五弁花コンニャク判 口縁部内側に菊花コンニャク判と蛸唐草文 外部唐草文、高台内「福」字くずし銘	口 径 14.5 高 4.5 底 径 8.5	整形痕を残す 厚手 高台畳付部砂粒付首
25	磁器	猪口	白磁		口 径 5.2 高 3.3 底 径 3.4	施釉にむら 発色不良
26	陶器	甌		胴部に掲輪による波状文 底部無軸	口 径 10.0 高 15.5 底 径 9.2	整形痕を明瞭に残す 胎土に砂粒を多く含む
27	陶器	鉢			口 径 15.7 高 10.0 底 径 11.8	整形痕を残す 底部穿孔で榎木鉢に転用
28	陶器	碗			口 径 9.0 高 4.8 底 径 3.2	口縁端部外反 内外面貫入 わずかに施釉むら 高台部無軸
29	陶器	碗		天目碗	口 径 10.5 高 5.5 底 径 4.2	
30	陶器	花生		笹葉文	口 径 9.8 高 9.7 底 径 9.4	内外面貫入 胴部施釉むら、底部無軸
31	陶器	すり鉢		口縁外部に凹線 1単位幅2.5cm (9条)	口 径 27.0 高 11.1 底 径 13.0	赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む 注口あり 大谷焼系
32	陶器	甌		胴部に鉄輪施文	口 径 16.2 高 13.0 底 径 9.0	見込に砂目痕の痕跡 整形痕を明瞭に残す 底部無軸
33	陶器	徳利		「児島」酒「八万ノ巻」 刻字	残 高 22.0 底 径 8.4	整形痕を明瞭に残す 底部無軸 大谷焼系
34	陶器	すり鉢		1単位幅2.3cm (6条)	口 径 34.2 高 12.5 底 径 15.5	赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む 注口あり 整形痕を明瞭に残す 大谷焼系

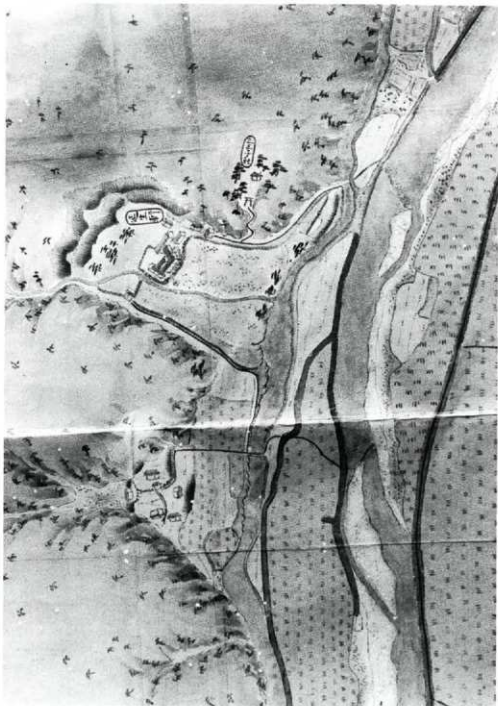
番号	種類	器形	技法	文 様	法 量 (cm)	備 考
25	陶器	すり鉢		1単位幅2.3cm (10糸)	□ 径 24.5 高 8.5 底 径 11.7	
26	陶器	香炉	天目軸	胴部に凹線	□ 径 11.2 高 9.5 底 径 4.8	整形痕を残す 体部無軸，軸にむら 底部無軸 大谷焼系
27	磁器	蓋	青磁染付	見込中央五弁花コンニャク判 口縁部内側に四ツ割花卉 連破文 つまみ部内満福銘	□ 径 7.9 高 3.1 つまみ径 3.3	施軸にむら つまみ部に砂粒付着
28	磁器	碗	染 付	蕪文	残 高 5.7	18C末～19C初

参考文献

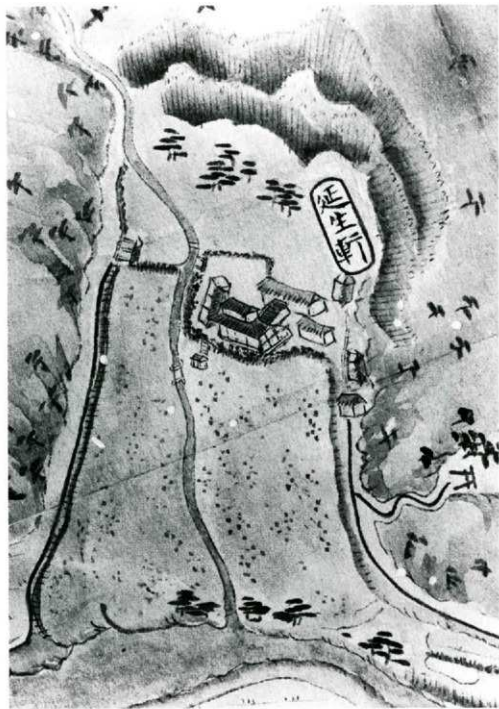
- 歴史と地理18-1・5 森 敬介「徳島市水道三谷瀬過地に於ける原始独木舟発見の顛末」上・下 大15
- 梅原末治「銅鐸の研究 資料篇・図録篇」昭2
- 名東郡誌 昭35
- 徳島県史 第一巻 昭39
- 考古学雑誌 50-4 三木文雄「阿波国安都真出土の銅鐸とその遺跡」昭40
- 徳島県文化財調査報告書 第9集 末永雅雄・森 浩一「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」昭41
- 徳島県文化財調査報告書 第10集 森 浩一「眉山周辺の古墳2 恵解山第九号墳調査報告」昭43
- 同志社大学文学部考古学調査報告第2冊 紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告 森 浩一「徳島市恵解山第九号古墳調査報告」昭43
- 八万町文化財 第一集「八万町の古墳」昭44
- 阿波の焼物 大谷焼 昭44 日本陶磁協会徳島支部
- 徳島県博物館紀要 第1集 立花 博「鳴門市大麻町谷口山の組合式箱形石棺と徳島県内の組合式箱形石棺について」昭45
- 有田天狗谷古窯-白川天狗谷古窯址発掘調査報告書- 昭47 有田町教育委員会
- 大山古墳群天神山古墳 緊急発掘調査概報 昭47 徳島県教育委員会、徳島市教育委員会
- 徳島市史 第一巻 総説編 昭48 徳島市役所
- 徳島県博物館紀要 第4集 天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相」昭48 徳島県博物館
- 徳島県博物館紀要 第5集 山川浩実「蜂須賀家・藩士墓出土遺品について」昭49 徳島県博物館
- 徳島城西ノ丸第2次調査概要-現地説明会資料- 昭52 徳島市教育委員会・西ノ丸発掘調査団
- 柿右衛門窯跡 第二次発掘調査概報 昭53 有田町教育委員会
- 徳島市文化財だより No1 昭53 徳島市教育委員会
- 徳島市文化財だより No3 昭54 徳島市教育委員会
- 埋蔵文化財ニュース No4 恵解山10号墳発掘調査中間報告 昭54 徳島市教育委員会

- しぶき No75 一山 典「横穴式石室の一様相 一恵解山10号墳を中心として」 昭54
- 姫谷焼 姫谷焼窯跡発掘調査報告 昭55 福山市教育委員会
- 徳島市の原始・古代 埋蔵文化財資料展 昭55 徳島市教育委員会
- 日本の美術 No176 鍋島 昭56 至文堂
- 徳島県文化財調査概報(昭55) 昭57 徳島県教育委員会
- 佐賀県立九州陶磁文化館特別展図録「17世紀の景德鎮と伊万里」 昭57
- 白水 No9 大橋康二「伊万里染付見込荒磁文碗・鉢に関する若干の考察—佐賀県有田町長吉谷古窯出土品を中心として—」 昭57 白水会
- 弥生時代の徳島市 埋蔵文化財資料展 昭58 徳島市教育委員会
- 佐久間重男教授退休記念中国史・陶磁史論集 大橋康二「伊万里磁器創成期における唐津焼との関連について—窯話技法よりみたり—」 昭58
- 歴史時代の徳島市 阿波の経塚 昭59 徳島市教育委員会
- 白水 No10 大橋康二「肥前陶磁の流通 一出土品よりみたり—」 昭59 白水会
- 北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁 昭59 佐賀県立九州陶磁文化館
- MUSEUM 東京国立博物館美術誌 No415 大橋康二「17世紀における肥前磁器の変遷—発掘資料を中心として—」 昭60 東京国立博物館
- 三上次男博士喜寿記念論文集 陶磁編 大橋康二「鹿児島県吹上浜採集の陶磁片」 昭60
- 百間窯・樋口窯 肥前地区古窯跡調査報告書第2集 昭60 佐賀県立九州陶磁文化館資料刊行会
- 徳島県文化財調査概報(昭57) 昭60 徳島県教育委員会
- 徳島県文化財調査概報(昭58) 昭60 徳島県教育委員会
- 日本の美術 No235 陶磁(原始・古代編) 昭60 至文堂
- 日本の美術 No236 陶磁(中世編) 昭61 至文堂
- 日本の美術 No237 陶磁(近世編) 昭61 至文堂
- 城下町のやきもの—清洲・名古屋の出土品— 昭61 愛知県陶磁資料館
- 阿波の陶磁名品展 昭61 徳島県博物館
- 徳島県博物館紀要 第17集 山川浩實「唐八焼の製作時期に関する一考察」 昭61 徳島県博物館
- 景德鎮陶録1・2 昭62 平凡社

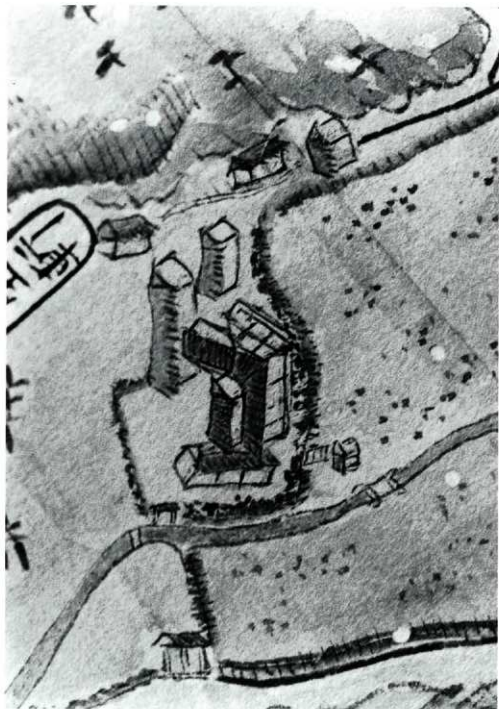
圖 版



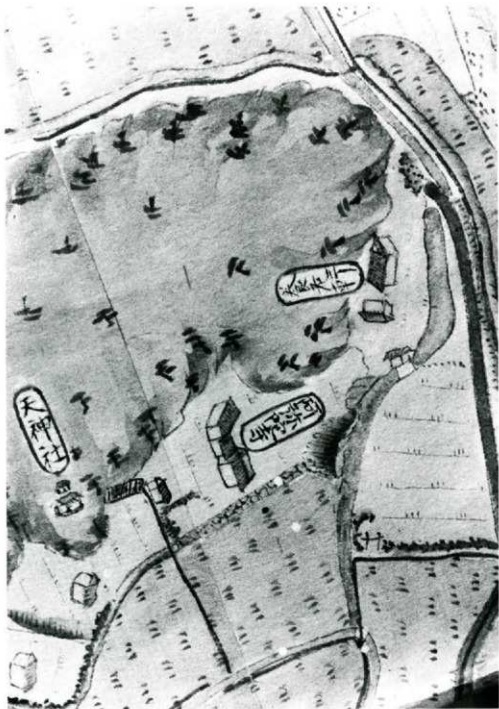
下八万村分間絵図部分（徳島県立図書館蔵）(1)



下八万村分間絵図部分 (徳島県立図書館蔵) (2)



下八万村分間絵図部分（徳島県立図書館蔵）(3)



下八万村分間絵図部分 (徳島県立図書館蔵) (4)



延生軒跡遠景（北より）



延生軒跡遠景（南より）



延生軒跡近景（南より）



延生軒跡近景（東より）



延生軒跡全景（北西より）



延生軒跡全景（西より）



東西排水施設（東より）



東西排水施設（北より）



南北排水施設（北より）



瓦利用排水施設（北より）



南北排水施設（南より）



南北排水施設（西より）



北側外石垣東階段（北より）



北側外石垣東階段（北より）



北側外石垣東階段（東より）



北側外石垣東階段（西より）



北側外石垣東階段（北より）



北側外石垣東階段（北より）



北側外石垣東階段（西より）



北側外石垣東階段（南より）



北・東側外石垣（北より）



東側外石垣（東より）



東側外石垣拡張部（東より）



東側外石垣拡張部（南より）



東側外石垣（東より）



東側外石垣（東より）



北側外石垣と内石垣（東より）



北側外石垣と内石垣（西より）



北側外石垣と内石垣（北より）



北側外石垣と内石垣（北より）



排水遺構と石垣



排水遺構（北より）



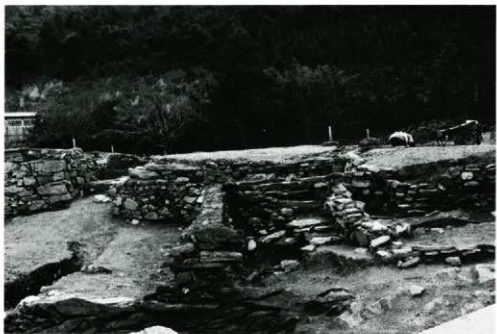
排水遺構（東より）



排水遺構（北より）



北側石垣遠景（西より）



北側石垣西階段（北より）



北側石垣西階段（北より）



北側石垣西階段（北より）



北側石垣拡張状況（北より）



北側石垣拡張状況（南より）



石垣拡張状況（北より）



石垣拡張状況（東より）



石垣拉張部断面



遺物出土状況



北側石垣拡張状況（西より）



北側石垣拡張状況（北より）



北側石垣拡張状況（西より）



北側石垣拡張状況（北より）



西井戸全景 (西より)



西井戸全景 (西より)



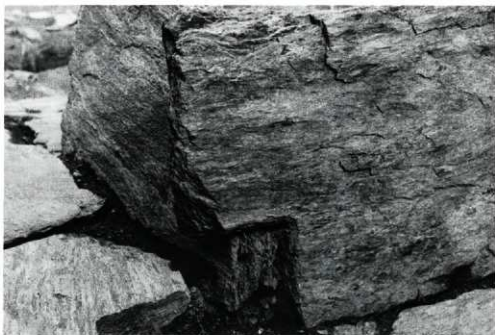
西井戸排水施設（北より）



西井戸排水施設（北より）



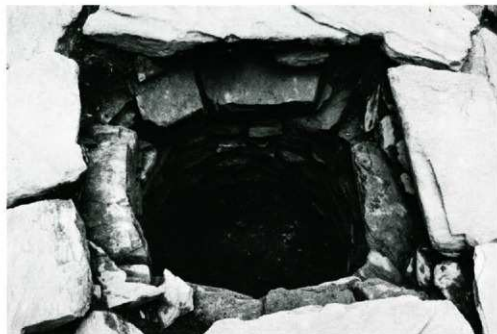
西井戸杵石切組（東より）



西井戸杵石切組（西より）



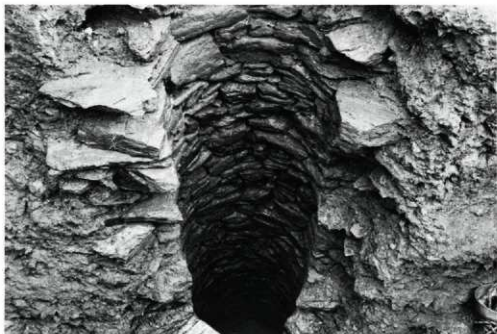
西井戸覆家遺構



西井戸石組状況（南より）



南井戸枠石



南井戸石組状況(南より)



61-1 番地全景 (南より)



61-1 番地近景 (西より)



延生軒跡進入路（西より）



延生軒跡進入路（東より）



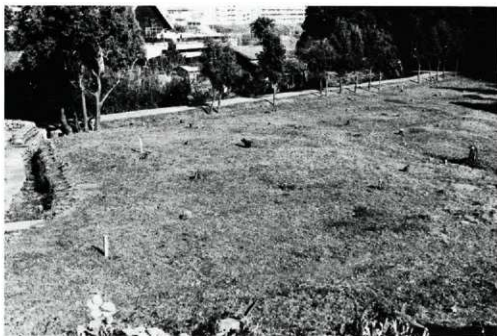
61-1 番地西トレンチ



61-1 番地東トレンチ



57番地全景（西より）



57番地全景（南より）



57番地北トレンチ (西より)



57番地南トレンチ (西より)



55-8 番地南北石垣 (東より)



55-8 番地南北石垣 (南より)



55-8番地トレンチ (南より)



55-8番地トレンチ (南より)



55-6番地トレンチ (西より)



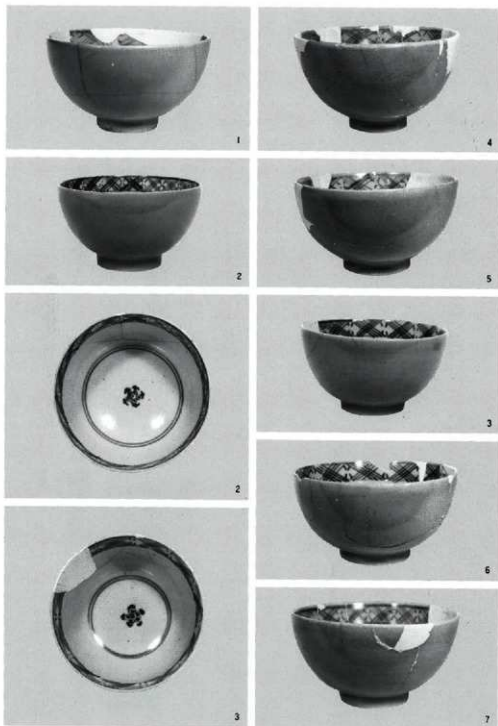
55-6番地トレンチ (南より)



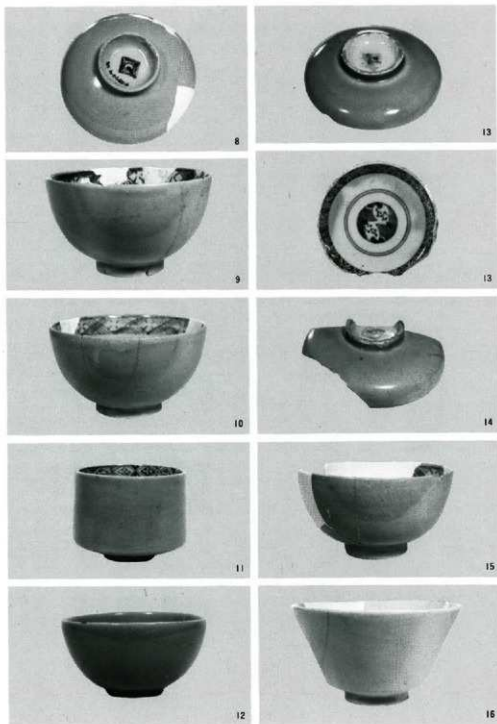
59-3 番地グリッド



59-3 番地グリッド



延生軒跡出土遺物(1)



延生軒跡出土遺物②



18



22



19



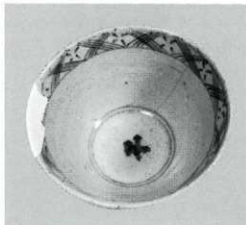
23



20



24

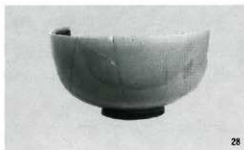
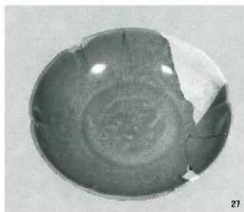
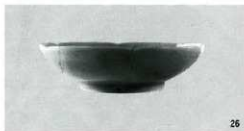
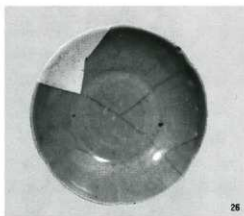


25

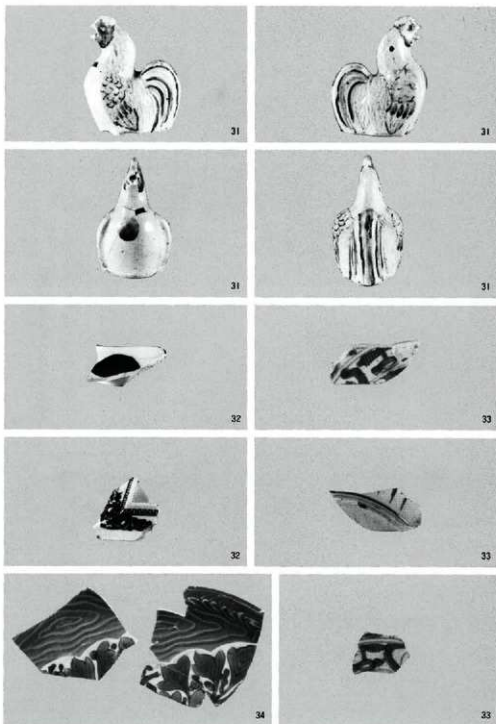


25

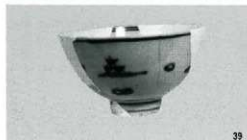
延生軒跡出土遺物(3)



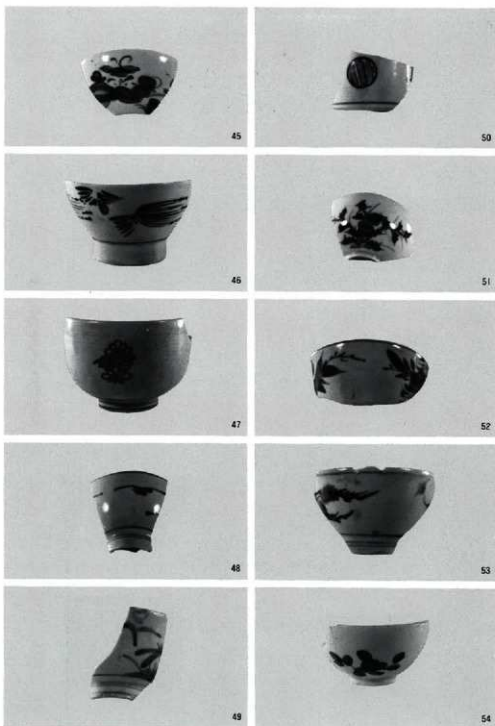
延生軒跡出土遺物(4)



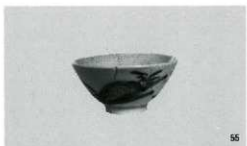
延生軒跡出土遺物(5)



延生軒跡出土遺物(6)



延生軒跡出土遺物(7)



延生軒跡出土遺物(8)



65



70



66



71



67



72



68



73

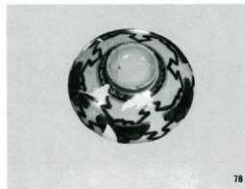
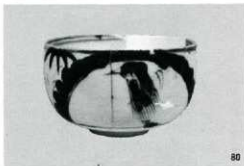


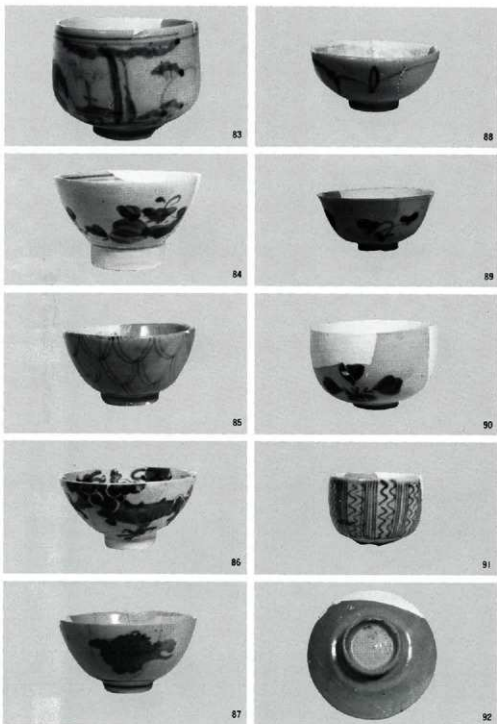
69



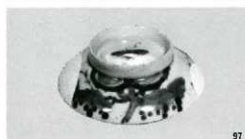
74

延生軒跡出土遺物(9)

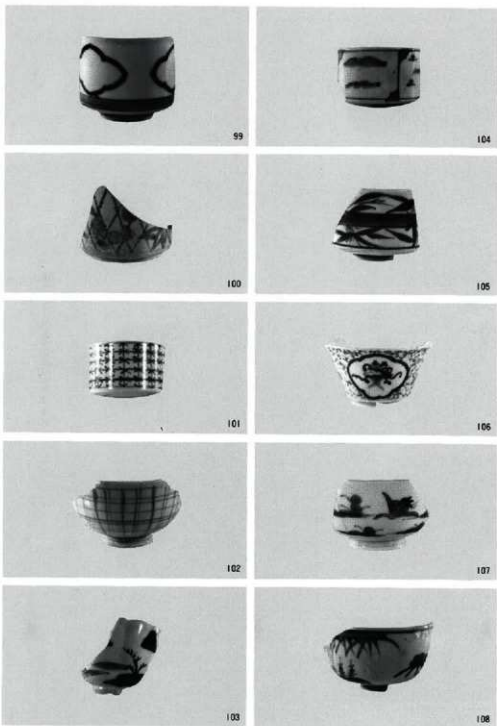




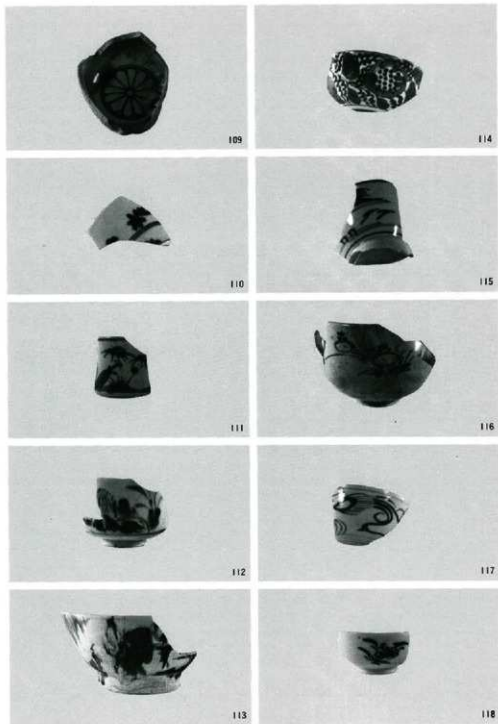
延生軒跡出土遺物00



延生杆跡出土遺物(2)



延生軒跡出土遺物Ⅱ



延生軒跡出土遺物④



119



124



120



125



121



126



122



127

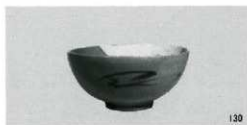


123

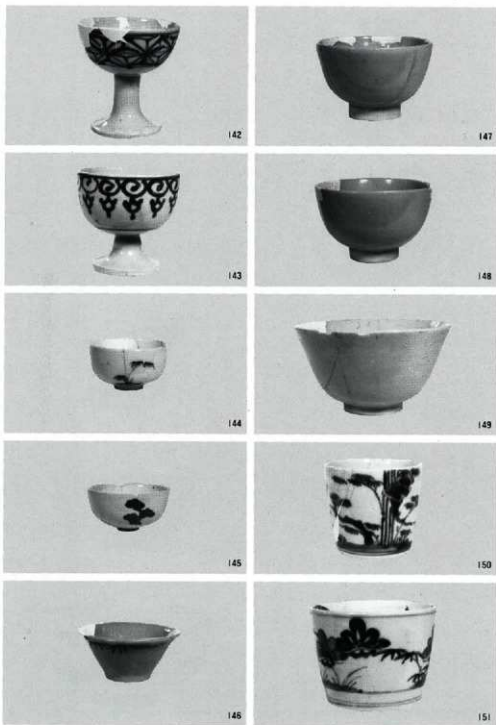


128

延生軒跡出土遺物④



延生軒跡出土遺物06



延生軒跡出土遺物07



152



156



153



170



154



174



158



172



155



173



159



160



161



163



164



155



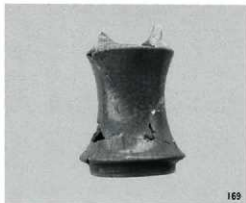
166



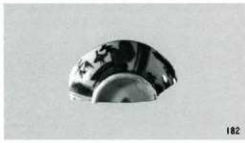
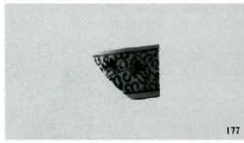
167



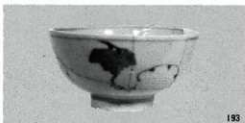
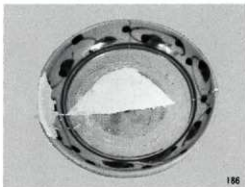
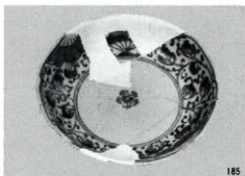
168



169

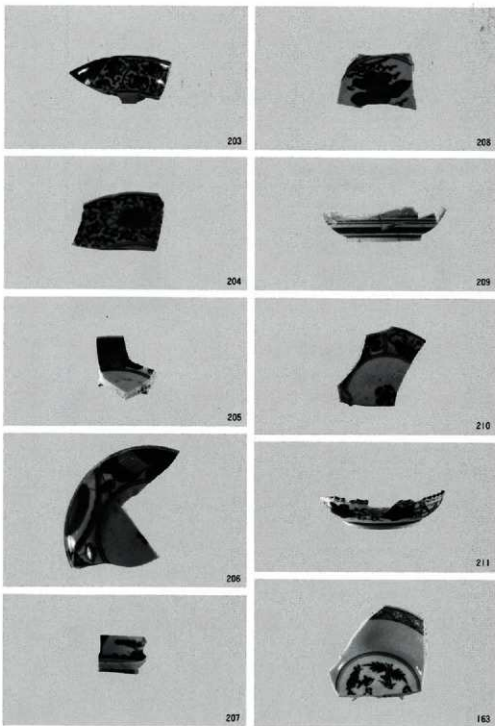


延生軒跡出土遺物②

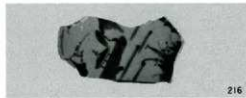
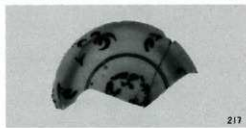
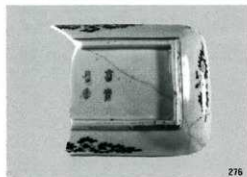
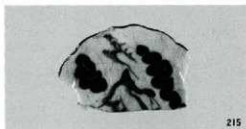


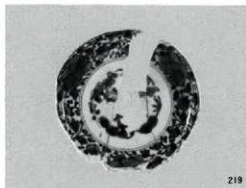
延生軒跡出土遺物(2)



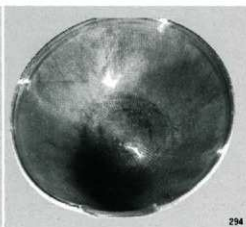
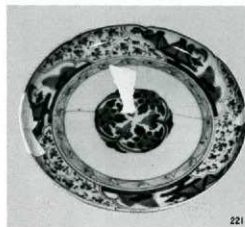
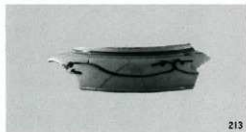


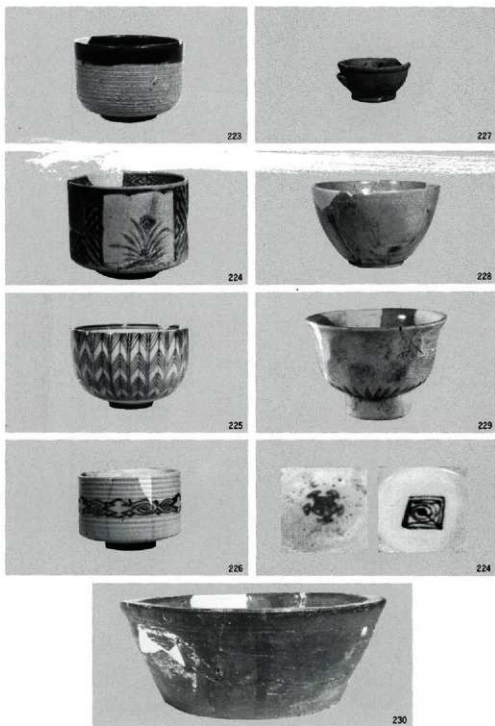
延生軒跡出土遺物(2)





延生軒跡出土遺物(9)

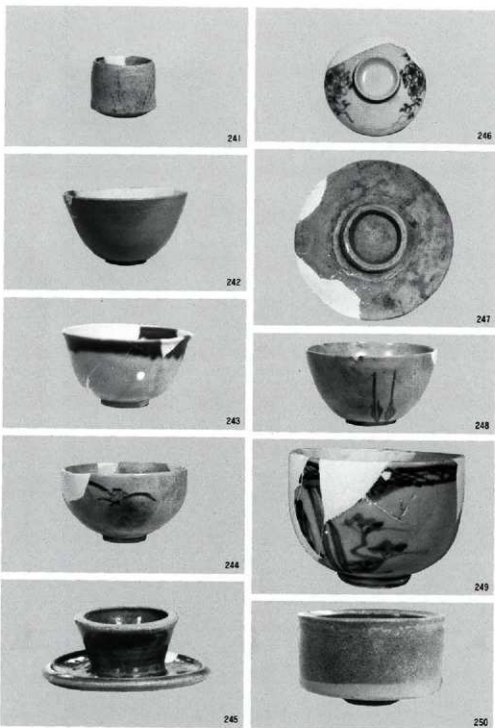




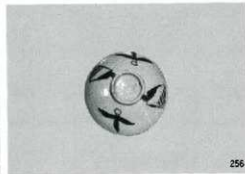
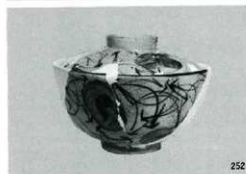
延生軒跡出土遺物(7)

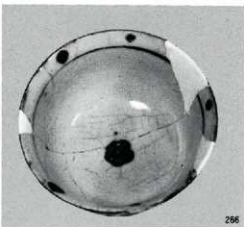


延生軒跡出土遺物(2)



延生軒跡出土遺物四

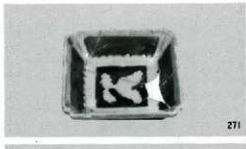




延生軒跡出土遺物00



267



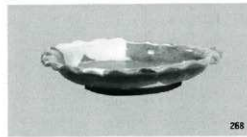
271



267



272



268



273



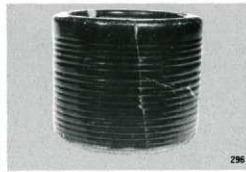
269



135

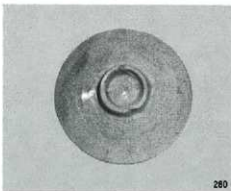
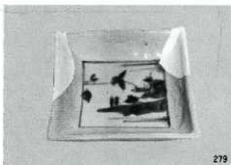
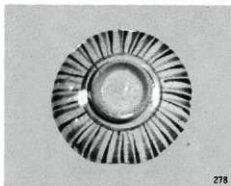


270

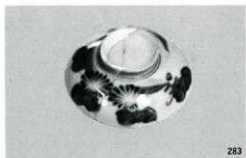


296

延生軒跡出土遺物②



延生軒跡出土遺物(3)





延生軒跡出土遺物(5)

向寺山古墳発掘調査報告

例 言

- 1 本編は「文化の森」総合公園建設事業に伴う向寺山古墳の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は徳島県文化の森建設事務局の委託を受け、県教育委員会文化課が行った。
- 3 調査は昭和61年4月7日から5月31日まで行った。
- 4 本編で用いた絶対高は海拔を表す。方位はすべて磁北である。
- 5 調査は菅原康夫（主事）、早淵隆人、赤徳英樹、小浜直弘、平野 剛、安田 享（文化財調査員）が担当し、菅原が編集執筆したが IV 附載は菅原、早淵が執筆した。

向寺山古墳本文目次

I	調査の経過	1
II	調査成果	3
	1号石棺	3
	2号石棺	3
	列石	4
III	まとめ	10
IV	附載 向寺山遺跡第4調査区出土の遺物について	12

向寺山古墳挿図目次

fig. 1	地形測量図	2
fig. 2	1・2号石棺積石・列石平面実測図	折込み
fig. 3	1号石棺蓋石・棺身平面実測図	折込み
fig. 4	1号石棺蓋石平面実測図	5
fig. 5	2号石棺蓋石平面実測図	6
fig. 6	2号石棺棺身平面実測図	7
fig. 7	1・2号石棺掘り方平面実測図	8
fig. 8	列石平面実測図	9
fig. 9	向寺山遺跡第4調査区出土土器実測図	13

向寺山古墳図版目次

PL. 1	調査前地形状況 1・2号石棺積石検出状況（南より）
PL. 2	1号石棺積石検出状況（南より）
PL. 3	1号石棺蓋石検出状況（南より）
PL. 4	1号石棺蓋石検出状況（南より）
PL. 5	1号石棺棺身検出状況（南より）
PL. 6	1号石棺棺材据え置き痕検出状況（南より）
PL. 7	2号石棺積石検出状況（東より）
PL. 8	2号石棺蓋石検出状況（東より）
PL. 9	2号石棺棺身検出状況（東より）
PL. 10	2号石棺棺身検出状況（西より）
PL. 11	2号石棺棺材据え置き痕検出状況（西より）
PL. 12	列石検出状況全景
PL. 13	列石検出状況細部
PL. 14	列石検出状況（南より）
PL. 15	1・2号石棺全景（南より）
PL. 16	1・2号石棺全景（南より）

I 調査の経過

今回調査の対象となった向寺山古墳は文化の森建設地内に新たに確認された無墳丘の箱式石棺である。國瀬川に面する標高21～21.7mの尾根上に位置しており、昭和60年度1月の造成工事によって棺材の短剣石の一部が露出していることが確認された。本地区内ではこれに先立って向寺山遺跡の発掘調査が実施されていたが、調査体制・期間の関係で本地点の調査は次年度以降に実施することが協議されていた。棺身自体は僅かに崖面に露呈しているのみで、当面崩壊等の危惧はなかったものの、長期間放置しておくことは文化財保護行政上好ましくないという認識のもと、文化の森建設事務局と昭和60年3月現状保存も考慮に入れた再協議をもち、新年度早々調査を行う旨申し入れた。

調査の結果、後述するように2基の箱式石棺が構築されていることが判明した。従来、当該地域、眉山南麓國瀬川流域には極めて在地色の濃い恵解山古墳群、天神山古墳など5世紀代の箱式石棺を主体とする古墳が形成されている。当該地点も同一の地域と捉えることができるが、これまで具体相が確認された古墳の調査例はなかった。

調査開始時点では墳丘は認められず、そのため墓域を区画する外部施設を予想して調査区を設定して行った。結果的には主体西側の斜面に一部直線状にのびる列石が認められたが、南側は表土直下で岩盤に接した。東側も近年の攪乱を多少受けているが、表土下約30cmで岩盤に達している(fig. 1)。主体までの堆積土は1 表土層、2 黄褐色土層であり、人為的に叩き締めた痕跡は指摘できない。本編では、西側に検出された石棺を1号石棺、東側の石棺を2号石棺と呼称する。なお石棺は調査位置での保存が困難なため、調査終了後搬出し、周辺地点での移築復元が協議、了承されている。

以下調査の経過に触れておく。

61. 4. 7 資材搬入。午後より伐採、石棺材露出部分を中心に地形測量を始める。
4. 9 表土除去。石棺材一部検出。
4. 11 1号石棺横石ほぼ検出。
4. 12 写真撮影。遣り方設定。
4. 16 1号石棺横石除去、下層から蓋石検出。2号石棺横石検出・実測。
4. 19 2号石棺横石除去、蓋石検出。
4. 24 1号石棺蓋石除去、棺身の精査。副葬遺物なし。

- 4. 25 2号石棺蓋石除去。棺身の精査。
- 4. 30 1号石棺西に列石検出。
- 5. 7 全景写真撮影。列石の実測を始める。
- 5. 10 現地説明会を行う。
- 5. 12 棺材の除去。精査。
- 5. 14 調査区の精査を終わり、移築復元のため棺材等の搬出。調査区の埋め戻し。
以後、整理作業に入る。

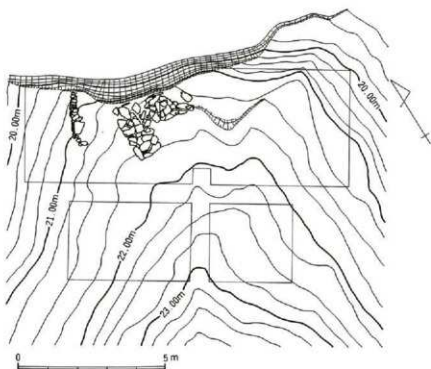


fig. 1 地形測量図

II 調査成果

1号石棺

本石棺は上部に緑泥片岩の積石をもつという稀な構築形態を採用している。蓋石までの積石厚は約30cmを測り、18個の石から構築されているが、いずれも無造作に積まれたもので、直下に検出された掘り方幅一杯に拡がっていた。主体・蓋石はこの施設によって完全に被覆されている (fig. 2)。

積石下には蓋石が認められるが、この上部にも蓋を押える板石が14個検出された。特に頭部にあたる部分には1m程度の板石が置かれると共に、蓋石の長軸に沿って左右を押えとする板石がみられた。蓋石自体は本来1枚石であったと推定されるが (fig. 3・4)、北短側石部分では重機による損傷のため遺存していない。蓋石は棺身幅とほぼ同じ規模で、検出時点では上部積石の重圧により西長側石部分では棺内に落込んでいた。粘土等による目張りは一切行われておらず、また朱等の赤色顔料の塗布も指摘できない。

棺は岩盤を整形した後、長さ2.2m以上、幅1mの隅丸長方形の掘り方を形成して構築されており、地山を床とする。長側石は緑泥片岩を掘り方に接して2枚重ね継ぎにしているが、西長側石部分では間に長さ50cm大の板石を挟み込んでいる。短側石はそれぞれ1枚であり、内法の規模長軸195cm、南短側石幅約40cm、北短側石幅30cm、深さ30cmで真北の主軸をもち、南頭位である。床石は認められない。棺材の据え置きは地山面に平均5cm程度かみ込んでいるが、深いもので10cmを測る (fig. 7)。本石棺に伴う棺内、棺外遺物は皆無である。なおfig. 3の棺身東長側石北部分は検出時での重機による原位置遊離状況であり、fig. 4・6では復元状態での本来のプランを図示した。

2号石棺

主体の北及び東半では攪乱を受けている。本石棺も蓋石上部に積石を形成しているが、1号石棺に比べ蓋の構造の違いとも相まって、可視的には積石をより高くしている (fig. 5)。本積石も40~50cm大の片岩を無造作に積み上げたものであるが、南長側石部分では掘り方に接して斜め上方に立掛けるような状態で積まれている。積石下の蓋石は1号石棺の1枚石とは異なり、何枚かの板石の縁辺を重ねて横長に蓋としたものであり、4枚の蓋石が遺存していた。復元される蓋石の架構は各蓋の側辺が上下、上下に継ぎ重なる構造のよ

うであり、明治期に香川槐三や鳥居龍蔵らによって報告された徳島近傍あるいは七ツ山の石棺等の構造とは若干の形態変化を示している。

棺本体は長軸2.4m、幅1m以上の掘り方内部に緑泥片岩を横長にして長側石を形成しているが、一部縦長に用いている部分も指摘される(fig. 6)。遺存のよい南長側石部分では6枚の板石が認められるが、この長側石外側にも裏込め状の側石があり、二重の構築形態を採用している。短側石は西部のみ遺存しているが、この部分では2枚の板石が据えられている。通常の箱式石棺の構造から類推すれば、足あて部分と考えることもでき、明らかに1号石棺を意識した構築形態といえよう。主軸をE15°Wにもち、1号石棺とはややずれて直交していない。床面に残された地山整形痕に従うと長軸2.0m、西短側石幅50cmを測り、1号石棺掘り方を切込んでいるようである。岩盤を整形して床面としている。棺材の据え置き度は平均10cmであり、深いもので20cmを測る(fig. 7)。1号石棺に比べ、やや幅の広い主体である。これも副葬遺物は認められない。

列石

1号石棺の西約2mの位置に構築されている。現地形21mコンター部分に尾根傾斜面からやや西に振って直線状に北に伸びる。遺存する列石の長さ2m、高さ約30cmを測る。列石の構築に際しては、尾根傾斜面をL字状にカットして平坦面を形成した後片岩を積上げているが、基底部の平坦面も尾根傾斜角に平行した自然地形に規制されたものであり、一定の平坦レベルを保ってはいない。極めて粗雑な構築法である。石材も粗であり、列石の始まる北端では緑泥片岩の板石を据えているが、その他の部位では片岩風化礫を利用して、列石は基底部分に地山の黄褐色土を敷いた後、西側に石面をあわせて粗雑に小口積みしている。列石自体に規則性は認められないが、基底部の一部に列石の安定をよくするために横長に板石を設置している部分が認められた(fig. 8)。主体の北側は確実に地山の岩盤の露頭が認められ、区画施設が存在しなかったことは確実であるが、東側については攪乱のため本来列石が存在したかどうかは明らかではない。しかし主体の位置関係、列石の方向を考慮すれば、主体を中心に列石を反転させれば予想される東側列石の位置関係はfig. 1の21m～21.50mコンターラインに示される小さな崩れからなだらかに下降する尾根傾斜面に沿った崖面を中心点とした部位に想定されよう。

主体北側にこうした区画施設が存在したか否かは尾根切り崩しにより知るすべもないが、尾根の両端のみを列石で区画する所作は末だ類例に乏しいうらみはあるものの、著名

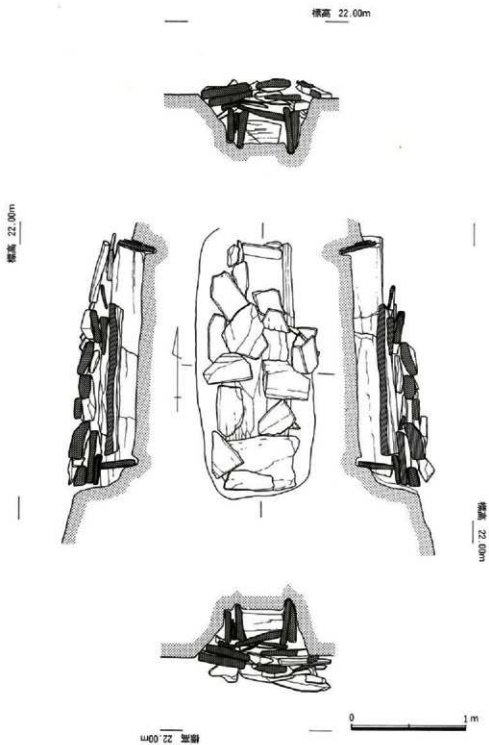


图 4 1 号石棺盖石平断面实测图

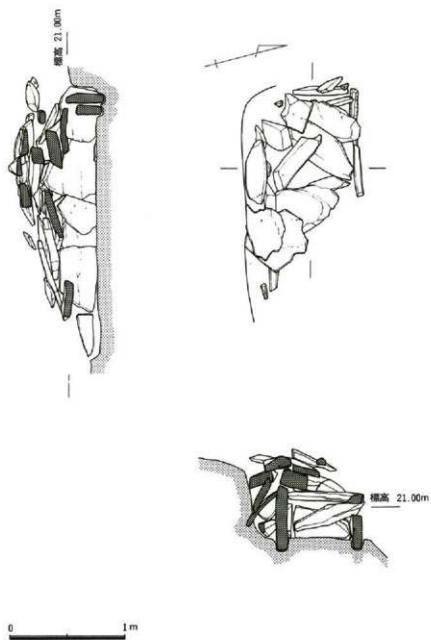


fig. 5 2号石棺墓石平断面实测图

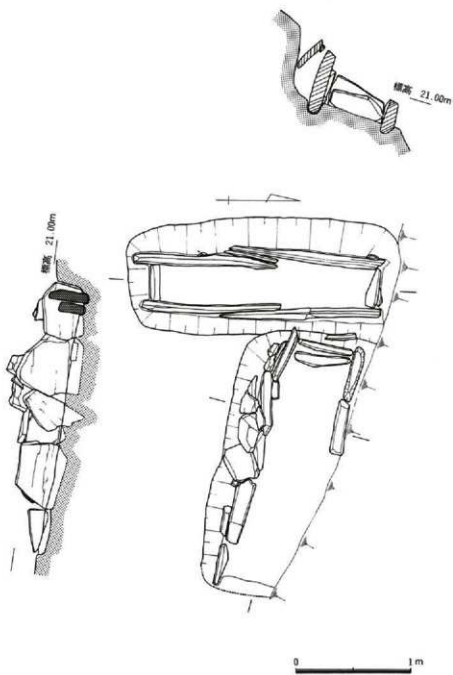


fig. 6 2号石棺棺身平面图及测图

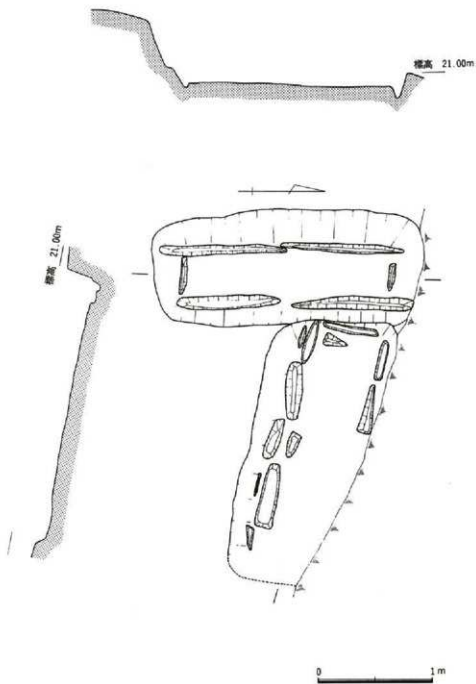


fig. 7 1・2号石棺掘り方断面実測図

な岡山県都月弥生墳丘墓をはじめとした近年議論の集中している弥生墳丘墓に祖形を見出すことができる。徳島県内では当該時期の列石は本遺跡が初例であり、その位置付け・意義についてはなお慎重を要するが、列石の小規模性、粗雑性とも相まって主体に近い主軸方向を示しているため本主体に伴うものと考えておきたい。徳島県の古墳時代墓制の中で古き思想の伝統が形骸化し、前半期古墳のある段階にまで時代遅れの「かたち」が受け継がれることは、曾我氏神社古墳群⁽⁴⁾、奥谷2号墳⁽⁵⁾に見られる突出部形態をとってみても明らかな現象といえよう。いずれにしても列石の復元がなされないことが惜まれる。

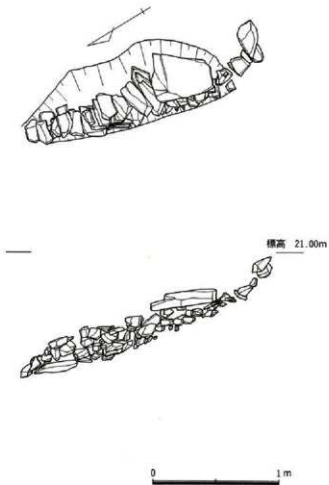


fig. 8 列石平面実測図

III ま と め

本墳は2基の箱式石棺から構成されているが、地山を多少整形する程度のものであり、墳丘は指摘できなかった。掘り割り等の外部区画施設も存在しないが、1号石棺西部分に一部三段程度積み上げた列石状の施設が遺存している。これが東側にも存在したかどうかは断定しがたいが、主体が尾根中軸線より西に偏在していること、また列石の方向からは予想される東部分の列石がすでに削平された可能性が極めて高い。列石の遺存している部分では直線状に南に伸びており、方形区画を意図した可能性も全く否定することはできない。箱式石棺に列石を伴う例は徳島県では初出であり、今後主体周辺をも対象とした調査による類例の蓄積が望まれる。

石棺自体では蓋石上面に積石を行う行為が確認された。箱式石棺にこうした施設を構築する形態は、若干の相違はあるものの、長崎県対馬仁兵衛島3号石棺、島山赤崎遺跡1号石棺、貝謝崎古墳などの諸例⁽⁶⁾、福岡県沙井掛遺跡A2号石棺墓⁽⁷⁾、山口県山根古墳⁽⁸⁾、埋葬施設等の構築法は異なるが兵庫縣高取山古墳群⁽⁹⁾、京都府岡3号墳など、弥生時代から古墳時代後期にかけて散在して認められる。これらはいずれも主体を被覆する外部表象的な機能をもつものと考えられよう。徳島県でのこうした類形態は、僅かではあるが徳島市鶴島山2号石棺⁽¹⁰⁾、恵解山9号墳⁽¹¹⁾、名西郡尼寺1号石棺⁽¹²⁾、鳴門市ケンレイサン古墳に認められる。またこの行為を更に飛躍させたものとして鳴門市萩原墳墓群1号丘外周主体群を指摘することができる。また本遺跡にちかい徳島市天神山古墳では、直刀片の混入を根拠として、後世の積み上げと報告されている主体上面の結晶片岩の被覆帯も再考を要するであろう。

築造年代については副葬遺物が皆無のため確定しえないが、未だ県内の箱式石棺に弥生時代に遡る類例が希少であること、棺身自体の構築法が近接する鶴島山2号石棺と同様であること、あるいは二棺埋葬を行う恵解山古墳群などとの葬送思想における共通性（但し恵解山の類例が二棺併置を行うのに対し、本例ではL字状になるという違いはある）、更には隣接地点の王子神社横の第4調査区から古式の須恵器、土師器、製塩土器などが出土しており、古墳被葬者の生活領域の形成が予想されることなどから三期区分による古墳時代中期の年代幅の中で捉えておきたい。

註)

- (1) 末永雅雄・森 浩一「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」1966 徳島県教育委員会
- (2) 徳島県教育委員会・徳島市教育委員会「犬山古墳群天神山古墳緊急発掘調査概報」1972
- (3) 香川槐三「徳島近傍セツ山及び丈六山ノ石棺」『東京人類学雑誌』62 1891
鳥居龍蔵「徳島近傍の石棺」『東京人類学雑誌』63 1891
- (4) 天羽利夫・岡山真知子「曾我氏神社古墳群調査報告」『徳島県博物館紀要』13 1982
- (5) 一山 典「古墳時代の徳島市一埋蔵文化財資料展」1981 徳島市教育委員会
- (6) 小田富士雄ほか【対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査】長崎県文化財調査報告書17
1974 長崎県教育委員会
- (7) 池辺元明編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」28 1976 福岡県教育委員会
- (8) 小野忠憲「山根古墳」『山口県文化財概要第4集 埋蔵文化財』1961 山口県教育委員会
- (9) 松岡秀夫「後期古墳時代の遺跡と遺物」『赤穂市史』4 1984
- 00 樋口隆康「網野阿の三古墳」『京都府文化財調査報告』第22冊 1961 京都府教育委員会
- 01 岡本一士ほか「徳島市鶴島山古墳群の調査」1979 元興寺文化財研究所
- 02 森 浩一「眉山周辺の古墳II一恵解山第9号古墳」徳島県文化財調査報告書 第10集
1968 徳島県教育委員会
- 03 石井町教育委員会「清成・尼寺古墳発掘調査概報」『石井町文化財調査報告書』第4集
1969 石井町文化財保護委員会
- 04 立花 博「鳴門市大麻町谷口山の組合式箱形石棺と徳島県内の組合式箱形石棺について」『徳島県博物館紀要』1 1970
- 05 菅原康夫編「萩原墳墓群」1983 徳島県教育委員会
- 06 註2文献

IV 附載 向寺山遺跡第4調査区出土の遺物について

本石棺をとりまく向寺山遺跡では比較的広範囲に須恵器・土師器が出土している。当然、これらの資料は本石棺被葬者と有機的関連をもつものと考えるのが自然であり、遺跡全体の概要は第1章以下に説明されたところである。ここでは王子神社南に設定された第4調査区の土器溜り出土の須恵器・土師器のうち、実測可能なものの一部を調査担当者の了解をえて掲載する (fig. 9)。

須恵器

杯蓋

天井部の平坦面が広いものとやや丸味をもつものが認められ、口縁端部の処理の仕方によって3形態がある。

(1) 天井部はやや丸くふくらみ、天井部と口縁部を区画する稜は若干鈍く丸みをもつ。口縁部は外方に開き、端部を丸くおさめる。天井部は幅の狭い時計回りの回転ヘラ削りにより3/4を施すが、シャープさに欠ける。口径12.4cm、器高4.4cm。

(2) 天井部は丸みをもち、2/3以上の時計回りのヘラ削りを施す。口縁部は垂直におり、端部を僅かに突出させ、凹部をとどめる。口径11.3cm、器高4.4cm。

(3) 天井部は平坦に近く、2/3以上に時計まわりのヘラ削りを施し、内面に不整方向の丁寧なナデを部分的にとどめる。口縁部は僅かに外方に開き、端部は凹面をなす。稜は上下の強いナデによりシャープに作り出されている。口径13.6cm、器高4.6cm。

(4) 天井部は丸みを持つものと思われ、逆時計回りのヘラ削りを2/3程度とどめる。口縁部は僅かに外方に開き、端部は凹面をなし段を有する。稜は小さく鋭く作り出されている。口径11.5cm、残存高4.4cmを測る。

杯身

立ち上がり部は高く、やや内傾するものである。いずれも平坦な底部をもつものと考えられ、2/3程度の回転ヘラ削りを施す。(5・7・8)は時計回り、(6)は逆時計回りのヘラ削りである。

(5) 端部は僅かにヨコナデにより内傾し、丸みをもった方形状を呈する。受部は水平に

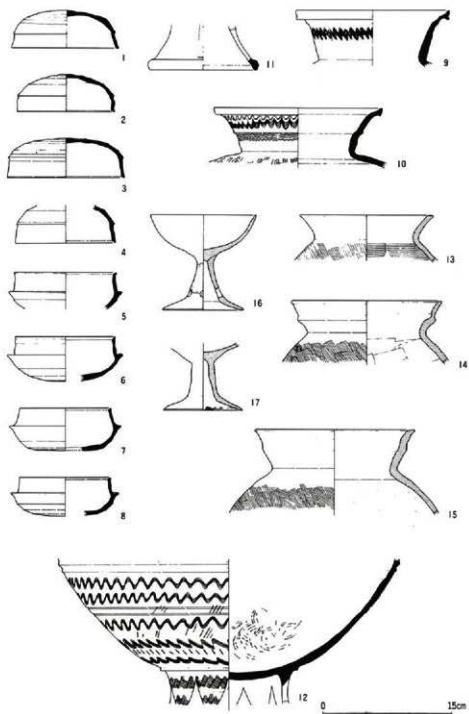


fig. 9 向寺山遺跡第4調査区出土土器実測図

のび、下方を強いヨコナデによりくぼめている。口径11.8cm、残存高4.4cm。

(6) 底部は僅かに丸みをもつ。直立気味に立ち上がり、端部は僅かに外反する。ヨコナデにより内向する面を形成する。受部は外上方にのび、丸みをもって取める。口径11.5cm、器高5.2cm。

(7) 平坦な底部をもつ。端部は凹面を形成し内傾する。受部は水平にのび、端部を尖り気味に取める。受部下半に強いヨコナデの痕跡をとどめる。口径10.5cm、器高4.9cm。

(8) 底部を平坦に取める。立ち上がりは僅かに内傾し、端部は浅い凹面をもち内向する。受部は外上方にのび、丸く取める。口径10.5cm、器高4.5cm。

頸

(9) 頸部は外上方に立ち上がり、口縁部は緩やかに屈曲し端部を上下に拡張する。端面に1条の縦凹線を巡らせる。口縁部頸部境にはヨコナデによる断面三角形の稜を形成している。頸部外面には1条の櫛描波状文を施す。口縁部内面には強いヨコナデによる2条の幅広い凹部をとどめる。口径17.8cm。

(10) 頸部は緩やかに外半し、口縁部は僅かに屈曲する。端部を上下に拡張する。頸部外面中位に断面三角形の凸帯をめぐらせ、上下に櫛描波状文を配する。頸部内面は丁寧なヨコナデにより仕上げている。体部外面には7条/cmの平行タタキをとどめ、内面はタタキ目を入念に擦り消している。胎土中に砂粒を多量に含み、やや軟質である。口径19.4cm。

高杯脚部

(11) 脚部は外上方に開き、端部を玉縁状に丸く取める。台形状のスカシを4孔施すものと考えられる。内外面とも丁寧なヨコナデにより調整している。

器台

(12) 台部と脚部の一部を遺存する。台部は内彎気味に外上方に立ち上がる。台部上位にヨコナデによる凸帯を2条形成し、中位には2条の弱い凹線が認められる。体部外面は平行タタキ擦り消しののち、凸帯下に2条の櫛描波状文、凹線下に3条の櫛描波状文とヘラ状圧痕を施す。内面は同心円タタキののち、入念に擦り消している。台部脚部境には断面三角形のシャープな貼付け凸帯をほどこす。脚部外面には2条の幅細の櫛描き波状文をとどめ、バチ形に開く三角形スカシを6孔配する。胎土焼成とも極めて良好である。

土師器

甕形土器と高杯形土器が出土している。

甕形土器

⑬ 緩やかに「く」の字状に外反する甕形土器で、口縁端部は僅かに外方に拡張し、平坦面を形成する。口縁部内外面をナデて調整する。体部外面は右下がりの粗いナメハケ、内面は9条/2cm幅単位のヨコハケで仕上げる。

(14・15)は緩やかに外上方に広がる二重口縁をもつ甕形土器であるが、⑭は口縁部の屈曲が強い。いずれも端部を僅かに外反気味に取めており、⑮は平坦面を形成している。⑭は体部外面12条/2cm幅単位の粗い右下がりのナメハケ、内面は1.8cm幅のヨコヘラケズリ、⑮は6条/cmの右下がりのナメハケ、内面は幅広のヨコヘラケズリにより調整する。

高杯形土器

内湾気味に立ち上がる碗形状の杯部と細い脚柱から強く屈曲して外方に広がる脚部とかなる。⑯の口縁端部は尖り気味におさめており、内外面をナデて調整する。脚柱外面にはヘラケズリを施し、脚部との境に外側から4孔配する。⑰の脚端部内面にはヨコハケの痕跡をとどめる。

以上の資料のうち須恵器を中心にみておくと、大要3時期のものが混在しているようである。もっとも古い時期に属すものとして⑱の器台があり、陶色の編年観に従うとTK73-216の間、①の杯蓋、②の高杯にはTK216、(2・3)の杯蓋、(5・6・7・8)の杯身、(9・10)の甕にTK208、④の杯蓋に最も新しいTK23の年代が与えられる。土師器もこの年代幅の中に収まるものと考えられる。図示した資料の他、本土器溜りからは製塩土器・滑石製管玉・滑石製双孔円板などが出土している。

ところで、徳島県でのいわゆる古式須恵器はこれまでに鳴門市日出遺跡(杯・甕)⁽¹⁾、同福池遺跡(杯)⁽²⁾、同宝幢寺3号墳(甕)⁽³⁾、同天河別神社4号墳(器台・甕・杯・高杯)⁽⁴⁾、同萩原墳墓群(甕・杯)⁽⁵⁾、板野郡栗沢神社古墳群(甕)⁽⁶⁾などに出土例があるにすぎない。これらはいずれも鳴門海峡から旧吉野川河口に沿った阿讃山麓南裾に集中しており、徳島県での古墳密集地帯のひとつである鳴門市大麻町の古墳群地帯に限定されることをかつて予想した⁽³⁾。日出遺跡・福池遺跡が製塩遺跡である以外はいずれも古墳に供献されたものであり、従来最も古い時期に把握された萩原墳墓群出土の甕にTK208、宝幢寺3号墳に同じくTK208

の年代が与えられる以外はいずれもTK23の段階に属すものである。当該時期の須恵器を出土する集落遺跡はこれまで例がない。

これに対し本遺跡出土の資料は従来出土例のない地域での出土であり、さらに徳島県内では異例の古さを示す段階の資料を含んでいることが確認された。本遺跡は眉山南麓地域園瀬川に北面した標高27mの尾根先端部に位置しており、奈良県布留遺跡第Ⅱ地点⁽⁷⁾などに共通する極めて祭祀の様相の濃い遺構と捉えうる。本遺跡出土資料は胎土中に砂粒を多く含むものであり、旧吉野川北岸出土のものに若干の差異があるものの、同じく陶邑古窯址群からの搬入品と考えられる。今回、陶邑古窯址群での須恵器製作手法の確立以前の資料が確認しえたことは、前方後円墳や円墳を採用し、バリエーションのある埋葬施設を有する旧吉野川北岸河口の古墳群地帯と対照的な、恵解山古墳群造営以後の箱式石棺が卓越する当該地域の古墳群造営集団の性格を考える上で重要な知見になったといえよう。

註)

- (1) 森 浩一・白石太一郎編『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』1968 同志社大学文学部文化学科
- (2) 昭和53年度調査、未報告資料
- (3) 菅原康夫編『中内遺跡』1981 徳島県教育委員会
- (4) 菅原康夫「天河別神社古墳群調査概報—県道鳴門・池田線改良工事に伴う調査—」1980 徳島県教育委員会
- (5) 菅原康夫編『萩原墳墓群』1983 徳島県教育委員会
- (6) 筆者らの表採資料による。
- (7) 高野政昭「布留遺跡出土の初期須恵器」『陶邑』Ⅲ 大阪府文化財調査報告書第30輯 1978 大阪府教育委員会
- (8) 陶邑古窯跡の製品以外では、天河別神社4号墳出土資料のうち、器台には器壁に黒灰色の自然釉をとどめるものがあり、形態・技法とも明らかに他の資料と異なるものがある。これについては讃岐産の製品である可能性を考えておきたい。

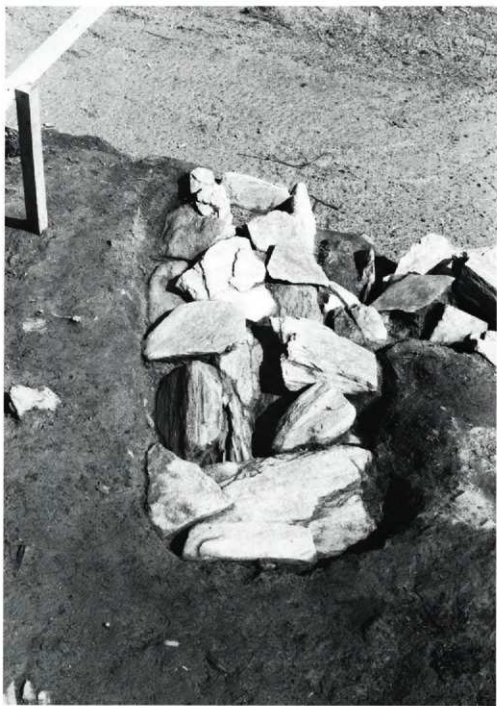
版 圖



調査前地形状況 (上) 1・2号石棺横石検出状況 (下)(南より)



1号石棺横石検出状況(南より)



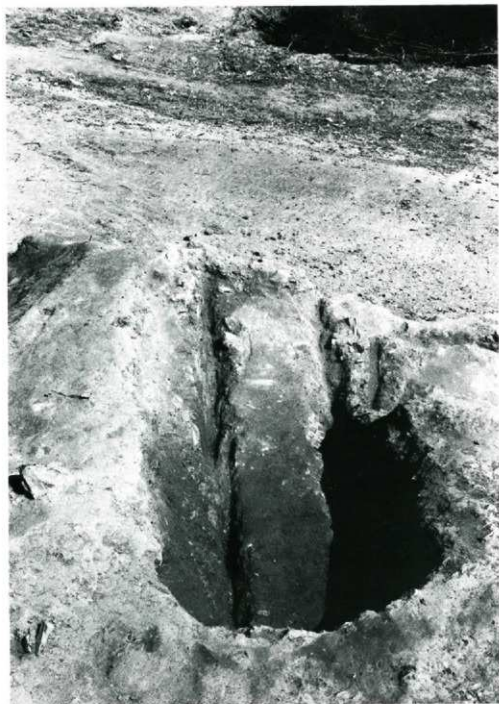
1号石棺蓋石検出状況（南より）



1号石棺蓋石検出状況（南より）



1号石棺棺身検出状況（南より）



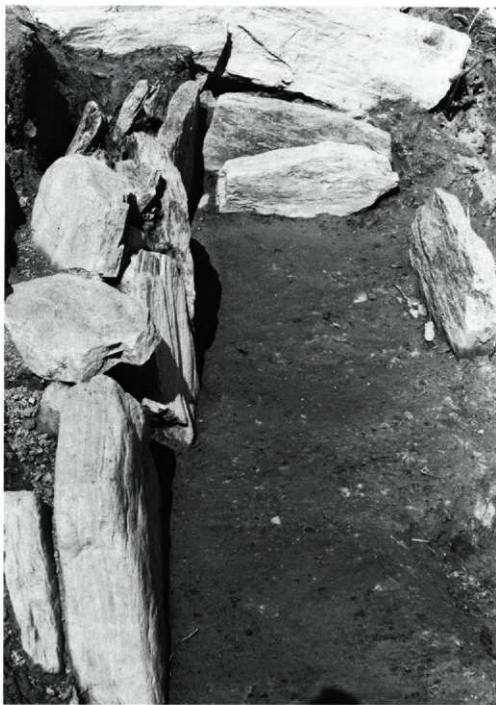
1号石棺棺材据え置き痕検出状況（南より）



2号石棺積石検出状況（東より）



2号石棺蓋石検出状況（東より）



2号石棺棺身検出状況（東より）



2号石棺棺身検出状況（西より）



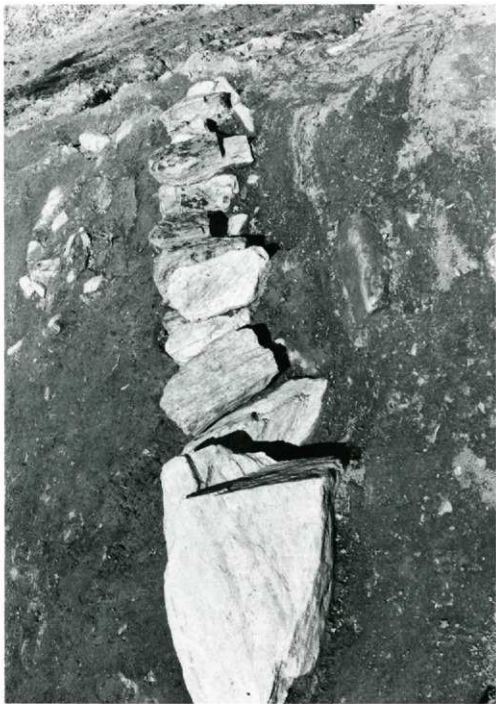
2号石棺棺材据え置き痕検出状況（西より）



列石検出状況全景



列石換出状況細部



列石検出状況（南より）



1・2号石棺全景（南より）



1・2号石棺全景(南より)

徳島県文化の森総合公園建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和61年度
(1986)

発行 昭和 62 年 3 月 31 日
編集 徳島県教育委員会文化課
発行 徳島県教育委員会
印刷 徳島県教育印刷部